

は、能く其の時の氣分を言ひ現はしたものである。平和な家を訪れた人は皆春風の中に居たやうな氣になつて歸つて行くにちがひ無い。されば斯ういふ家には自然と芽出たいた事が多く集つて來るであらう。それは宛も日當りのよい所は、花も美しく咲き、聲の美しい鳥も多く群れつどうて來ると同じやうなものである。

次に『几席を正し』といひ『飲食を潔くす』といふは、家の中の齊頓と食物に對する注意とが大切なことを説いたので、別に説明を加へるにも及ぶまい。其の次には『布施を念ひ』とあるが、是れは婦人として殊に大切なことである。布施に三種あることは前にいつたが、此處でいふ布施は主として財施、即ち世間の乏しい人に惠を施すことを指すのである。自分が華美な生活をして居れば、人を救ふ餘裕は無くなる。自分の家の生活を出來るだけ簡素にしてたとへ僅かでも布施をするやうに心掛くるは、良き妻の爲すべき事である。布施が菩薩行の根本であることは前にも度々いつた。凡夫の心はいつも煩惱で充されて居るが、凡ての煩惱の中に於て殊に去り難きものは貪欲である。

貪愛を以て自ら蔽ひ盲瞶にして見る所無し。

と法華經の方便品にある。互ひに貪欲を去り難きが爲に、地位でも勢力でも其の他のものでも

常に争ひあひ奪ひあふことが絶えぬ。切角得たものでも、又他の人に奪はるゝといふ懸念があるから互ひに片時も心の安まる隙はない。

苦を以て苦を捨てんと欲す。

とは誠によく凡夫の境界を形容したる語である。此の如き煩惱の毒を除かうとするには、努めて布施を行するより外はない。濡れた物を火の傍へ置けば自然と乾く、常に努めて布施を行じ布施することに大なる悦びを感じるやうなれば、貪欲の念は自ら心中より消え去るのである。されば

布施することが自分の爲である

と考へて、之に對する報を望むには及ばぬのである。若し一家の妻たる者が常に布施に心懸けて居れば、家の中の者が皆優しい心になり、貪欲の念に驅られて争ひあふといふやうな事は全く無くなるであらう。妻が常に布施を念ふことは實に其の一家を幸福ならしむる所以といふべきである。

終りに『夫に供養す』とあるのは、夫の衣食に就て不自由のないやうに世話をすることであるが、それが自分の責任であるといふだけの冷たい心持ではならぬ。其の世話をすることに悦

びを感じて居るのでなければ、頼もしい妻とはいはれぬ。元來此の供養といふ語には、感謝若くは崇敬の意が含まれて居るのである。夫に衣食の不自由のないやうに世話をするのは、即ち夫をして其の身心を健かに保たしめ、世のため人のために力を盡させたい爲であるから、妻たる者は自分の仕事に對して満足を感じて居なければならぬわけである。自分が直接に天下國家の爲に盡さずとも、夫が天下國家のために力を盡せば自分が盡すのも同様である。夫が一人でやることは二人分の仕事であると思へば、満足せざるを得ぬ筈である。善き妻は即ち善き國民である。善き妻を持つものはいつも健かな身と心とを以て國に盡すことが出来る。國家の健全なる發達の爲には、善き妻の努力が實に缺くべからざるものである。されば妻が其の夫の世話をするのは、

國家の健全なる發達の土臺を作つて居るのである。

善き妻はいつも斯る自覺をもつて、其の夫に供養するのである。其の胸にはいつも『有難いとである』といふ念が絶えぬのである。

以上で善生子經の中に擧げられたる十四事は終るのであるが、六方禮經の中に擧げられたる『婦の夫に事ふる五事も』大體之と同じことである。唯だ其の中に

心を外夫に姪することを得ず。罵詈せらるゝも還し罵りて色を作すことを得ず。

とあるのが特に注意を要する。妻として貞節を守らなければならぬのは勿論の事であるが、たとへ其の行の上に一點非難すべき所がなくても、其の心を夫より以外の男に移すならば、是れ大なる罪を犯せるものといふべきである。佛敎に於ては心を正しくすることを何よりも大切とするので、

心相は是れ大患の本なり、是の心をして自在なるを得しめざれ。(寶雲經)

といふが如き訓戒は多くの經典の中に見出さるゝ所である。行に現はるゝ所は人の目に觸るゝのであるが、心の中までは他人が窺ひ見ることは出来ぬ。併し心が一たび亂るゝならば行も亦隨て壞るゝに至るであらう。

一心に意を制して身を端しくし行を正しくせよ。(無量壽經)

とあるのは誠に良き訓戒である。又夫に罵られても之に對して罵り返したり、怒りの色を顔に現はしたりするなといふ訓戒も妻たる者の常に心に銘すべき所である。是れは甚だ不公平な教へのやうに思はれるかも知れぬが、一家の平和を保つ爲には極めて大切な事である。世間に出て多くの人を相手にして居ると

心が、自然と荒んで来る。世間は極めて複雑であつて、心の曲つた者も決して少くはない。其等の者の相手になつて居ると、腹の立つやうな事も屢々起るものである。佛菩薩のやうな心をもつて居れば、如何なる場合でも怒りもせず恨みもせずに居られやうが、凡夫では其處が甚だむづかしい。それで多くの男は終日外で働いて、傷いた心をもつて其の家へ戻つて来るのである。併し家の中が平和で且暖かであれば、其の傷ついた心も癒されて翌日は又勇ましく外へ出て行くことが出来る。

濁つた血は心臓の中で浄められて動脈を傳はつて身體中を循環する。

若し心臓といふものが無かつたら、吾等の身體は片時も健全には保たれぬであらう。吾等の家は宛も心臓の如き働きを爲すものである。吾等は家へ戻つて自分の心を洗ひ浄め、翌日は又明るい気分になつて働きに出るのである。斯くも大切な家を預かる妻は、堪へ難いことにも能く堪へて、其の夫の心を明るくし、淨くしてやることに努めなければならぬ。罵られても笑つて之に對するといふ心懸けがあつてこそ、眞に頼もしい妻と稱せらるべきである。

夫婦の道に就ては先づ此邊に止め、次には朋友の道に就て釋尊の教へられた所の二三を述べることにしやう。釋尊が友を擇むの大切なことを説かれた語は、法句喻譬經に據つて前にも擧

げたが、佛本行經に記されたる所は更に詳細である。釋尊は或時難陀と共に迦毘羅城に入り魚を賣る店の前を過ぎられたが、彼に向つて『汝此の店に入つて彼の魚の上に敷ける茅を把れ』と命ぜられた。難陀が命の如くに之を把つた時釋尊はまた『汝暫く之を持ちて後地に放てよ』と命ぜられた。難陀が命の如くにした時に釋尊は『汝自ら手を嗅げ、汝の手に何の氣ある』と問はれた。難陀は『たゞ不淨の臭氣あるのみ』と答へた。釋尊は難陀に向つて、實に然り、若し人惡知識に親み近づけば、惡業に染み習ふことまた此の如し。と教へられた。それより香を賣る店の前を過ぎられた時、また難陀をしてその店に入つて香を盛つた囊を把らしめ、『汝が手に何の氣ある』と問はれた。難陀は『此の手の香氣微妙なること量るべからず』と答へた、因て釋尊は實に然り、若し人諸の善知識に親み近づき、常に自ら隨從して其の徳に染み習はゞ、必ず大名を擧ぐることを得ん。と教へられた。友の擇まざるべからざるは、誠に此の通りである。

道を學ぶためには固より良き師を求めなければならぬが、良き友を得て互ひに勵ましあひ又互ひに戒めあふのも極めて貴い事である。釋尊は其の入滅に際して、諸の弟子達の別を惜ん

で歎き悲むのを慰めて、

汝等比丘憂惱を懐くこと勿れ。若し我世に住すること一劫なるも、會ふものは亦當に滅すべし、會ひて離れざるものは終に得可からず。自ら利し人を利するの法は皆具足しぬ。若し我久しく住するとも更に益す所なし。應に度すべき者は、若は天上人間皆悉く已に度しぬ。其の未だ度せざる者も亦已に得度の因縁を得たり、今より已後、我が諸の弟子展轉して、之行はゞ、則ち是れ如來の法身常在りて滅せざるなり。(佛遺教經)

と仰せられた。即ち釋尊は其の入滅の後に於ても、遺されたる御弟子達が互ひに友として扶けあひ、協力一致して行きさへすれば、釋尊の御在世と同様に此の貴い佛法が世に弘まつて行くであらうと確信せられたのである。まことに良き友を得ることは自己一人の幸であるのみならず、道を弘め世を益するためにも缺くべからざる事である。

釋尊の御弟子の中で舍利弗と目連とは特に重んぜられて居たもので、智度論の中にも『舍利弗は是れ右面の弟子、目連は是れ左面の弟子』とある。釋尊の化導を賛けたる功も少からぬ人々であつた。此の二人は共に非凡なる天分をもつて居たには違ひないが、其の互ひに親友として、常に扶けあひ勵ましあつて居たことが、其の人物を大成せしむるために大なる力となつ

て居たことも疑ひなき事實である。二人とも最初は婆羅門教に精通して世間に學者として仰がれ、共に多くの弟子をもつて居た。併し二人とも常に心中に不安の念が絶えなかつた。それで二人は互ひに其の心持を少しも隠さず打明けあひ、『二人の中の何れか一方が良し師に逢つて教へを聽くことが出来たなら、必ず他の一人にも之を告げて、共に道を學ぶことにしやう』と固く約束をした。然るに舍利弗は王舍城に於て馬勝比丘にあひ、其の悠揚として迫らざる態度に感じ入つて、種々問ひ訊した上、其の釋尊の御弟子であることを知り、(此の事は前にも一度引用したやうに覺えて居る。)約束の通り目連と共に佛門に身を投じ、二人の弟子達も皆共に佛弟子となつた。此より後も二人は相砥礪して修行に力を用ゐたので、舍利弗は智慧第一、目連は神通第一と稱せらるゝまでになつた。此の二人の如きは良き交友の模範と稱せらるべきものである。孔子の言に、

與に共に學ぶべきも、未だ與に道に適く可からず。與に道に適くべきも、未だ與に立つ可からず。與に立つ可きも、未だ與に權す可からず。

とある。たとへ道を學ぶとも、その學ぶことの未だ精しからぬ者は共に道を行ふことは出来ぬ又道を行ふ志があつても、其の信ずる所の篤からぬ者は共に世間に立つて大事に當ることは

出来ぬ。共に世に立つことは出来ても、其の智の極めて熟せる者でなければ、共に變に臨んで宜しきに適ふやうな行は出来ぬといふのである。權とは輕重を量つて能く其の宜しきに適ふことである。命利弗と目連の如きは共に學び、共に行ひ、共に世に立つて道を弘め、共に善巧方便を以て多くの衆生を感化したのである。斯る交友を得たことを、二人共に深く満足して居たことであらう。

吾等は固より舍利弗や目連とは甚しく懸隔のある者であるが、志を同する友を得て互に相砥礪するならば極めて幸多く感ずることであらう。併し良き友を得ることは容易でない。それで四分律には

處々に遍く伴を求めて己に稱ふもの有ること無ければ、獨り我が心を堅固にして、愚者と同居すること勿れ。

といつてある。孔子も

忠信を主とし、己に如かざる者を友とすること勿れ。

と教へた。併し互ひに自己より勝れる人でなければ友とせぬといふ考へで居たならば世間の智の足らぬものは友とすべき人が一人もなく、永く救はれぬことになりはせぬか。然るに安井息

軒は之を説明して、

己に如かざる者は容れて之を誨ゆ。慕尚して以て友と爲さざるなり。

といつて居る。是れは如何にも尤なる説である。又人は互ひに長ずる所があるから、たとへ或る點に於ては己に及ばぬ者でも、又他の點に於ては己に勝れることもある。此の如きは『己に如かざる者』とはいはれぬ。要するに其の志を同する者が互ひの長所を認めあひ、互ひに扶けあひ勵ましあつて向上を圖れば宜いわけである。餘りに潔癖で、人と和ぎあふことの出来ぬのは不幸である。

因果經の中に友として守るべき道を三項に分けて擧げてあるが、まことに要を得たる教へである。それは即ち次の如くである。

一には失あるを見れば輒ち相曉諫す。二には好事あるを見れば深く隨喜を生ず。三には苦厄に在りとも相棄捨せず。

此の如くにして初めて友として交るかひがあるのである。併し此の三事ともに之を言ふは易く之を行ふは甚だ難い。涅槃經にも『慈無くして詐り親むは是れ彼が怨なり』とある如く、人の過失を諫めずして親しき交りを續くるのは眞の友情とはいはれぬ筈である。併し誰でも自分の

缺點を指摘された時には餘り愉快には感ぜぬものであるから、友人の缺點を見出して之に忠告を與ふるに當つては、彼の爲に怨まれても已むを得ぬといふ覺悟をもたなければならぬのである。これが眞の友たる道であるが、此の心得のあるものは少い。孔子も

便辟を友とし、善柔を友とし、便佞を友とするは損なり。

と戒められた。便辟とは唯だ言を巧にして機嫌を損はぬやうにすることである。善柔とは外面だけ其の意に逆はぬやうに努むることである。便佞とは言を巧にして意を迎へながら少しも親切の心の無いことである。此の如き輕薄の心を以て相交るものが多いから世間は益々面倒になるのみである。若し過失のある時に面を犯して諫むるほどの誠心のある友が一人あれば、頼もしからぬ幾百人の友をもつよりも遙に幸といはなければならぬ。

又友として相交る者は、互ひに好い事のあつた時に喜びあふのが當然のことであるが、凡夫の習ひとして嫉妬の念あるを免れず、人の好い事に不快を感じ、甚しきは之を妨げんと圖るものさへある。聖徳太子が憲法の第十四條に

群臣百寮嫉妬有ること無かれ、我既に人を嫉めば人も亦我を嫉む。嫉妬の患は其の極を知らず。

と戒められた所は何人も共に嚴しく守るべきである。又頼もしい友であれば固より貧富によつて其の志を變ゆべき筈は無いが、世俗は名利の念によつてのみ動く習はしである。されば富貴の門には人が多く集るけれども、其の家が衰へて行けば誰も立寄る人の無くなるのが常である。曾て親友と稱した者も忽ち路傍の人となつてしまふ。唯だ此經に説かれたやうに『苦厄に在りても相棄捨てず』といふ志があつてこそ、初めて眞の友と稱せらるべきである。唐の柳子厚は劉禹錫と親しい友であつたが、子厚が柳州の刺史を命ぜられた時に禹錫は播州の刺史を命ぜられた。然るに播州は非常に僻遠の地で且禹錫には年老いたる母親があつた。子厚は之を聞いて『播州は人の住み得る土地ではない。どうして年老いた親を伴つて行かれるものか』といつて、自分が彼に代つて播州へ行き、禹錫を自分の任地の柳州へ遣るやうにと朝廷へ願ひ出した。子厚の斯く友情に敦いことが有司の心を動したと見えて、禹錫は改めて連州の刺史を命ぜられ、子厚は元の通り柳州へ赴くことになつた。韓退之は柳子厚の墓誌に此の事を詳記して、嗚呼士窮して乃ち節義を見る。今夫れ平居里巷に相慕悦し、酒食游戲相徵逐し、讒々として強て笑語して以て相取下し、手を握り肝肺を出して相示し、天目を指して涕泣し、生死にも相背負せざるを誓ひ、眞に信ず可きが若きも、一旦小利害の僅に毛髮の比の如きに臨めば、

眼を反して相識らざるが若く、陷穽に落るも一たび手を引て救はず、反て之を擠れ、又石を下す者皆是れなり、此れ禽獸夷狄も爲すに忍びざる所なるべし。而るに其の人自ら視て以て計を得たりと爲す。子厚の風を聞かば亦以て少しく愧づべし。

といつた。まことに世俗の状態をよく描き盡したる文である。世俗が此の如くであるが故に眞の親友の貴さが殊に強く感ぜらるゝわけである。

但し人を識るといふことは決して容易でない。友として頼むべからざる者を誤つて友とした爲に大なる累を受けた例は世間に少くない。それで字經には友に四種あることを説いて、其の選擇を慎むべきことを教へてある。即ち其の文には、

友に四品有り、知らざるべからず。友に華の如きあり、友に稱の如きあり、友に山の如きあり。友に地の如きあり。

とある。第一に華の如き友といふのは甚だ頼もしからぬ者である。華は美しく咲いて居る時は、誰も之を賞して髪にも挿むが、凋んで色が悪くなれば忽ち之を棄てしまふ。斯ういふ心を以て交るのが華の如き友である。即ち「富貴なるを見れば、即ち附き、貧賤なれば則ち棄つ。是れ華友なり」といつてある。第二に稱といふのは即ち秤のことである。秤の如き友といふは利

害損得ばかり考へて居る者で、これも甚だ頼もしからぬ友である。即ち「物重ければ則ち低れ物軽ければ則ち慢る。是れ稱友なり」といつてある。第三に山の如き友といふは甚だ頼もしい者である。山には木も草も生え、鳥も獸も養はれて居る。此の如くに己の力の許す限りに於て凡ての人を養ひ護る人は山の如き人である。之をこそ友として頼むべきである。即ち「己貴ければ能く人を榮えしめ、富貴同しく歡ぶ。是れ山友なり」とある。第四に地の如きといふは大が萬物を載する如くに私心なきことで、是れは人として最も頼もしい者で、此の如き友があれば實に生涯の幸である。即ち「一切之を友に頼ち、施給養護し恩厚くして薄からず、是れ地友なり」とある。山の如く地の如き友を得るのは何人も願はしいことであるが、各自に人と交はるに當つては山の如く地の如き心をもつやうに努むべき事である。白樂天は、

と詠じ、杜子美は

手を翻せば雲となり手を覆へば雨、紛々たる輕薄何ぞ數ふるを須むん。

と詠じたが、皆世間に華の如く稱の如き友のみ多いのを歎いたのである。

友として守るべき道を説かれた經典も多くある中で、六方禮經のは殊に懇切である。釋尊は

善惡種々の友あることを數へあげられて、其の善きものを選びべきことを説かれ、
我も善知識と相隨ひて自ら成佛を致せるなり。

と仰せられた。而して先づ善き友に四種あることを説かれた。それは

一には外には怨家の如くにして内には好意あり。二には前に於て直諫し後に於て其の人の善
を説く。三には病瘦せる時縣官其が爲に征すれば、憂へ訴へて之を解く。四には人の貧賤な
るを見て之を棄捐せず。常に念じて方便を求め、之を富まさんと欲す。

といふのである。先づ第一に外面を粉飾せずして内心に好意をもつのが眞に頼もしい友であ
る。「言葉多きは品少し」といふ諺もあるが、言を巧にして意を迎へんとする者には油斷がなら
ぬのである。孔子の言に

巧言令色鮮し仁。

とあるが、王肅は之を説明して『巧言には實無く令色には質無し』といった。朱子が『其の言
を好くし其の色を善くし、飾を外に致し、務めて以て人を悦ばせば、則ち人欲肆にして本心の
徳亡ぶ』といったのは更によく其の意を悉して居る。又同じく孔子の言に
剛毅木訥は仁に近し。

とあるが、楊氏の説明に『剛毅なれば、則ち物欲に屈せず、木訥なれば則ち外に馳るに至らず。
故に仁に近きなり』とあるのは能く其の意を悉したるものである。強いて其の意を迎へやうと
務めぬ故に、外面にはまことに愛相のないやうに見えるが、心には好意をもつて居るのが眞實
の友である。

又第二に擧げられたる所も、能く頼もしき友の本質を説き悉したるものである。人には長所
もあり又短所もある。聖人にあらざるよりは誰も完全なものはない。自分では充分考へてから
した積りでも、其の日常の行ひに過失のあるのは免れ難いことである。之を諫めて出来る丈其
の過失を少くさせるのが即ち親友の情誼である。又他人の前では其の人の長所を擧げて之を稱
揚し、出来る丈その人の信用の高まるやうにしてやるのも亦親友の情誼である。輕薄な者の爲
す所は多く之に反し、其の面前では之を稱讚し、陰では必ず其の非をあげて之を譏るものであ
る。曾子が

能を以て不能に向ひ、多きを以て寡きに問ひ、有れども無きが若く、實れども虚しきが若
く、犯さるゝも校せず。昔吾が友嘗て斯に従事せり。

といったのは其の友顔淵のことだといふが、顔淵の品性の高かつたことは勿論であるけれど

も、曾子が斯くまでに之を稱揚して、親友の美を彰はしたのも尤も尊敬すべき事である。第三に擧げられたのは、友人の困厄を救ふことである。征するといふは租税を取立つることである。友人が病氣に罹つて困つて居るところへ、縣の役人が租税を取立てに來たといふやうな場合に、彼に代つて細かに其の事情を訴へ、免除されるやうに謀つてやるのである。第四には友人が貧しくなつた時に、何とかして其の窮境を脱せしめんが爲に力を盡すのである。貧しくなつても見棄てぬといふだけでも頼もしい友であるが、更に進んで其の貧苦を救ふために力を盡すならば最も頼もしい、貴い友といはなければなるまい。管仲と鮑叔との交は親友の範とせられたものであるが、管仲は鮑叔の友情に厚いのに感激して、

吾始め困せる時嘗て鮑叔と賈し、財利を分つに多く自ら取れるも、鮑叔我を以て食れりと爲さざりき。我が貧しきを知ればなり。吾嘗て鮑叔の爲に事を謀りて更に窮困せるも、鮑叔我を以て愚と爲さざりき。時に利と不利と有ることを知ればなり。吾嘗て三たび仕へて三たび逐はれしも、鮑叔我を以て不肖と爲さざりき。我が時に遭はざるを知ればなり。吾嘗て三たび戦ひて三たび走りしも、鮑叔我を以て怯と爲さざりき。我に老母有ることを知ればなり。公子糾敗れしとき召忽は之に死し、吾は幽囚せられて辱を受けしも、鮑叔我を以て耻無しと

爲さざりき。我が小節を羞ぢずして功名の天下に顯れざるを恥づることを知ればなり。我を生む者は父母我を知る者は鮑子なり。

といつた。鮑叔は管仲を齊の桓公に奨めて宰相とし、自ら其の下に立つて國事に盡した。されば司馬選は之を稱めて、

天下管仲の賢を多とせずして、鮑叔が能く人を知れることを多とす。

といつた。此の鮑叔の如きは眞に頼もしき友といふべきであらう。六方禮經には尙ほ善き友に就て三たび繰返して説いてある。而して其の度毎に四事が擧げられてある。即ち先づ四事を擧げて、

善知識に亦四輩あり。一には人の貧窮卒乏なるを見ては生を治めしむ。二には人と諍はず。三には日々に往きて之を消息す。四には坐起常に相念ふ。

とある。生を治めしむといふは生計の立ち行くやうに援助してやることである。又人と諍はずといふは利害得失を元として争はぬことである。彼の過失を匡さんが爲に直諫することは勿論友人として當然の行である。其の他の事は特に説明するまでもあるまい。次に又四事を擧げて一には吏の爲に捕へられんとすれば將る歸りて之を藏匿し、後に於て之を解決す。二には病

瘦することあれば將の歸りて之を養ひ視る。三には死亡すれば棺斂して之を視る。四には已に死して後其の後を念ふ。

とある。これも大體説明を用ゐずして能く分ると思ふが、其の後を念ふといふのは死んだ人の遺族を保護してやることである。次に又四事を擧げて、

一には鬪はんと欲すれば之を止む。二には悪知識に隨はんと欲すれば諫めて之を止む。三には生を治むることを欲せざれば勸めて生を治めしむ。四には經道を喜ばざれば教へて之を信ぜしむ。

とある。經道といふは即ち佛法のことである。以上六方禮經に數へ擧げられたる所は凡て十六項であつて、之を綜合して考へて見ると、眞に友として頼むべき者は如何なる人であるかを能く明かにし得らるゝやうである。

又四分律の中には凡て七項を擧げ、『此の七法を具へて方に親友を成す』といつてあるが、誠に簡にして要を得たる説である。前の六方禮經のと重複する點も無論あるが、今其の七項を掲げやう。即ち

一には作し難きを能く作す。二には與へ難きを能く與ふ。三には忍び難きを能く忍ぶ。四に

は密事を相告ぐ。五には互ひに相覆藏す。六には苦に遭ひて捨てず。七には貧賤を輕んぜず。

といふのである。作し難きを能く作すといふは、如何に困難な事でも友人の爲になることであれば力を盡すを厭はぬのである。斯くてこそ眞の親しい友といひ得らるのである。第二、第三に數へられたる、與へ難きを與へ、忍び難きを忍ぶといふことも眞に頼もしい友ならば必ず出來なければならぬわけである。顏淵と子路とが孔子と共に居た時に、孔子が『各其の志す所をいへ』と促されたが、子路は己の志とする所を述べて、

願はくば車馬衣輕裘、朋友と共にし、之を蔽りて憾むこと無からん。

といつた。是れは信義を重んずる子路その人の性格がよく現れて居て、如何にも貴い語である。自分の馬でも車でも乃至は衣服でも皆朋友に貸し與へて、破れても少しも之を憾まぬといふは眞に頼もしい心である。此の心があれば、朋友のために如何なる困難をも冒すことが出来るのである。衛國に内亂のあつた時に、子路は衛に仕へて居たのであるが、偶然國外に赴いて居て其の内亂に與らなかつた。併し其の報を聞いて直ちに馳せて國に歸つた。城門を入らんとする時に子羔に逢つた。子羔は『子還る可し、空しく其の禍を受くること勿れ』といつたが、

子路は「其の食を食する者は其の難を避けず」といつて肯かず、終に國難に殉じて死んだ。此の如くに義を重んずる人こそは、眞に友として頼もしい人であつたに違ひない。

第四に密事を相告ぐるといふは、相信する朋友同士の間には何等の秘密もないことである。如何なる密事も語りあふほどで無ければ、艱難を共にすることの出来やう筈はない。第五に相覆藏すといふは、友人に何か過失のあつた時には、それが世間へ漏れやぬうに努めて之を隠し、又友人に災難のあつた時には之に出来る丈の保護を加へるのである。又第六、第七に數へられたる、苦に値ひても捨てず、貧しくなつても輕んぜぬといふことは最も必要で、これこそは眞に友情を全うする所以である。獨逸のワイマールには詩人ゲーテの住んで居た家とシルレルの住んで居た家とが共に立派に保存されてある。此の二大詩人は時を同らして此のワイマールに住んで居たのであるが、ゲーテは國王の信任を得て内外の大事に當り、當世に並びなき權勢を得た身分であつた。之に反してシルレルは地位も勢力も全くなく、至て貧しい生活をして居た。然るに此の二人は少しも隔てなく、常に親友として相交はり、ゲーテは「吾遠くシルレルに及ばず」といひ、シルレルは又常にゲーテに及ばずといつて居た。此の二人の相推し相重んじた心を現はすために、二人が月桂冠を譲りあつて居る銅像がワルマールの最も繁華な所に

建てられてある。自分は去年の夏ワルマールを訪れて、此の銅像の下に立ち

二人の親友として睦みあつて居た昔を想ひ出して、覺えず感激の涙を注いだ。

併し是れは至難の事と思はれる。孔子の弟子の中で子貢と原憲とは共に屈指の人であつたが、孔子が死んで後に原憲は田舎に隠れて至て貧しい暮しをして居た。其の時に子貢は衛國の宰相となり大得意で原憲の家を尋ねた。併し原憲の姿があまりに見窶しかつたので、子貢は從者等に對しても耻かしくなり「夫子豈に病むか」といつた。時に原憲は之を聞いて、吾之を聞く、財無き者之を貧しといひ、道を學びて行ふこと能はざる者之を病むといふと。憲が如きは貧しきなり、病むには非ず。

といつたので、子貢は深く慙ぢて去り、終身其の言を過てるを思ひ出して自ら責めたといふことである。子貢の如き賢人でも此の過がある。併し之に對して直言した原憲は頼もしい人である。その忠言を幾度も思ひ出して自ら責めた子貢も流石に賢人である。

佛の正法が汎く世に弘まり一切衆生を救ふに至らんことは、専ら共に佛の正法を信する人々が力を協せ心を一にし、勵ましあひ又戒めあつて修行を怠らぬに依るもので、即ち善き友の力といふべきである。前にもいつた通り佛法僧の三を三寶と稱する中にも、僧とは僧伽といふ梵

語を略したので、僧伽とは和合の義である。即ち和合して佛法を究め、又佛法を弘むる人々のことである。大乘義章に、

衆の行徳乖かざれば、之を名けて和を爲すなり。

とある如く、人々が如何に多くても、貴い佛法の信仰によつて統一せられ、其の心互ひに相乖かぬ故に之を稱して『和合する人々』といふのである。要するに僧といふのは善き友の集つたものに外ならぬのである。宋の歐陽修は朋黨論を作つたが其の劈頭に、

臣聞く朋黨の説古より之れ有り。惟だ人君の其の君子と小人とを辨ずるを幸とするのみ。大凡君子と君子とは道を同うするを以て朋と爲り。小人と小人とは利を同うするを以て朋と爲る。此れ自然の理なり。然れども臣謂へらく小人には朋無し、惟だ君子には之れ有り。其の故何ぞや。小人の好む所のものは利祿なり、貪る所のものは貨財なり。其の利を同うするの時に當つて、暫く相黨引して以て朋と爲る者は僞なり。其の利を見るに及びては則ち先を争ひ、利盡れば則ち交疎なり。甚しき者は反て相賊害し、其の兄弟親戚と雖も相保つこと能はず。故に臣謂へらく、小人には朋無し、其の暫く朋と爲る者は僞なりと。君子は則ち然らず。守る所のものは道義行ふ所のものは忠信、惜む所のものは名節なり。之を以て身を修む

れば則ち道を同うして相益し、之を以て國に事ふれば則ち心を同うして共に濟し、終始一の如し。此れ君子の朋なり。……周武の世其の國の臣三千人を擧つて共に一朋たり。古より朋たるの多くして且大なる周に如くは莫し。然して周は此に由りて興る者、善人は多しと雖も厭はざるなり。

といつたが、眞によく和合の義を説明して居る。名利を求むるが爲の和合は眞の和合ではない。唯だ道を信ずるによつての和合のみが眞の和合である。眞に相和せるものが即ち眞の友である。

希臘のソクラテスは常に自ら『青年の人々の友』と稱して居た。彼は當世に稀なる賢人として仰ぎ貴ばれて居たけれども、自ら人の師として任ずることなく、唯だ青年の友たらんことを期したのである。是れは決して彼の謙辭ではなく、眞實彼はさう思つて居たのである。彼は其頃勢力のあつた詭辯派の人達と自身とを比較して『彼等は何も知らぬ、さうして自分達が何も知らぬといふことに氣附かぬ。私も何も知らぬ者であるが、私は自分の何も知らぬといふことに氣附いて居る』といつたが、彼の一生は此の精神を以て貫かれて居た。彼は眞理を求むるためには如何なる努力をも惜まなかつた。一技一藝にでも秀て居る人があると聞けば、必ず其の

門を叩いて教を乞うた。彼の求むる所は名譽でも權勢でもなく、唯だ眞理のみであつた。されば彼は常に語つていふ、「吾は眞理を愛するものである。それ故に眞理を愛する青年は皆吾が友である」と。彼が貧しい生活をしながら少しも之を憂へなかつたのは、眞理を求むることの樂みを知つて居たからである。此の如き賢人にして猶ほ敢て人の師と爲らなかつた。少しの智解を得たのに自ら満足し、好んで人の師と爲る者は顧みて深く慚ぢなければならぬではないか。

若し眞理を愛する心さへあれば如何なる人でも友として交ることが出来る。

ソクラテスは自ら眞理を求めんが爲に青年の友となり、其の年齢の差を全く忘れて居たやうに見えるが、獨り年齢の差のみならず、貴賤貧富の差をも忘れることが出来る。眞理を愛し、正しき道を愛するの念は如何なる地位身分の人にも共通であるべきである。

前にも『和敬』といふことに就て少しく申述べたことがあるが、此處で又之を繰返したいと思ふ。前にもいつた通り佛弟子たる者は相和し相敬して共に道を學び共に道を弘むべきである。此の和敬といふことに就て先づ

理和と事和の二を區別する。

理とは即ち教理である。事とは即ち實行である。理を同うし事を同うするが故に和敬が存し得

るのである。先づ佛弟子たる者は共に佛に歸依し、佛の説きたまふ所を絶対の眞理と信じ、共に之を學ぶことによつて惑を除いて覺を得んと努力するものである。即ち共に學ぶ所のものが同一であるといふことを認むるのが『理和』である。此の理和に基いて事和が成立つのである。事和とは日々實行上に於て互ひに一致する所のあることを認むるので、之を更に區別して六和とするのである。それは

一に身敬。二に口敬。三に意敬。四に戒敬。五に見敬。六に利敬

である。一に身敬といふのは毎日禮拜する所の佛が同じ佛であると信じて、互ひに和合し愛敬することである。二に口敬といふのは毎日讀誦する所が共に大乘の經典であり、又毎日語りあふ所が共に大乘の教理であると信じて、互ひに和合し愛敬するのである。三に意敬といふのは互ひに信ずる所、求むる所が同じ道であると知つて、互ひに和合し愛敬することである。四に戒敬といふのは共に同一の戒律を守らば身であるとして、互ひに和合し愛敬することである。五に見敬といふのは互ひに其の人生觀、宇宙觀等が一致する（同じ佛の敎を信ずるが故に）ことを知つて、互ひに和合し愛敬するのである。六に利敬といふのは特に同じ僧房に起臥する者の間に於てのことで、利とは衣食等に要する物質のことである。同じ僧房

に住み、衣食を分ちて共に生活するものであるから、互ひに和合し愛敬するのである。此の六和敬は主として出家の人々の間に於て重んぜられたものであるが、此の如き精神を以て相交することは何人にも共に必要である。即ち學ぶ所の教が同一で、求むる所の道が同一であること知る以上は、決して私心を挟んで相争ふことの出来るものではないのである。『法界次第』には和敬の意を説明して、

外に他の善と同ずる、之を名けて和と爲す。内に自ら謙卑する、之を名けて敬と爲す。

といつてある。外とは行ひ現はれた所をいひ、内とは心に思ふことをいふのである。他の善と同ずるとは他人と共に協力一致して善い行を勵むことである。共に善を行ふ者は必ず和合が出来るに極つて居る。自ら謙卑するとは心に少しも驕慢の念の無いことである。前にもいふやうに、吾等が少しばかり知り得た所があつても、佛菩薩の智慧に比べて見れば固より言ふに足らぬものである。斯く思へば驕慢の念は起らぬ筈である。驕慢の念が無ければ互ひに愛しあひ敬ひあふことは必ず出来る。芭蕉翁の春の始めの句に

春もやゝ景色とゞのふ月と梅

といふのがある。月は空に皓々として照りかゞやいて居る。梅は地に其の美しい花を開いて居

る。而も月は梅の梢を優しく照し、梅は月に向つて其の清き香りを送つて居るのである。此の天地の大なる調和によつて春の景色がとゞのふのである。和敬の義も實に此の如きものである、人々が各自に其の私を捨て和敬を致すならば、如何なる大事も必ず成就すべきである。

西郷南洲が明治六年に官を辭して鹿兒島へ歸つてから、私學校を立て英才の教育に力を用ゐたのは誰もよく知る所であるが、其の私學校の綱領は次の如き至て簡單なるものである。

道を同じ義相協ふを以て暗に聚合せり。故に此理を研窮し道義に於ては一身を顧みず必ず踏

行ふべき事。王を尊び民を憐むは學問の本旨。然らば此天理を極め、人民の義務にのぞみては一向難にあ

たり一同の義を立つ可き事。是れは至て簡單なるものであるが、共に學ぶ者の心得べきことを徹底的にいつてあるのは感服すべきの至である。南洲は勿論非常に優れた天分をもつて居た人であるが、青年時代には鹿兒島の福昌寺の無參禪師に就て彥禪した。又陽明學の研究に力を用ゐて居たことは、佐藤一齋の言志録を抄録して精讀して居たのに依つても明かである。それに多くの艱難を経、死生の間に出入して自ら悟り得た所もあつたに違ひない。此の私學校綱領の如きは其の根本精神に於て釋尊

の教へられた朋友の道と正しく一致せるものと稱すべきである。
 以上は朋友の道に就て釋尊の説かれた所を概略述べたのであるが、社會の一員として盡すべき所の道も、朋友の道と大體に於て異なる所はないわけである。社會の健全なる發達を望むものは、共に其の私心を捨てなければならぬ。されば釋尊は人を護り世を護ることの必要を力説せられ、是の如くにして初めて吾等の身に負へる恩に報じ得べしと教へられた。前にもいふ通り吾等は皆一切衆生の恩を身に負うて居る。若し吾が身一人で此の天地間に生れて來たなら、一日と雖も吾が生命を保つことは出來なかつたであらう。而も吾等は他人の恩に報ぜんとはせず、たゞ一身の私のみを謀つて居る。まことに心地觀經に
 是の如き昔恩猶ほ報ぜず、或は妄業に因つて諸々の違順を生ず。執着を以ての故に反りて其の怨を爲す。

とある通りである。昔の唐人の詩に『花發いて風雨多し』といふのがある。如何にも花の盛りには風雨が多くて、切角美しく咲いた花が直に散つてしまふのは残念なことである。併し元來此の花は風に吹かれ雨に潤はされて咲いたのであるから、風雨を恨むのは間違つて居るわけである。寧ろ『春風春雨是れ花を開き、春雨春風また花を散す』と達觀すべきであらう。

人生のことも亦其の通りである。吾等は多くの人の恩を負うて居るが、又多くの人の爲に種々の累を受けて居ることも事實である。それは世の中が聖人君子ばかりの集りでない以上は據ないことである。而も吾等は多くの人の爲に益して居ることはあまり考へず、迷惑を受けた方のことをばかり多く考へて居る。まことに是れは我儘千萬なことである。『執着を以ての故に反つて其の怨を爲すとあるのは能く之を悉したる語である。自分は先年鹿兒島へ行つた時に五六人の青年に案内せられて櫻島を見物した。それは宛も櫻島の爆發してから滿十年に當る日であつたので、當時の慘狀に就ても種々の話が出た。其の時自分は青年の人達に向つて『櫻島の噴火によつて鹿兒島の人達が多くの苦みに逢つたのは如何にも氣の毒であるが、鹿兒島の人達は其の爲に櫻島を呪ふべきではなからう。櫻島から産出する穀物や蔬菜類も少くはない。それが鹿兒島の人々の生活に役立つて居ることは随分大きなものであらう。其の年々の利益と噴火によつて與へられた損失とは、とても比較にはなるまい。たとへ其の噴火によつて可なり多くの災害を受けても、決して櫻島に對する感謝の念を失つてはなるまい。又あの熔岩も或る歳月を經れば、草をも木をも生ずるやうになるといふ事である。されば昔の熔岩が今日では穀物や蔬菜を育て居るのであるから、昔與へた損害は今の恩恵を以て充分に償はれて居ると見て宜からう。

今のあの眞黒な熔岩も後に至れば又斯る恩恵を與ふるやうになるのである。決して之を呪ふべきではない』と語つた。青年の人達は能く自分の意の在る所を解して

凡ての人、凡ての物に對して皆此の如き解釋を下すべきである

と語りあつた。執着を捨て見れば、怨むべきものも無く憎むべきものも無いのである。

更に進んでいへば、世の中に種々の障りのあるといふことが恨むべきでも無く哀むべきでもないのである。屢々今までも引いた菜根譚の中に

泛駕の馬は驅馳に就く可く、躍冶の金は終に型範に歸す。優游して振はざれば便ち終身個の

進歩無し。白沙云く、人と爲り多病なるは未だ羞るに足らず、一生病無き是れ吾が憂なりと

眞に確論なり。

とある。荒れ馬を訓練して縦横無盡に驅けさせると、終には充分役に立つ乗馬となる。金を鎔して或る型に入れると、定まつた形が出来て立派な用具になる。人も苦まず鍛へられなければ物の用には立たぬのである。無病の人は病人に對する同情が無い。安樂な人は苦勞の多い人に對する同情がない。斯ういふ人は世間の役には立たぬ。眞に大事に當り得る人は、多くの艱苦を嘗め、種々なる人生の曲折を経て鍛へ上げられたる人に限るのである。人生に苦勞の多いこ

とが即ち多くの立派な人物を作り上げる元となるのである。何の曲折もなく苦勞もなく夢の如くに生れて夢の如くに死ぬ人は、全く存在の意義のない人である。

なか／＼に時々雲のかゝるこそ月をもてなす限りなりけれ

とは西行法師の歌であるが、人生の事も皆その通りである。

釋尊が提婆達多を呼んで善知識といひ、彼の迫害によつて却て勇氣を増し、多くの功德を積み得たことを感謝されたことは前にいつたが、此の如くに寛い心をもてば世間に敵といふものは無くなつてしまふ筈である。吾等は凡夫であるから是れ程に寛い心をもつことは容易に出来ぬけれども、常に努めて已まなければ、少し宛でも斯ういふ境地に近づいて行くことは出来るであらう。『徳を以て怨に報ず』といふことがあるが、昔から之を實行した人は決して少くない。それは他人が視て以て怨と爲すものを、其の人は怨とは思はず、却て之によつて自分が磨かれて自分を大成し得たことを感謝して居るから、之に報ずるに徳を以てすることも出来るのである。但し有名なる韓信が大將軍となつた時に、曾て自分を辱めた者を呼出して優遇したといふ話などはあまり手本とすべきものとも思はれぬ。史記には其の時の有様を寫して、
信を徙して楚王と爲し下邳に都せしむ。信國に至つて從食する所の漂母を召して千金を賜ふ

……己を辱むるの少年胯下を出しむる者を召して以て楚の中尉と爲し、諸將に告げて曰く、此は壯士なり。我を辱むる時に方り我寧ろ之を殺すこと能はざらんや。之を殺すも名なし。故に忍んで此を就せりと。

とある。是れは自分の成功を誇示する心が多分にあるやうで餘り感心は出来ぬ。併し彼は一片の武將に過ぎず、聖賢の道を學んだものでは無いから據ないことであらう。

自分は先年松島の瑞巖寺に遊んで、曾て此の寺に住した雲居禪師のことを思ひ出して懐しさに堪へず、同行の人々と其の事蹟を語りあひながら歸途に就いた。禪師は元和年中に攝津の勝尾寺に住して居たが、仙臺の伊達政宗が其の徳を慕つて松島瑞巖寺の住職に迎へやうと、家老片倉小十郎を使にやつた。禪師は小十郎に向つて『それでは行くとしやう。併し私は都合があつて二三日後れて行くから、先へ歸るがよい』といつた。小十郎が其の理由を問ふと『イヤ實は此頃釜を一つ買つたが、未だ其の代を拂はずにある。二三日托鉢して歩いて、貰つた金で釜の代を拂つてから行く積りである』と答へた。小十郎も深く其の恬淡なる性格に服し、自分は急いで仙臺へ歸つて主人政宗に復命し、禪師の來る日を待つて居た。禪師は單身で飄然として旅路に上つたが、美濃の青野原を過ぐる時に七人の強盜が禪師を路に要して之を劫した。禪師

は笑つて『乞食をするのが出家の本來の業である。此處に少しの金があるが是れは入らぬものである。悉く之を興へやう』と囊中の金を盡く彼等に興へた。併し彼等はなほそれで満足せず禪師の衣を褫がうとした。其の時禪師は嚴然として『出家の法として此の法衣を脱することは出来ぬ。これが欲しいなら私の生命を取つてからにするがよい』と、路傍に端坐して動かなかつた。賊等も之を見て流石に畏敬の念を起したと見えてその儘立去つてしまつた。

別れて半里ばかり行つてから賊の一人は其の仲間の者に向つて『何と豪い人ではないか。あんな心持で世の中を渡ることが出来たら本當に仕合せであらう。吾々は人の物を奪つて毎日の生命を繋いで居るが片時でも安心といふことは無い。あんな豪い人に出逢つたのが吾々の爲には又と得難い時機ではないか。あの人の弟子となつて、此から安らかな一生を送らうではないか』といつた。此の一言に動されて他の賊等も皆同意した。彼等は急いで禪師の後を追ひ、恭しく其の罪を謝して『弟子にしてくれ』と願つた。禪師は彼等のいふ所を聞いて『今迄の罪を悔いて出家の志を立てたのは感ずべきことである。併し世間には名僧智識も多くあらう。

私は人の師となるべき徳のある者では無い。

誰ぞ他の人を頼むが宜い』といひ放つて立去らうとした。七人の者は其の法衣の袖に縋りつき

『何卒助けて下さい』と哀願して止まなかつた。禪師も終に断ることが出来ず、此より七人を伴に連れて奥州へ向つた。七人の者は全く生れ變つたやうになり、誠心を以て禪師に仕へて途中恙なく奥州に着いた。禪師は瑞嚴寺へ来て七人の者を外に待たせて置き、獨り本堂に昇つて本尊を禮拜した。其の姿があまり見窶しかつたので、一人の小坊主が『此處は太守の御歸依の寺である。左様な見苦しい風體で断りもなく本堂へ昇るとは無作法である』と叱りつけた。禪師は『入つては悪いか』と、其儘出て行つたが、其の風骨の非凡なのを見て取つた者が、その後を追うて『若しや雲居禪師ではありませぬか』と尋ねた。それが果して雲居禪師であると分つたので、瑞嚴寺の者は大恐慌で、様々に訛言をして禪師を請じ入れた。ところが間もなく禪師は行方不明になつてしまつた。一同の者は大騒ぎして捜さうとしたが、太守の政宗は『今に歸つて来るであらう』といつて平然として居た。

其の頃伊豆に興嚴寺といふ寺があつたが、是れは瑞嚴寺の末寺であつた。久しく修繕をしなないので本堂も庫裡も破れ果て居たが、其の費用を寄附に求めやうとしても應ずる者が有らうと思へなかつた。それで其の住持の僧は失望して、寺を捨て去らうといふ考へを折々漏して來たが、その度に雲居禪師は『マア短氣を出さずに時期を待つが宜からう』といふやうな慰安の

意味の返辭を送つて居た。ところが或日禪師は突然此の寺へ來て『暫く此處に置いて貰ひたい』と頼んだ。寺の者は誰もそれが雲居禪師であると知らず、近邊の百姓が發心して來たものであらうと思つて、下男のやうにして召使つて居た。禪師は人々の命ずるまゝに勝手元の仕事を手傳つたり、田畠へ出て耕作の手傳ひをもして居た。斯くして幾日かを送つて居るうちに、參詣に來た伊達家の家來が、其の雲居禪師であることを知つて住職に告げたので、遽かに大騒ぎとなつた。近邊の者共は『そんな高德の方が自分達と一緒に賤しい仕事をして下されたのは勿體ないことである』と思つて、毎日寺へ推掛けて來て禪師の教へを乞うた。其の教へを聞いた者は一人として隨喜の念を起さぬものは無かつた。禪師は暫く此處に止まり、多勢の者に向つて『此の寺の立行くやうに頼む』といふ一言を遺して又飄然として去つた。

實に此の一言には非常なる力があつた。

此の一言によつて興嚴寺の修繕は何の滞りもなく出來た。而も雪居禪師は之に對して一言の禮をも受けやうとはしなかつた。其の瑞嚴寺へ歸つて後に、誰か此の事を言ひ出すものがあるとして『聊か佛恩の萬一に報ぜんとしたのみである』といつて、多く語らなかつたといふことである。此の如き寛い心をもつて居れば、如何に多事多難の世に處しても、其の心はいつも綽々として

餘裕があるに違ひない。

是れは出家の人の行であるが、此の如き心をもつて世間に立つならば、如何なる地位、如何なる職業であつても必ず能く其の責を果し、毎日を明るい氣分で送つて行くことが出来るであらう。優婆塞戒經は其の名の示す如く在家の人の守るべき道を説き示されたものであるが、其の中に教へられた所は吾等が社會の一員として當に服膺すべき所を能く悉されたやうである即ち

衆の離壞するを見ては能く和合せしめよ。人の善事を揚げて他の過咎を隠せ。人の慚耻する所は終に宣説せざれ。人の秘事を聞きては餘に向ひて説かざれ。世事の爲に而も呪誓を作さざれ。少思も己に加ふる者あらば大に報ぜんことを思欲せよ。己の怨者に於て恒に善心を生ぜよ。怨親等しく苦まば先づ怨者を救へ。罵る者あるを見れば反つて憐心を生ぜよ。來り打つを見れば悲心を生ぜよ。諸の衆生を視ること猶ほ父母の如くせよ。といふのである。此處に列擧せられたる所を能く考へて見ると、一々に皆吾等凡夫の病處に中つて居る。吾等の日常爲す所は此等の諸點と相反することのみが多い。それで世間が益々面倒にのみなつて來るのである。

先づ第一には多くの人が和合せずして相争つて居るのを、和合せしむる爲に力を用ゐよといふのであるが、それには先づ自分が私心を去ることが必要である。譬へば小兒が撲ちあつて居るのを見れば直に之を止めることが出来る。それは吾等に小兒を制するだけの力があるからである。併し大きな力士が撲ちあつて居るのを止めることは容易に出来ぬ。それは吾等の力が彼等に及ばぬからである。世間の多くの争ひは其の雙方が私心に囚はれて居る所から發するものである。之を制する者は固より公明正大なる心をもてる者でなければならぬ。

己の私心を制することの出来ぬものが、他人の争ひを止め得られやう筈がない。明治維新の事業が成就したのは固より明治天皇の如き英主が上に在して、多くの人傑が之を御賛け申した爲といふべく、又内外幾多の事情が綜合した結果とも見るべきであるが、薩長土等の大藩が従前の行懸りをすて、協力一致したことも其の重要な原因の一として數へられなければならない。此等の大藩は互ひに敵として戦つたこともあるからで、随分面倒な關係が存して居たのである。然るに其等の關係を一切捨て協力するやうになつたのは諸藩の有力者に能く時勢の移り行く有様を洞見して、今迄の行懸りを一切捨てやうといふ決心がついた爲である。慶應三年六月に薩土兩藩の間に締結せられた盟約の如きは、其の時の氣分を最もよく現はし

たものといふべきであらう。其の盟約書の取極めの際には、薩の西郷、大久保、小松等、土の中岡、坂本、後藤等の人々が列席して居るが、其の『大綱』に於ては、國體を協正し萬世萬國に亘りて耻ぢざる是第一義。

といひ、若くは

國に二帝なし、家に二主なし。政刑唯一君に歸すべし。

といふが如き四項を掲げて、

右方今の急務にして天地間常有の大條理なり。心力を協一にして斃れて後已まん。何ぞ成敗利鈍を顧るに暇あらんや。

とある。又其の『約定書』は

方今皇國の務、國體制度を糾正し、萬國に臨みて耻ぢざる、是第一義とす。

といふを以て始まり、

此皇國興復の議事に關係する士大夫は、私意を去り公平に基き、術策を設けず正實を貴び、既往の是非曲直を問はず人心一和を主として此議論を定むべし。

といふを以て終つて居る。此の如き盟約が出来たのは畢竟「私心を去ることが和合の元である」

といふことが諸藩の有力者によく分つた爲である。私心を去ることは實に難事であるが、此の難事を敢てするが爲に多くの立派な働きが出来るのである。

殊に多くの人の上に立つ人は、いつも人々を和合せしめ、協力一致するやうに指導して行かなければならぬのであるが、それには自分の心が偏頗にならぬやうに常に反省することが最も肝要である。人は誰でも完全ではない、皆僻した所がある。それ故に自分の好尚に一致した者を援けるやうになるのは免れ難いことである。此の點をいつも反省しなければならぬ。張蘊古が唐の太宗の命によつて作つた大寶箴の中に帝王の道を説いて

彼此を胸臆に一にし、好惡を心想に損す。……衡の如く石の如く物を定むるに限を以てせざれば、物の懸るもの輕重自ら見ゆ。水の如く鏡の如く物に示すに情を以てせざれば、物の鑑るもの妍蚩自ら生ず。渾々として濁ること勿れ、皎々として清めること勿れ。汶々として閑きこと勿れ、察々として明なること勿れ。

とある。彼此を胸臆に一にするといふのは親疎の別を立てぬことである。好惡を心想に損するといふは好憎の私情を捨つることである。秤に懸けて物の輕重が分るのは、秤といふものが物の制限を立たぬからである。鏡に映して姿の美しいと醜いとが分るのは、鏡といふものに私情

が無いからである。帝王たるものは常に此の如くに公平無私でなければならぬといふのである。是れは帝王のみならず、苟くも多くの人を統率すべき地位に在るものは皆共に心得て置くべきことである。眞に此の心をもてる者は即ち菩薩である。

佐藤一齋の言志録は其の平生心を潜めて工夫して居たことを録したもので、一も空論といふものは無く、まことに有益であるが、其の中に君たる者の道を説いて、

邦に道有れば君と大臣と權を譲る。權は徳に在りて力に在らず。邦に道無ければ君と大臣と權を争ふ。權は力に在りて徳に在らず。權徳に在れば則ち權上よりして離れず。權力に在れば則ち權遂に下に歸す。故に政を爲すは唯だ徳禮を以てするをこれ尙しと爲す。

とある。又

聰明にして重厚、威嚴にして謙冲、人の上たる者は當に此の如くなるべし。

ともあるが、如何にも貴い教訓である。獨り人君のみならず、世を導き人を教へやうとする志のあるものは常に此の心懸けを失はぬやうにしなければならぬ。近頃學校などで種々の騒ぎの持ち上るのも畢竟斯ういふ心懸けのある人が乏しいからである。

私心を去りさへすれば、世に恐るべきものも無く憚るべきものも無い。斯くして初めて人を

率ゐることも出来、世を導くことも出来る。一齋が

胸臆虚明なれば神光四發す。

といつたのは能く此間の消息を語れるものである。また

理到るの言には人服せざるを得ず。然れども其の言激する所あれば則ち服せず。強ゆる所あれば則ち服せず。挾む所あれば則ち服せず。便にする所あれば則ち服せず。凡そ理到りて人服せざれば君子必ず自ら反す。我先づ服して而る後に入之に服す。

とあるも名言である。自分の言ふ所が假令理論として正しくても、之を言ふ時に公明正大の氣象に於て缺けて居れば人を服せしむることの出来るものではない。併し前にもいふやうに吾等は凡夫であつて、各其の性質に於て僻する所があるから、動ともすれば公明正大を缺くやうになる。常に深く反省しなければならぬことである。一齋が

自ら責むるに嚴なる者は人を責むることも亦嚴なり。人を恕するに寛なる者は自ら恕するも亦寛なり。皆一偏たるを免れず。君子は則ち躬自ら厚うして薄く人に責む。

といつたのも吾等の爲によい訓戒である。要するに各自が其の性の偏れる所に就て自ら省みなければならぬのである。

此の如くに考へて來ると『人の和合せぬのを和合せしむる』といふ一事だけでも、實に容易なことではない。自分の心が煩惱に擾されて居ては、人を和合せしむることなどの到底出來やうわけは無い。是はまことに難事である。併し吾等は其の難事なるが爲に之を避けて爲さぬといふやうな臆病者であつてはならぬ。一齋はまた次の如くにいつて居る。

世間第一等の人物たらんと欲する、其の志小なりとせず。余は則ち以て猶ほ小なりとす。世間の生民衆しと雖も而も數に限あり。茲の事恐らくは濟し難きに非ず。前古の已に死せる人の如きは則ち今に幾萬倍す。其の中に聖人賢人英雄豪傑數ふるに勝ゆ可からず。我今日未だ死せざれば則ち稍出頭の人に似たり。而も明日即ち死すれば輒ち忽ちにして古人録中に入る是に於て我が爲す所を以て諸を古人に較べて、比數するに足るもの無ければ是則ち愧づ可し故に志有る者は當に古今第一等の人物を以て自ら期すべきなり。

此の言は稍誇張のやうにも思はれるが、よく讀んで見ると決して大言壯語でなく、深く自ら期する所あつて斯く言つたものと見える。一齋はまことに敦厚篤實の人であつた。其の言に余弱冠の前後に鏡意にして書を讀み、目千古を空うせんと欲せり。中年を過ぐるに及びて一旦悔悟し痛く外に馳するを戒め、務めて内省に従ひ、然る後に自ら稍得る所あり、此の學に

負かざるを覺えたり。今は則ち老いぬ。少壯讀む所の書過半は遺忘し、茫々して夢中の事の如し。稍留りて胸臆に在るものも亦落落として片段を成さず。益々半生の力を無用に費せるを悔ゆ。今にして之を思ふに、書妄りに讀む可からず、必ず擇び且熟する所有りて可なり。只要らず終身受用すれば足る。後生我が悔を踏むこと勿れ。

ともあるが、自ら期する所彼が如くに大にして而も後生を思ふこと此の如くに懇なるは、まことに敬服すべきである。吾等佛法を學ぶ者も亦自ら期する所は大きくなければならぬ。屢々今迄にもいつた通り、吾等は佛の境界に到達することを理想として修行を續けなければならぬのである。一齋が『古今第一等の人物を以て自ら期すべし』といつたのが即ち吾等の志す所であければならぬ。而して吾等の學ぶ所は決して空理空論でなく一齋が『終身受用すれば足る』といつた精神を以て學ぶべきものである。されば吾等は何なる難事をも難事とせずして日々に勵み菩薩の道を缺くる所なく修行することを忘れぬやうにしなければならぬのである。一齋が學を爲すの緊要は心の一字に在り。心を把りて心を治む。之を聖學といふ。政を爲すの著眼は情の一字に在り。情に循ひて以て情を治む。之を王道といふ。王道と聖學とは二にあらざるといつたのは亦實に吾等に適切である。

優婆塞戒經には第二に『人の善事を揚げて其の過を隠せ』と教へ、第三に『人の慚る所の事を世間に向つて説くな』と教へ、第四に『人の秘事を聞ては他の人に向つて説くな』と教へてあるが、慈悲を主とすべきことが菩薩道の根本であることを知るものは、必ず此等の諸事を忽にはせぬ筈である。孔子の言にも

君子は人の美を成し人の惡を成さず。少人は是に反す。

とある。小善と雖も之を行ふ者を見れば之を稱揚し之を獎勵すべきである。稱揚せられて其の心に勵みが生じて來れば、更に之より大なる善事を爲すやうになるであらう。戰國策の中に郭隗の語つた所が出て居る。昔或國の王が其の臣下の者に千金を持たせて千里の馬を買ひにやつた。行つて見ると其の馬は既に死んで居たので、其の骨を五百金に買つて歸つた。王は彼が無用の事に大金を費したことを咎めたが、彼は『死馬の骨でも五百金で買はれたといふことが天下に傳はつたならば、必ず生きた千里の馬を連れて來るでせう』といつた。果して其の後一年の間に千里の馬を三頭までも得られたといふ。郭隗は此の事を説いて『少しく賢なる者を禮遇すれば、後には必ず大賢人が來る』と主張したのであるが、小善と雖も之を稱揚しなければならぬといふも此と同じ理である。

然るに小人は嫉妬心の強い者であるから、他人の善事を聞いては成るべく之を世間に顯はさぬやうにし、他人の過失を聞けば之を世間に吹聴して更に憚らぬのである。韓退之の『原毀』には此の如き實情が最も鮮かに描き出されて居る。眞に君子と稱すべき人を説いて、

古の君子は其の己を責むるや重くして以て周し。其の人を待つや軽くして以て約なり。重くして以て周きが故に怠らず。軽くして以て約なるが故に人は善を爲すことを樂む。……舜は大聖人なり、後世及ぶこと無し。周公は大聖人なり、後世及ぶこと無し。是の人や乃ち曰く舜の如くならず、周公の如くならずるは吾が病なりと。是れ亦身に責むる者重くして以て周からずや。其の人に於けるや曰く、彼の人や能く是有り、是れ良人たるに足れり。能く是を善くす、是れ藝人たるに足れりと。其の一を取つて其の二を責めず、其の新に即きて其の舊を究めず。恐々然として其人の善を爲すの利を得ざらんことを恐る。……亦人を待つこと軽くして以て約ならずや。

とある。而して當世の小人の狀態を説いて、

其の人を責むるや詳に、其の己を待つや廉なり。詳なるが故に人善を爲すことを難しとす。廉なるが故に自ら取るや少し。己未だ善有らざるに、曰く我は是を善くす、これ亦足れりと

己未だ能あらざるに、曰く我は是を善くす、これ亦足れりと。外は以て人を欺き内は以て心を欺く。未だ少しも得る有らずして止む。亦其の身を待つもの己だ廉ならずや。其の人に於けるや、曰く彼は是を能くすと雖も其の人稱するに足らず。彼は是を善くすと雖も其の用稱するに足らずと。其の一を擧げて其の十を計らず、其の舊を究めて其の新を圖らず。恐々然として惟だ其の人の聞ゆる有らんことを懼る。是れ亦人を責むるもの己だ詳ならずや。とある。更に世俗の狀態を説いて、

嘗て試みに衆に語て曰く、某は良士なり、某は良士なりと。其の應ずる者は必ず其の人の與なり。然らざれば其の疎遠にして與に其の利を同らせざる者なり。然らざれば其の畏るゝものなり。是の若くならざれば、強者は必ず言に怒り、懦者は必ず色に怒る。又嘗て衆に語て曰く、某は良士に非ず、某は良士に非ずと。其の應ぜざる者は必ず其の人の與なり。然らざれば其の疎遠にして與に其の利を同らせざる者なり。然らざれば其の畏るゝものなり。是の若くならざれば強者は必ず言に説び、懦者は必ず色に説ぶ。……嗚呼士の此の世に處して名譽の光き道徳の行はれんことを望むも難し。といつて居る。實際此の通りである。

自分が眞に恃むべき何物をも持たぬものは他人の缺點を探し出すことに殆んど全力を注ぐのが常である。自分の顔を鏡に映して見て非常に醜ければ、自分よりモツト醜い者を探し出して『彼の人に比べれば自分の方が好い』と思つて纔かに心を安んずる。學生などでも學校の成績の悪い者に限つて、他の成績の悪い者のことをよく知つて居る。それは『自分一人ではない、他にも成績の悪い者がある』と思つて自ら辯護するためである。凡て此の如きものが小人の通態である。昔の川柳に

能う書くが好かぬ手風と時平いひ

といふのがある。道眞は能書を以て世に聞えた人である。時平がそれを妬んで『能書ではあるが何となく忌味のある字だ』といつたであらうとの想像であるか、まことによく人情を穿つて居る。此の如き小人と小人とが相集つて黨を作り派を分ち、相争ふが故に天下は益々多事になるのである。唐の陸象先が

天下本無事なるも庸人の之を擾すを煩と爲すのみ。たゞ其の源を澄さば何ぞ簡ならざるを憂へんや。

といつたのは至言である。

凡て人の悪を曝いて世間に吹聴するのには二の大なる禍が伴つて居る。其の一は『其の人をして自暴自棄に陥らしむること』である。其の二は『世間の悪を爲す人に口實を與ふること』である。多くの人は悪事を爲しても、内心に其の悪事たることを知らぬのではない。之を悪と知るが故に之を隠さうとするのである。榮根譚の中に、

悪を爲して人の知るを畏るゝは、悪中に猶ほ善路有り。善を爲して人の知るを急にするは、善處即ち悪根なり。

とあるのは如何にも道理ある言である。然るに今まで隠して置いた悪事が暴露された場合には今まで隠す爲に努力したのが一切空に歸したのに憤慨して自暴自棄の氣分となり、更に悪を重ねて憚らぬやうに立到る場合も少くない。斯ういふ風に所謂死に物狂ひになつた者は非常に多くの害を爲すもので、鹽鐵論の中に

死して再び生きざれば窮鼠も猫を齧む。

とあるは、人の能く知る所の語である。孫子の中にも、

歸る師は退むること勿れ。圍む師は必ず闕く。窮寇は追ふこと勿れ。

とある。皆其の失望の極却て恐ろしい働きをするのを避けんが爲である。されば人の過を知つ

た時は、之を世間に告げず、竊かに其の人の反省を促すやうに心を用ゆべきである。

又世間には随分罪を犯し過を重ねて、之に對する非難を恐れて居るものも少くない。若し或る人の過失が世に公にせらるゝ時には、斯ういふ人々は皆自己を辯護する口實の見附かつたのを喜び『あの人にもそれ程の過があるのなら、自分達に多少悪いことがあつても嚴重に責めるには及ぶまい』などと語りあひ、更に其の過を改めやうともせぬ場合が屢々ある。近頃の新聞

紙に、世間の名流と稱せらるゝ人達の罪過を仰山に書き立て、其の肖像までも麗々しく掲ぐる風のあるのは實に憂ふべきことである。之が爲に青年の氣風が著しく悪くなり、過を犯しても之を恥づることの無いやうな者が随分出來たやうである。斯ういふことは何人も共に深く考慮すべきことである。以上は一般に人の過失を揚げて吹聴することの大なる罪惡である理由を述べたのであるが、今まで親しい交りのあつた人の悪口をいふ者は、更に其の罪の重いこと勿論である。燕の樂毅の言に

君子は交絶しても惡聲を出さず。忠臣は國を去りても其の名を潔くせず。

とある。友人であつた人と何か仔細があつて絶交しても、以前の交誼を思ふから、彼に對して非難の言などは出さぬ。又君を諫めて容れられぬ爲に國を去るといふやうな事があつても、自

分の潔白であることを世間に吹聴などはせぬ。それが一旦君臣の縁を結んだ人に對する情誼である。佛の道を學ぶ者には勿論是れ程の心得がなければならぬ。

經文に數へられたる第五の點は『世事の爲に呪誓を爲すな』といふのであるが、これは正しき信仰を持つて行く上に於て極めて大切なることである。呪誓をするといふのは己の決心の變ぜぬことを佛に對して誓ふことであるが、斯ういふ事は決して妄りにすべきではない。

耶蘇敎の方では昔豫言者モーセがシナイ山に於て神より十戒を授けられたといふことを傳へて居るが、其の第三戒に

汝の神エホバの名を妄りに口に揚ぐべからず。

といふのがある。妄りに神の名を口にするのは其の神聖を瀆すことになるから之を慎まなければならぬので、是れは如何にも良い訓戒である。吾等が佛に對して誓ふといふやうな場合は、何か特別な出來事が起つて、大決心を要する際でなければならぬ。日常の出來事に對しては、いつも冷靜なる判断を以て之を處理すべきものである。小事を處する場合にまで一々佛の御名を提出するのは、自分が佛法を信ずる者であることを人に誇示することで、甚だ卑むべき行爲といはなければならぬ。

信仰は吾等の心の土臺となるべきものである、吾等の身の飾りとすべきものではないのである。

口に信仰を説きながら行の之に伴はぬのは、人を欺き又自ら欺くもので、まことに耻づべきの至である。

日蓮上人が佐渡へ流されて、前後四年を配所に過し、文永十一年の三月赦されて鎌倉へ歸る時に、其の途中で之を要撃する者があつたけれども、上人は障りなくして鎌倉へ着いた。其の時のことを後に至つて回想して、上人は

越後の國府、信濃の善光寺の念佛者、持齋眞言等は雲集して僉議す。島の法師原は今まで生けて還すは人乞丐なり。我等はいかにも生身の阿彌陀佛の御前をば通すまじと僉議せしかども又越後の國府より兵者共あまた日蓮にそひて善光寺を通りしかば力及ばず、三月十三日に島を立ちて、同き三月二十六日に鎌倉へ打入りぬ。

といつて居る。法華經の中には、此の經を世に弘むる爲の努力は決して空に歸せぬといふことを説いて『天の諸々の童子以て給使と爲さん。刀杖も加へず、毒も害すること能はず』とまでいつてある。されば日蓮上人も無事に鎌倉へ歸り着いた時に、此等の事を思ひ浮べたに違ひな

い。然るに自分で其等の吹聴をせずに、たゞ『力及ばず』といったのみであつたのは如何にも貴い。上人の流を酌む者は此等の點を能く學ばなければなるまい。世間の自ら法華信者と稱する者を見ると、日常の瑣事にまで一々に法華經を引合に出し、例へば旅行しやうとする朝天氣が好くても、それを直に法華經の御利益と稱して居る。又動ともすれば『不惜身命の覺悟』などいひながら、小い困難に出逢つても元氣を失つてしまふ者が少くない。此の如きは法華經の名を辱むるものといふべきである。

自分の親しい人で熱心に畫を學んで居る一青年があつた。其の人は某といふ大家の門に入つて研究を續けて居たのであるが、或時（それはモウ二十年ばかりも昔のことになるが）大規模なる畫の展覽會が催されて、無論彼の師たる人もそれに出品した。彼は其の師から展覽會の優待券を貰つて、或日會場へ出掛けて行つたが、會場で名を問はれた時に『某の門人』と名乗らずに歸つて來た。彼は後に至つて其の時の感想を自分に話した。『先生の畫が實にすばらしい出来であつた。今更ながら先生に感服した。自分は名を聞かれたが、あの豪い先生の門人と名乗るのが耻かしくなつたから、何ともいはなかつた。モット勉強して多勢の人の前であの先生の門人と威張つて名乗れるやうにならなくては濟まぬ』と。自分は此の話を聞いて實に感心してし

まつた。名高い人に緣故のあるのを頼りにして、一身の榮達を圖るのが當世の習ひであるが、彼は何といふ潔白な心をもつて居るのであらう。自分が未熟であるから、ウツカリ自分の名を名乗つたら先生の耻になるであらうと考へたといふは、眞に能く師弟の道を辨へた者といふべきである。

妄りに師の名を口にせぬのが眞に其の師を貴ぶ道である

といふことを彼は能く心得て居たのである。今日佛教信者と自稱する人の中に、此の一畫家ほどの心をもつた人の少いのは甚だ憾むべき事である。

次に『少しの恩たりとも己に加はるならば大に之に報せんことを思へ』と教へてあるのは、社會を平和ならしむる爲に最も肝要なることである。各自が他の人の恩を負うて居ることを忘れぬならば、世の中は何時も明るい氣分を以て充されて居るに違ひない。黄山谷の詩の中に桃李終に言はざれども、朝露に恩光を借る。

といふ句がある。日が照し露が潤すので桃李の花は美しく開くのである。桃李の花は物を言ふことは出來ぬけれども、其の美しい花には其の恩に對して、感謝して居る心がよく現はれて居る。吾等も皆斯ういふ心をもつて世に立つべきである。勿論恩を施す者は其の報を望まぬとい

ふ心を以て恩を施すのが貴い事なのであるが、恩を受けたものは如何にもして之に報じたいといふ念を失つてはならぬ。前にも西郷南洲のことを引いたが、南洲の青年時代に其の家は至て貧困であつたので、父の吉兵衛といふ人が水引村の富豪板垣與右衛門から二百兩の金を借り、それで田地を買つて其の収入を以て家計の助けとした。併し其の返金が思ふに任せぬうちに幕末から維新へかけての大變動となり其儘になつて居たのであるが、明治五年六月に至り明治天皇西國御巡幸の際に、南洲も參議として車駕に供奉して鹿兒島へ歸つた。此の時板垣與右衛門は既に没して居たので、南洲は其の子の與三次に先年の借金に利足を添へ、總計四百圓を返却した。之に添へて板垣家へ遣はした書面は實に懇切を極めたもので、先づ

先年亡父拜借金いたし居り、其後私共にも度々の災難に逢ひ、一向御挨拶等も致さず其儘に打過居り候次第、何とも申譯無き仕合、亡父に對しても相濟まざる事に御坐候。

といひ、次に自分が今參議の重職に居ることを述べて、

就ては過分の重任を受け候儀も、畢竟亡父御懇情を以て莫大の金子拜借を得、是が爲に多くの子供を生育いたし候故にて、全く右の御蔭を以て開道を得候次第。

と深く感謝の意を表して居る。更に返金の事に及び、

此度歸省に付ては是非亡父の思ひ煩ひ居り候儀を相解き度念願に御坐候間、元利相揃へ差上げ候こそ相當の譯に御坐候へども……右に付ては本金二百兩の場へ數十年の利足相掛け候へば過分の金高に及び候義に御坐候へども、右の處宜しく御汲取下され、纔に二百金丈利足の心持を以て御肴料に差上げ候に付、是を以て返濟の御引結成下され候へば重疊大慶の仕合此事に御坐候。然らば亡父の靈魂をも安ぜしめ申度御坐候に付、其節差上げ置き候證文御返し下され候はゞ、亡父へも右の首尾相濟み候儀を申解き候印かと相考へ候に付、宜しく御了解成下され候處、偏に希ひ奉り候。

とある。尙ほ此の手紙を使を以て送るに就き

いづれ參上仕り候て特と申上ぐべき筈に御坐候へども、纔に中兩日の御滞留にて、逆も罷出候儀相叶はず候。

と其の無禮を詫びて居る。板垣家は其の地方の豪家であつたので此の貸金のことを別に心にも掛けて居なかつたさうである。殊に維新の政變によつて日本國中の様子が全く變つたのであるから、返金の必要などは無論考へられぬわけである。然るに南洲が此の如き態度を示したことは、如何に板垣家の人々を驚かせたか知れぬ。板垣家から慶應三年に西郷家へ品物を贈つたの

に對し、南洲の弟吉次郎から禮狀を出して居る。之によつて見ても板垣家で貸金の事などは心に掛けず、常に西郷家へ好意を表して居たことはほゞ推察が出来る。されば板垣家では南洲からの返金を受け、又斯く懇切なる手紙を受けて、事の意外なのに驚くと共に深く其の誠實に感じ入つた事と思はれる。又此の手紙の文句に南洲が亡父を思ふ至情の流露して居るのも、まことに貴く思はるゝことである。薩摩の人が今日でも皆南洲先生と稱して追慕して居るのも偶然ではない。

(尙ほ此處で一言したいのは此の手紙の『度々の災難に逢ひ』といふ一句である。南洲が生命を擲つて國事に奔走し、維新の大業に貢献したる大功は誰もよく知る所である。然るにそれを少しも説き誇ることなく簡単に『度々の災難にあひ』といつて居るのは、如何にも景慕すべきの至ではないか。又自分が參議の重任に就いたことも決して自分の功勳が拔群であつたとはいはず、板垣家より受けたる厚恩の御蔭であるといつて居る。自己宣傳のみ熱中して居る人々は之に對して愧死すべきではないか。)

元來東洋の教といふものは恩に報ずるといふことに重きを置くことが其の特色の一である。佛敎でも儒敎でも皆此點に於ては一致して居る。吾が國の童話に浦島太郎の話がある。(勿論こ

れは支那の話の轉訛したものであるが、斯ういふ話が汎く行はれたのは、之を受け容るゝ所の國民性が存するからと見なければならぬ。)それは浦島太郎が龜の生命を助けたので、其の龜が報恩の爲に彼を龍宮城へ送り、種々の歡樂を恣にせしめたといふのである。此の話は『恩を施さなければならぬ』といふ敎訓を含むと共に『恩を受けた時には必ず之に報じなければならぬ』といふ敎訓をも無論含んで居るものである。

互ひに恩を施すことに心懸け、又他より受けたる恩に報すべきことを心懸けるやうに、少年時代から習はすといふのが東洋の美風である。

然るに今日では此の美風が殆んど廢れてしまつて、互ひに權利を主張することのみを重んずるやうになつたのは痛歎すべき次第である。權利の主張といふことは西洋から傳はつたものとして一般に考へて居るが、西洋の思想を少しく究めて見ると、これは正義の觀念から出たものである。正義の觀念は人格尊重といふことを元として出來たものである。人には地位や職業にそれ／＼の差があつても、皆人格を具へて居るから、互ひに人格を尊重しあはなければならぬ。互ひに人格を尊重する以上は、互ひに不正な事を他の人に加へてはならぬ。これが即ち『正義を守る』といふことである。正義を守るものは他の人の權利を尊重すると共に、自己の權利を護らなけ

ればならぬ。他人が自己の権利を侵すのを黙認するのは、即ち他人の不正を許容することになる。それでは社會の秩序が立たぬ。それでは結局各自が不幸になる。斯ういふ考へから権利の主張をするので、

自己の権利を主張する事と、他人の権利を尊重する事とは、いつでも相伴つて居なければならぬのである。

然るに此頃では他人の事は頓着せずして、互ひに自己の権利をのみ主張し、これが新しい思想であるなど、いつて居る。

實に途方もない話である。其の権利の主張の本場といはるゝ西洋諸國に於ても、決して互ひに感謝することを忘れては居ないのである。是れは蘇耶教の影響であらうと思ふが、今日西洋諸國では互ひに感謝しあふ習慣が立派に出来上つて居る。自分は英國に滞在中などは殊に此の美しい習慣に就て羨しく思つたのであるが、例へば郵便局へ行つて切手を買ふ時に、賣る方の人にも『有難う』といふが、買ふ方の人にも『有難う』といふのが普通である。賣る方の人には之によつて生活して居るのであるから買ふ人に禮をいふ。買ふ方の方は切手を買ふことが出来た爲に遠方の知人へ便りをする事も出来るのであるから之に對して禮をいふのである。又役所など

へ届書を持つて行つても、受取る役人が『有難う』といふ。届書を出した方でも『有難う』といつて歸つて来る。役人の方では、斯う正直に届書を出す人が多から事務が滞滯せぬのであると思ふので、之に對して禮をいふ。届書を出す方では、無事に届を濟まして先づ宜かつたと思ふから役人に對して禮をいふ。

互ひに禮をいひあふ聲が誠に朗かな氣分を作るのである。

國民が互ひに朗らかな氣分を以て其の職に勵むことが、實に國運發展の基礎を作るので、自分はこの良い習慣が今に行はれて居るのを見て、英國が久しく世界に覇を稱して居たのは誠に偶然ではないと思つた。併し今日斯ういふことを西洋から學ばなければならぬといふのは實に残念な次第である。耶蘇教といふものは元來東洋から出て西洋へ入つたもので、耶蘇教によつて西洋人が感謝の念の貴いことを習つたのは、東洋から教へを受けたことなのである。然るに今日では反對に彼等よりして感謝といふことを學ぶやうになつた。返す返すも耻かしい次第である。

次に經文には『己に怨のある者に對して恒に善心を生ぜよ』といふことが教へてある。善心を生ずるといふのは彼の幸福になることを望み、彼の不幸に陥らぬやうに祈ることである。元

來不正な事をするのは其の心が煩惱に役せられて居るからである。是れは甚だ憫むべき者なのである。其の爲すことは不正であつても其の人は憫むべくして憎むべきではない。之に對して常に善心を持つべきである。但し斯くいへばとて人の不正を赦して制裁を加へるなどいふのではない。

不正な事に對して制裁を加へるのは、社會の秩序を保つために必要であると共に、其の人に反省を促すことになる。

是れは極めて必要な事である。唯だ之に對して制裁を加ふる動機が彼を怨み彼を憎むの念より出たものであつてはならぬのである。彼が其の過を悔いて善に移りことを心から祈りつゝ、之に非難を加へ攻撃を加ふるならば、それは正しく善事である。若し不正に對して非難を加ふることも出來ぬものは善人にあらずして怯者である。佛法は決して怯者たらんことを獎勵するものではない。

併しながら何事にも弊害の伴ふことを免れぬ。深い考へもなく唯だ『慈悲を主にする』とか『敵を憎まぬ』とかいふことのみを教へ込まれた者は、此の如き剛毅の氣風を失ふやうになる。此處は特に注意すべき所である。孔子の言に、

恭にして禮なければ則ち勞す。愼にして禮なければ則ち怠す。勇にして禮なければ則ち亂す。直にして禮なければ則ち絞す。

とある。朱子は之に註して『禮無ければ則ち節文無し、故に四者の弊あり』といつた。節文とは行ふ所が其の宜しきになふことである。節文が無いといふは甚しく一方に偏することである。形にのみ囚はれて其の根本の精神が忘られるやうになると何事でも弊の生ずるものである。禮を重んずることを忘れて唯だ外貌を恭しくすることにのみ努むるならば徒に心身を勞するに止まる。次に愼といふは恐怖して心の安からぬことである。禮を辨へずして唯だ言行を愼まんことにのみ努むるならば、常に戦々兢兢々として片時も心の安まることは無い。佛法を學ぶ者も深く心を此點に致さなければならぬ。(孔子の言の後半は此處に必要がないのであるが、絞とはあまりに急切にして人を假借せぬことである、序に一言する。)佛法を學ぶもの、最も重んずべきは慈悲であることは屢々述べた通りである。常に慈悲を行ふことを忘れぬ人が即ち佛の御心に叶へる人なのである。併し

世間で佛の様な人と言はるゝ人の多くは、優柔不斷にして殆んど物の用に立たぬ者のみである。

是れは慈悲といふことの眞の精神を辨へずして、唯だ何人をも敵とせず、何事に就ても争はず自分さへ黙つて辛抱して居ればよいと考へ、是れが佛の御心に叶へるもの、如く、誤解したる爲に生じたる過である。眞に慈悲心のあるものは他の人の過失を捨て置くことはせぬ筈である。其の過失を責め其の不正を懲し、之を正しい道に導き入れてこそ佛の御心にも叶ふのである。無量義經には文殊以下の諸大菩薩を稱めて此等諸大菩薩の具ふる種々の徳を擧げた中に、師子の勇猛なる衆獸を威伏して沮壞す可きこと難きが如し。

とある。此の如き心を見へなければ眞の善事は行ひ得ぬのである。

次には『怨親等しく苦まば先づ怨者を救へ』とあるが、此の訓戒は其の語に囚はれずして、深く其の意を味はなければならぬものである。佛は決して親疎遠近の區別を立てずして唯だ平等の慈悲を説かれたのでなく、吾が親に盡し吾が子を慈む心を推して凡ての人に及ぼすことを教へられたのである。されば前にもいつた通り、吾が親や妻子を飢餓に苦ませて置いて他人に施す者を『假名の施にして義施にあらず』として排斥せられたのである。然るに『己に親しい者を捨て置いて先づ怨のある者を救へ』と教へられたのは、前に教へられた所と矛盾するが如くに見らるゝやうである。併し人情の僻する所を戒めんが爲には、是れ程に強く説かるゝ必要

があつたであらう。親疎の別を立つことは決して悪くはないが、其の親疎の別に囚はるゝ所から種々の弊害が生ずるものである。『大學』の中に

人其の親愛する所に之て辟す。其の賤惡する所に之て辟す。其の畏敬する所に之て辟す。其の哀矜する所に之て辟す。其の敦惰する所に之て辟す。故に好みて其の惡きを知り、惡みて其の美を知る者は天下に鮮し。

とあるは能く人情を悉して居る。安井息軒が之に註したる中に、

其の親愛する所のものは其の言行を取りて之を他人に喩べ、其の親愛する所の言行にして賢者と同しければ、則ち己が之に親愛するは是なり。不肖者と同しければ則ち己が之に親愛するは非なり。此れ好みて其の惡を知り、惡みて其の美を知るの道なり。

といったのは亦大に參考とすべき言である。併し普通の人には此の如く反省することが甚だむづかしいのである。己の愛するものには其の永く榮えんことを欲し、己の惡むものには其の速かに亡びんことを祈るといふやうに極端に行きがちである。愛することは罪ではないが、愛するが爲に分別を失へば多くの罪を作るやうになる。此の如き愛は愛著と稱すべきものである。凡夫は兎角愛著に累はさるゝことを免れぬ。されば華嚴經には凡夫の生活を形容して、

愛著の大海を乾渴すること能はず。

といつてある。又維摩經には

諸の衆生に於て愛見の大悲を起さば、即ち應に捨離すべし。

といつてある。大なる慈悲心を起すのはまことに貴むべきことであるが、若し愛著の心が元となつて慈悲心を起すならば、自分の愛する者を幸福にせんが爲には其の手段を擇まず、その爲に他の多くの人に種々の累を及ぼすに至ることも稀ではない。故に之を深く戒めてあるのである。

自分達が毎日出逢ふ事柄の中にも斯ういふ例となるべきものは夥しくある。汽車や電車の中で懇意な人に出逢つた時に、『マア此處へお掛けなさい』といつて自分の側へ腰を掛けさせやうとするのは悪い事ではないが、時としては腰を掛けるだけの空間が無いのに無理に其の空間を作らうとして、無闇に隣の人を脇で推して居るのである。懇意な人に對する親切は結構であるが、其の親切を實行する爲に脇で推される隣人は誠に迷惑千萬なものである。是れは小さな出来事であるが、斯ういふ風の弊害は世間の各方面に見出さるゝやうである。論語の中に孔子が子張の『徳を崇くし惑を辨せんこと』を問へるに對して、

忠信を主とし義に徙るは徳を崇くするなり。之を愛しては其の生を欲し、之を惡みては其の死を欲す。既に其の生を欲し又其の死を欲す、是れ惑なり。

とあるは、吾等にとつて誠に貴い訓戒といふべきである。韓非子の中には面白い實話が出て居る。衛の靈公は彌子瑕といふ美少年を寵愛して居たが、衛國の法として竊かに君の車に乗つた者は重罪に處せらるべきであつた。然るに彌子瑕は王宮に居る際に其の母が急病であるといふ報知を受けて、急いで公の車に乗つて母の病を見舞つた。靈公は之を聞いて『孝なる哉母の爲の故に其の罪を忘る』と稱讚し、敢てその罪を問はなかつた。又或日公と共に園中に遊んで、自ら食した桃の味が美しいといつて其の半を公に薦めた。公は『我を愛するかな、其の口味を忘れて以て我に啗はしむ』とて、大に喜んで其の半を食した。其後彌子瑕が公の寵を失ふに及んで、公は『是れ嘗て矯めて吾が車に駕せるものなり。又嘗て我に啗はすに餘桃を以てせるものなり』とて之を重刑に處せんことを命じた。韓非子は之を評して

彌子の行は未だ初に變ぜず、而して前に賢とせらるゝ所以を以て後に罪を獲るものは愛憎の變なり。

といつた。此の話はよく凡夫の情を悉したるものである。

人は各僻する所があるから、自分の親しい者の言行は皆正しく思はれ、自分に怨のある者の言行は皆不正に思はれる。併し第三者の公平な眼から見たなら、吾が正とするもの必ずしも正しからず、吾が不正とするもの必ずしも不正ならぬ場合が少くないことであらう。寂然法師が兄に死別れて喪に籠つて居た時の歌が數首ある、その中に

なか／＼に訪はぬは深き方もあらむ心淺くもうらみつるかな

といふのがある。此の悲しい時に來て慰めてもくれぬ人を、不人情なと怨んで見たが、又更に思ひ返して見れば『悲しいことを語り出して、却て悲みを添へてはならぬ』といふ心遣ひから、態と訪ひ來ぬのかも知れぬ。その深き心遣ひを察せずして怨んだのは考へが淺かつたと自ら叱つたのである。誰でも斯様に思ひ返す力があれば、恩怨の關係のために種々の累を生ずることは無くて済むであらう。佛は吾等をして共に深く反省して、其の過より遠ざからせたいといふ御心から、『自分の親しいものと、自分の悪いと思ふものとが共に苦んで居た時には、先づ其の悪い方の者から救はうといふ心になれ』といふ敎訓を與へられたのである。

常に是れ程に強く己を制して居れば、如何なる場合に臨んでも過を免るゝことが出来るに違ひない。

深く自ら省み、強く己を制することが吾等凡夫には最も必要である。此の敎訓の意を深く味ふべきである。

次に『自分を罵る者に對して憐心を生ぜよ』といひ、又『自分を打たんとする者に對して悲心を生ぜよ』といふのに就ては此處で改めて説明するにも及ぶまい。若し自分が罵られ若しくは打たるべき過を犯したのであれば、甘んじて其の呵責を受くべきのみである。若し又自分に其の過がないのに罵詈雑言を加ふるならば、彼の爲す所が不正である。不正なる行を爲すものは其の心が昏く其の智の足らぬものであるから、之を哀愍すべきである。是れが菩薩の道であることは前々から繰返して説いた所である。彼の亂暴を阻止するにしても、決して瞋恚の念に依つてせず、たゞ哀愍の念によつてすべきである。畢竟

菩薩道を勵むものは何人にも敵意をもつべきでは無い。

終りに『諸の衆生を視ること猶ほ父母の如くせよ』といふのも、菩薩道の精神から見れば誠に尤もなる敎である。諸の衆生の中には愚者もあらうし又不正な行をして居る者もあらう。併し其の何れの者も皆佛性を具へて居るのであるから、之を導くに其の道を以てすれば何時までも愚者ではなく、又何時までも惡人ではないであらう。決して之を疎んじ惡むべきではない。又

吾等が此世に生存するに就て直接間接に一切衆生の恩を此身に負うて居ることは前にも屢々説いた所である。されば吾等は一切衆生に對して愛敬の念を失つてはならぬ筈である。

以上優婆塞戒經に説かれたる十一事は、社會の一員としての心得を能く悉されたるもので、若し各自が此の如き心を以て相交るならば社會は常に平和安穩であつて、如何なる事業も皆著しき進歩發展を遂ぐるであらう。然るに世俗の多くの人の爲す所は一々皆之に反して居る。例へば人の和合せるを離壊せしめて自ら快とし、人の善事を蔽ひて人の過を擧げ、人の秘事を聞けば喜んで之を世間に吹聴するといふやうに、世間に累を多くするやうな事のみをして居るのである。之を改むるには教の力に依らなければならぬが、如何に教が行はれても、天下に一人も小人の無いやうになるといふことは容易に望まれぬ。唯だ世間の重要な地位に立ち其の周圍に感化を及ぼし得る人が、必ずしも身分や職業に就ていふのではない。野に耕す人でも街に立つて物を賣る人でも、其の交友の間に於て重要な地位を占むることは出来る。それは其の人の具ふる力量と徳望とに依るものである。自ら努めて日に新にすることを怠らなければ世間の風儀も自ら改まつて行くのである。易に君子豹變す小人面を革む。

とあるのは此の事である。伊藤東涯が之を説明して

君子は則ち過を改め善に遷り以て其の徳を修む。小人は則ち心化すること能はずと雖も亦其の面を革めて以て上の教命に従ふ。

といひ、又之に續けて

君子小人各其の徳に隨ひ、一新せざること無し。其の極を言へば則ち黎民於變り時雍ぐといふ者是なり。大化の行はるゝ固より戸毎に諭し人毎に曉らしめて能くすべきに非ざるなり。といつたのは能く其の意を悉して居る。但し昔は國王とか大臣とか諸侯とかいふ者が此處にいふ『君子』の道を行じたのであるが、今日は凡ての責を國民が分擔しなければならぬ時になつて居る。されば各自が皆此處にいふ君子を以て自ら任じ、其の周圍の人々をも率ゐて行く覺悟をもたなければならぬのである。志有る人は皆彼の優婆塞戒經に説かれたる所を實行しやうと決心すべきで、是れが即ち世を救ふ所以であると共に己を全うする所以である。

又實積經には護世者の心得が八つに分けて説いてある。護世者とは世間の重要な地位に在る者のことで、此等の人は皆世を護るべき責任をもつて居るのであるから、其の責を果すべき道を教へられたのである。此の八ヶ條の精神は前の優婆塞戒經に説かれた所と異なる所はない

が、參考の爲に其の文を一通り擧げて見ると、
 護世者は八法を以て世を護るべし。一には言と行と相應じて違ふことなかれ。二には尊長を
 奉敬して、輕んじ慢ることなかれ。三には言辭を柔軟にして兪獷なることなかれ。四には謙
 下恭順にして常に遜意を執れ。五には常に質朴にして諛諂することなかれ。六には常に仁和
 を修めて、佞飾することなかれ。七には一切の諸惡を爲すことなかれ。八には徳本を以て世
 間に隨ふべし。

とある。之に就て一々委しく説明する必要もあるまいと思ふから、唯だ二三の心附いたことの
 みを言ひ添へて置かう。

先づ言行の不一致といふことは最も戒むべきもので、是れは儒教などでも殊に重要な事とな
 つて居る。孔子も『人にして信無ければ其の可なるを知らず』といひ、それは宛も車に牛馬を
 繋ぐべき横木の無いやうなもので、全く何の働きも出来ぬといはれた。又司馬牛の仁を問へる
 に對して孔子は『仁者は其の言ふや訥す』といひ、更に重ねて『之を爲すこと難し、之を言ふ
 に訥すること無きを得んや』といはれた。訥とは容易くいはぬことである。實行し難いことを
 容易くいふは孔子の固く戒められた所である。淮南子には小人の常態を説いて、

言と行と相悖り、情と貌と相反す。

といつてある。斯く言行の不一致は甚だ戒むべきことであるが、不言實行といふことも決して
 最上の行ではない。言つて行はぬ者に比べて見れば、言はずして行ふ者は遙かに貴い。併し
 自分が正しいと信じて行つたことは、之を多くの人にも知らしめて、共に之を實行させたいと
 思ふのが即ち慈悲ある人の心情でなければならぬ。寶積經に

口に説き身に行ふ人は雨有りて雷あるが如くにして是れ最上なり。身に行ひて口に説かざる
 は雨有りて雷なきが如くにして第二なり。口に説きて身に行はざるは雷ありて雨無きが如く
 にして第三なり。口に説かず身に行はざる人は雷もなく雨も無きが如くにして最下なり。

とあるは良き教である。孔子が『徳有る者必ず言有り言有る者必ずしも徳有らず』といはれた
 のを朱子が註して、

徳有る者は和順中に積みて英華外に發するなり。
 といつたのは能く當つて居る。英華外に發したる言は凡ての之を聽く者を益すること極めて大
 なるべきである。

又言語の兪雜にして聽く者の感情を害ふことの無いやうに意を用ゆるのも、護世者としては

極めて肝要の義である。言を飾つて人を悦ばさうと務むるには及ばぬけれども、柔軟にして人の心に入り易きやうにと努むることは必要である。たとへ親切な心を以て人に對しても、其の言語が冗雑であるが爲に彼の感情を害するならば、其の親切も貫かぬことになつてしまふ。其の邊の用意の足らぬのは、畢竟親切心がまだ充分でないからである。世を導き人を救はうといふ志が厚ければ、『如何に之を説いたならば人の心に入り易いであらうか』といふ點に就て工夫するのは當然である。孔子の言に

質文に勝てば則ち野なり、文質に勝てば則ち史なり。文質彬彬々として然して後に君子なり。とある。是れは言語にのみ關して述べられたのではないが、野なることの咎を免れんとするには言語に注意することも亦極めて肝要である。何事を爲すにも、其の用意が充分でなくて能く其の志を達し得るものはない。佛の化導を賛げんとする者の如きは、特に其の用意に缺くる所があつてはならぬ。

次に謙下恭順にして常に遜意を執るといふことは、人と事を共にするに當つて殊に大切な義である。凡て謙遜といふことは『自ら足れりとせざる心』が元となつて發するものである。されば志の大なる者ほど謙遜なわけである。揚々として人に誇る者は、自己の現在に満足して、

此より以上のものを求めぬので、其の志の極めて小なる者である。齊の晏子の馭者が意氣揚々として馬に鞭つて居るのを見て、その妻が離別を求めたといふのは有名な話であるが『史記』には其の妻の語を寫して如何にも妙を極めて居る。その語に

晏子は長六尺に満たず、身齊國に相として名諸侯に顯はる。今者妾其の出るを觀るに、志念深く、常に以て自ら下る者有り。今子は長八尺にして乃ち人の僕御爲り。然るに子の意自ら

以て足れりとす。妾是を以て去らんことを求むるなり。とある。晏子が名相として諸侯の間に知られながら謙遜であつたのは其の志が大きくて、常に自ら足れりとしなかつた爲である。馭者が駟馬に鞭つて揚々として居たのは、其の志が小であつた爲である。此の馭者の妻の語は眞に吾等の爲に良い藥石である。たとへ吾等が少しく物事を知つて居ても、佛に比ぶれば天地ほどの差である。又少しく世間の用に立つやうな事をしたとしても、佛の救護の御方に比ぶれば固よりいふに足らぬものである。之を以て自ら足れりとすべきではない。『佛と等しくなるまで努力せよ』との訓戒を忘れぬならば、いつも謙下恭順であるべきである。

次に諂諛の卑むべきことは多言せずして明であるが、諂諛するものは己を欺き又人を欺く者

である。此の如き事を常に續けて居れば智慮も無く氣力も無い者になり切つてしまふ。即ち全く生きがひの無い人間となつてしまふのである。孟子は公孫丑の問に答へて、
曾子曰く、肩を脅して諂ひ笑ふは夏畦よりも病ると。子路曰く、未だ同じからずして言ふ、
其の色を觀れば赦々然たり、由が知る所にあらずと。是に由つて之を觀れば、君子の養ふ所知るべきのみ。

といつた。『夏畦よりも病る』といふは暑い盛りに田畝に出て働くよりも多く疲れるとの意である。『未だ同じからずして言ふ』とは他人の意見が一致せぬのに、一致したやうに装つて其の意を迎ふることである。由とは子路の名である。子路は到底斯ういふことを考へて見る氣にもなれぬといつたのである。斯く諂諛を嫌ふことの甚しきは、即ち自ら養ふことの必要を充分に認めて居たからである。趙順孫は『君子の養ふ所』といふのを説明して『君子は正氣を養ひて以て邪に入らざるなり』といつた。養はざれば以て其の大を成すことは出来ぬ。孟子が浩然の氣を説いて（正氣といふも浩然の氣といふも同じこと）

其の氣たるや至大至剛、直を以て養ひて害すること無ければ則ち天地の間に塞る。

といつたのは大に味ふべき言である。吾等も常に養うて怠らなければ佛菩薩の境地にも到達し

得べきであるが、諂諛は其の妨げとなること最も甚しきものである。併し誰でも自ら屈して人の意を迎ふることを愉快に感ずるものはない。愉快ならぬことを忍んで爲すのは畢竟成功を求むる念のあまりに急なるが爲である。自分の爲すべきだけの事を爲して、其の結果の自然に現はれて來るのを待つ心があれば、斯る卑しい行をせず済む筈である。文化文政の頃の附句に
花待つ心それが千兩

といふのがあつたのを覚えて居るが（何の本にあつたか忘れたけれども）花の開くのを待つ心は眞に清らかなものである。如何に急いでも無理に花を開かせることは出来ぬから、靜かに其の開くのを待つより外はない。『花待つ心』を以て世に處するならば、諂諛によつて幸を求むるやうな念は起らぬであらう。

終りに『徳本を以て世間に隨ふ』といふが最も肝要なる一項である。世間の事物は皆それぞれに價値をもち、それ／＼に存在の意義をもつて居るけれども、其の眞の價値を認め、其の眞の意義を明に知つて之に従事する人が少いから、何れの方面にも一時的の間に合せ仕事ばかりが多くて、永い生命をもつて居る仕事が少ないのである。譬へば一輪の櫻の花は至て小さいものであるが、此の花は櫻の枝の先に咲く。此の枝は幹に連り、此の幹は根に連り、此の根は土の底

まで深く延びて居るのである。此の根が無くなれば、美しく咲いた花も忽ち凋んでしまはなければならぬ。一輪の花が数日の間美しく開いて居るためには、土の底へ深く延びた根を要すると同様に、吾等の仕事に遺憾なく出来るためには、吾等が常に確乎たる信念の上に立つて働いて居ることが必要である。それが假令至て小さい仕事であっても、之を完全に果すのには確としたる信念をもつことが必要である。それは小さい一輪の花にも根が必要なのと同様である。されば吾等は世間一切の事物に對する際に、其の一切の事物の眞の意義を辨へ、眞實の心を以て之に對し、吾等の責を果すためにはいつも全力を注ぐべきである。

吾等は當に爲すべきことを爲せば、それで充分なのであるが、爲すべきことを遺憾なく爲し得るものは甚だ稀である。孔子は『辭は達するのみ』といはれたが、自分の思ふ所を遺憾なく現はすのを『達する』といふのである。『達するのみ』といへば至て簡單のやうであるが、達するだけに言ひ現はすのは容易に出来ることではない。『茶話眞向翁』といふ書に茶道の極意に就て千利休の語つた所が記されてある。

或人利休居士に、茶の秘事は如何なる事かと問ひけるに、居士云く、茶は服のよきやうに立て、炭は湯の沸くやうに置き、花は其花の様にいけ、さて夏は涼しく冬はあたたかにする、

此外に秘事なしと答へられしにて、問ふ人不興して、それは誰も合點の前にて候といふに、居士云く合點ならば、其如くして見られよ、御弟子になるべしと也。

是れは誠に味ふべき話である。茶の湯の秘事として別にあるのでなく唯だ客を待遇するに禮を盡すといふだけの事である。併し是れ丈の事を實行して遺憾なきを得るのは誠に容易の業でない。小堀遠州の壁書といふものがあるが、その末段に

道具とてさして數奇すべからず、珍しき名物とても其のむかしは新し。只家に久しく傳はりたる道具こそ名物ぞかし。古きとても形いやしきは用ひず。新しきとても形よろしきは捨つべからず。數多き事美むべからず、少きを厭はず。一品の道具なりとも幾度も持てはやしてこそ末々子孫に傳はる道もあるべけれ。一飯を進むとても志薄きは、早瀬の鮎水底の鯉とても味あるべからず。まがきの露、山路の蔦かづら、明暮に來ぬ人をまつ葉風の釜の煮る音絶る事あるべからず。

とある。是れは茶道に就ての教訓である。けれども吾等の世に處するの道を殆んど説き悉したる觀がある。

吾等は何事に就ても常に深く心を用ゐ、少しも遺漏の無いやうに努めなければならぬ。斯く

して初めて吾等の當に爲すべきことを爲し得らるべきである。然るに何事をするにも、勞の少くして功の多からんことを望むのが普通の人情である。人の目につかぬ事にまで全力を注いで、其の完全を期するといふことは、確とした信念をもつて居る人でなければ出来ぬことである。如何なる事を爲すにも『此の事に吾が全力を注いで、世のため人の爲に出来る丈多く役立つやうに努めやう。吾が努力が人に知られても知られないでも、それは更に問ふべき所ではない。吾はたゞ此の事に力を盡すことに依つて善根を積み、一步たりとも佛の境界に近づき得べきことを吾が喜びとしやう』といふ念があつて、初めて充分の働きの出来るのである。是れが即ち『徳本を以て世間に隨ふ』といふことである。何事を爲すにも

功を立てやうといふ考へでは充分のことは出来ぬ。徳を積まうといふ考へでなくてはならぬ。

功を立てやうといふ考へは一轉すれば『人に示したい』といふ考へとなる。人に示したいと思つて働く人は、人が之を顧みなければ失望して、その努力を止めてしまふのである。之に反して徳を積まうといふ考への人は、人に示さうといふ念を少しも持つて居ないのであるから、唯だ自分が自分の仕事に全力を注ぎ得たことに満足を感じ、外に向つて何事をも求めぬのであ

る『徳本を以て』といふのは即ち此の考へである。即ち『徳を以て本とする所の念を以て世間の事に力を盡す』といふ意である。

法華經の法師功德品には、佛の正法を世に弘むる者の態度が最も詳かに説き示されてあるが、其の中に

諸の所説の法其の義趣に隨ひて皆實相と相違背せず。若し俗間の經書、治世の語言、資生の業等を説かんでも皆正法に順ぜん。

とあるは殊に注意すべきである。法師が法を説くに當つては有らゆる種類の人を相手とするのであるから、其の説く所の法も或時は高遠に或時は卑近に、或時は深く或時は淺く、聽く人の機根に應ずるやうに説かれなければならぬ。併し如何なる場合にも佛の御心と一致するものでなければならぬのである。佛の御心と一致することは即ち絶對の眞理と一致することである。『皆實相と相違背せず』といふのは即ち此の事である。次に俗間の經書といふは世間一般に行はるべき倫理道德のことである。治世の語言といふは法律、政治等に關する事である。資生の業といふは生活の本となるべき業、即ち商業等のことである。此等の事を營むにも皆佛の正法を基とし、佛の御心に一致し得るやうな心を以てするやうにしなければならぬ。法師は常に

此の事を説き勸むべきものなのである。

天台宗が日本に弘まつたのは傳教大師の力であるが、此の傳教大師は學も深く徳も高くして桓武天皇の御信用も厚く、朝野の歸依を一身に集めた人である。此の人が弟子に與へた遺誠の中に

道心の中に衣食有り、衣食の中に道心無し。

とあるが、誠に深く味ふべき語である。道を究め道を弘めやうといふ念が厚ければ、世間の人が之に歸依するから衣食の資に事缺くやうなことは決して無い。然るに衣食に不足の無いやうにしたいといふことばかり考へて居ると、道心は全く無くなつてしまふのである。是れは出家の人の爲の訓誡であるが、世間の人にも亦適切である。確としたる信念をもち、吾が責を果し吾が務を盡すために何時も全力を盡さうといふ考へで世に立てば、たとへ其の時によつて運不運の變化はあつても、兎も角も世に立つて行くこと丈は必ず出来る。さうして其の心の中には常に歡びが充ちて居る。之に反して唯だ利益を收むることのみ汲々として、その他の事を一切顧みぬといふやうな人は何時も世間の潮流の變化にのみ心を惹かれて、何等の確信もないから、其の心は常に安穩でなく、眞に平和の日を送ることは出来ぬのである。

商人などは専ら利益のみを考へて居れば宜いものゝやうに思ふ人もあるが、それは眞の商人の道ではない。白樂天の『琵琶行』には曾て全盛を極めた妓女が商人の妻となり、幾くもなく其の商人に疎んぜらるゝやうになつた悲みを叙して『商人は利を重んじて別離を輕んず』といつてある。併し利を重んじて別離を輕んずるやうな商人には大なる成功は出来ぬであらう。勿論商賣をする以上は利益といふことを念頭に置かねば行かぬが、眞の商人は其の商賣の道に興味をもつ人でなければならぬ。仕入れの道、販賣の方法等にはそれゝ多くの苦心が無ければならぬ。其の苦心が酬ゐられて成功を收め得た時には大なる悦びがあるであらうが、其の悦びは單に多くの金が入つた爲の悦びでなく、自分の計畫が狂はなかつたことに就ての悦びが其の大部分を占めて居なければならぬ。又明治天皇の御製には

國を思ふ道に二つはなかりけり戦の場に立つも立たぬも
とあるが、其の戦の場に立たぬ人の中には勿論商人も含まれなければならぬ。出来る丈善い品を出来る丈廉く世間に供給して、多くの人の生活に利益を與へてやることは、商人の國家社會に盡す道である。此の心はやがて佛の教へられたる慈悲の道とも一致すべきものである。此の如き心を以てする商賣は即ち『正法に順ずるもの』といふべきである。

日蓮上人は四條金吾に書を與へて『人身は受け難し爪の上の土、人身は持ち難し艸の上の露、百二十まで持ちて名を腐して死せんよりは、生きて一日なりとも名を揚げんことこそ大切なり』と戒むると共に、

藏の財よりも身の財すぐれたり、身の財よりも心の財第一なり。

といった。藏の財といふは金錢とか寶物とかの類、即ち有形の富である。身の財とは技藝とか才能とか學識とかいふやうな、人の身に着いて居るものゝ事である。心の財とは正しき信念のことである。藏の財も身の財も共に大切なものである。藏の財と身の財とを集めなければ國家の發展は到底出來ぬ。併し藏の財や身の財を運用するものは吾等の心である。此の心がシツカリとして居なければ藏の財も身の財も決して世を益するやうにはならぬのである。されば吾等は心の財を充分に積んで、その力に依つて藏の財をも、身の財をも充分に活用すべきである。佛教に於ては世間の事業をも、富の蓄積をも決して輕んずるのではないが、唯だ心の大切なることを忘れて、事業や富にのみ重きを置く者の惑を醒さんが爲に種々の訓戒が與へらるゝのである。

如何に道が貴くても、生命を保つことが出來ずして道を行ふことの出來やうわけは無い。生

命を保つためには物質に不足があつてはならぬ。されば世を導くべき地位に在る人は尤も意を此處に致さなければならぬ。易の繫辭傳に國を治むるの大本を説いて、

天地の大徳を生といひ、聖人の大寶を位といふ。何を以てか位を守る、曰く仁。何を以てか人を聚むる、曰く財。財を理め辭を正し、民の非を爲すことを禁ずるを義といふ。

とあるは殊に注意すべきである。此等の點に意を用ゐずして唯だ空理を談ずるは腐儒の爲すことである。佛教に於ても決して理財の道を輕んぜず、收入の處分方に就てまで委しく説かれてあることは、前に述べた通りである。併し財を求むるに正しき道に依らぬ時は、世に多くの累を及ぼし、其の求め得たる財も其の人を幸福ならしむる力がないやうになるから、之に對して種々の戒めが與へられて居るので、其の一例をいへば中阿含經には六の非道を擧げて、嚴しく之を戒めてある。其の六非道といふは次の如くである。

一には博戲を爲して財貨を求むること。二には時に非ずして財貨を求むること。三には放逸にして財貨を求むること。四には惡友に親みて財貨を求むること。五には妓樂を喜まんが爲に財貨を求むること。六には懶惰にして財貨を求むること。

是れは通讀したのみで能く分ると思ふが、第二の『時に非ずして』といふのだけが一通りの説

明を要するやうである。凡て正しき業によつて利益を得るには時を待つことが必要である。例へば春耕し夏耘つて、秋に至つて初めて收穫がある。商人が仕入れに投じた金は、其の品物が賣れてから初めて回収が出来るのである。若し時に非ずして利を收めんとするものは、何か投機的の事をしなければならぬ。投機によつて利を收めんとするは道に背くこと甚しきものである。仍て同じ經の中には投機的の仕事をする者を戒めて、六の災を擧げてある。それは自ら身を護らず、財貨を護らず、妻子を護らず、人の爲に疑はれ、苦患多く、人の爲に謗らる。

といふのである。實際投機的の仕事をして居る人の状態は此の通りである。運好くして利益があつた時には其の好運に心驕つて濫費を厭はず、運が悪くなれば忽ち其の家族をも飢餓に泣かしむるやうになる。而して其人自身には放縱の習慣がついてしまふから眞面目な働きは出来なくなる。『身を護らず、財貨を護らず、妻子を護らず』とあるはいかにも適切である。それとは多少方面がちがふが、何等の主義もなく理想もなく、唯だ世間の人氣を集むることのみ熱中し、自ら政治家と稱して活動を續けて居る人が當世に少くない。これも亦一種の投機業者であつて、己の身を護らず己の家を護らず、世間の平和を壞るの罪は極めて大なるものである。

亦佛の呵責を免れぬ徒である。

吾等の日常生活に關して佛の教へられた所は決して此に止まらず、なほ甚だ豊富なるものが、以上を以て其の一斑を知ることが出来やうと思ふ。佛は最も深遠なる教理を説きたまふと共に、君臣父子夫婦等の間に於て特に意を用ひべき微細の事に就ても、此の如く懇ろに教へられたのである。佛こそは眞に吾等凡ての者の大導師として仰がるべき方である。但し佛の教が如何に吾等に適切であつても、吾等自身が此の教を實現すべく努力しなければ、貴い教でも何の用をも爲さぬであらう。大毘婆娑論の中に、

人一搏の食を施して能く解脱分の善根を種ゆることを得るものあり。五年に一度の大施會を作すも解脱分の善根を種ゆること能はざるものあり。或は一日の齋戒を持ちて能く解脱分の善根を種ゆることあり、身を終るまで戒を持つも解脱分の善根を種ふるることあり。或は一偈を誦するも能く解脱分の善根を種ゆることあり、善く三藏の文義に通ずるも解脱分の善根を種ふることあり。其故如何となれば、若し此事を以て勇猛に解脱涅槃に回向すれば永く生死を離る。若し是の如く回向せざれば、終身戒を持ち學を修むるも解脱すること能はざるなり。

とある。解脱を得るとは即ち覺を得ることである。即ち凡夫の境界を離れ得ることである。勇猛心なくしては、如何に久しい間修行しても解脱は得られぬといふは、まことに尤もなる訓戒である。何事を爲すにも精進といふことが大切である。精進とは

勤めて善法を行ぜんことを樂ひて、自ら放逸にせざる、之を精進といふ。(法界次第)

といふ説明で略ぼ悉されて居る。勤めて行はなければならぬ。又之を勤むることが悦びの念によつて伴はるゝやうでなければならぬ。最初は勤むることが苦であるけれども、勤めて已まなければ、自ら勤め得たことに悦びを感ずるやうになる。斯くして初めて意義ある毎日を送ることが出来るのである。

佛が教を興へらるゝことの斯くまでに懇なのは、即ち佛が凡て吾等を吾が子と見たまふに依るものである。法華經に『其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』とあるのは、決して釋尊御在世の時の衆生に限らず、末代に生れたる吾等も皆其の中に含まるゝのである。天台大師の『法華文句』には

一切衆生皆三種性得の佛性有り。即ち是れ佛子なり。故に其の中の衆生は悉く是れ吾が子なりと云ふなり。

とある。吾等は何の教も受けず、何の修行もせぬ前から既に佛と成り得べき性質を具へて居るのである。之を名けて正因佛性といふのである。此の佛性は如何なる人にも具はり、相異なること無きものである。而して吾等は教を學んで智慧を磨いて行く間に、絶對の眞理が次第に明らかになつて、次第に佛の境界に近づいて行けるので、之を了因佛性といふのである。又吾等が多くの善事を爲し、多くの功德を積むによつて、吾等の學び得た所が活用せられて、佛の化導を賛くことも出来るやうになるので、之を名けて緣因佛性といふのである。三種の佛性といふのも畢竟一であるが、智慧を磨き功德を積むことに努めなければ、切角佛性を具へながら何時までも凡夫で居なければならぬ。然るに吾等には生れながらにして物事を辨別する力が具はつて居る。此の力を擴充して行けば、いくらでも智を磨くことが出来るのである。又生れながらにして悲しいこと嬉しいことに感ずる力が具はつて居ると共に、他の人の悲しいこと嬉しいことに同感する力も具はつて居る。此の力を擴充して行けば、いくらでも功德を積むことが出来るのである。三種の佛性を天台大師が『性得』といつたのは之が爲である。

萩も桔梗も女郎花も春の始めに芽を出した時には、皆同じやうに緑の葉のみである。併し之に水を注ぎ、よい日の光りに當るやうにして丹誠をしてやると、秋に至つて皆それ／＼の美し

い花を開くのである。人も赤子の時には乳を求めより外は何も知らぬやうに見えるが、既にその時から佛性が具はつて居るのであるから、年の長ずると共に修養を怠らぬやうにすれば、後には佛菩薩の境界にも近づくことが出来るのである。

みどりなる一つ草とぞ春は見し秋はいろ／＼の花にぞありける

といふ古歌がある。其のいろ／＼の花を咲かせるために、佛は日の光りとなつて常に之を照して居らるゝのである。日は何物をも皆照す。又幾千萬年の昔から幾千萬年の後まで變らずに凡てを照して居る。佛の慈悲も亦その如くである。吾等は面のあたり佛の説法を聴聞することは出来ぬけれども、佛の吾等に遺されたる教は朽ちず亡びずして今に存して居る。吾等が之によつて修行することを怠らなければ、吾等の具有する所の佛性は次第に光を發して來るのである。吾等は皆佛子と稱せらるべきものであるが、佛子たるに耻ぢぬ行を積んでこそ眞の佛子として許さるべきであらう。『華嚴大疏』に三種の佛子を區別し、唯だ佛性を具へたのみで未だ佛法を學ばぬものを外子といひ、小乗の佛法を學んだものを庶子といひ、大乘の教によつて菩薩道を勵むものを眞子といつてゐるのは、即ち此の意に依るものである。佛地論に能く佛種を紹ぎて斷絶せしめず、故に佛子と名く。

とあるは即ち此の眞子のことである。吾等の志す所は此に在らなければならぬ。

今や大乘の佛法は獨り吾が日本に存するのみである。前にもいつた通り、印度にはセーロン島に小乗の教が僅かに存するのみで、大乘は全く混び果てた。支那には大乘を研究して居る學者はあるさうであるが、活きた宗教としての佛敎は全く廢れた有様である。其外シヤム等にも佛法が行はれて居るが、それは小乗敎に過ぎぬ。併し吾等は斯る形勢を見ればとて、些かも失望するには及ばぬ。

釋尊は凡ての人類を救はんが爲に此の地上に生を享けられたのである。

釋尊を『印度に生れた』と思ふのは當らぬ。假令印度や支那に佛法が廢れても、吾が日本國に立派に残つて居るのは吾等の大なる悦びである。無著の作つた瑜伽論に（此の人は佛滅後一千年頃の人である。）

東方に小國有り、其の中には唯だ大乘の種姓のみ有り。

といつてゐる。其の後鳩摩羅什が印度に入つて大乘を究めたる際に、其の師とした所の須梨耶蘇摩が彼に法華經を授けて、

佛日西に入りて遺耀將に東に及ばんとす。此の經典は東北に縁有り、汝慎んで傳弘せよ。

といつたことが羅什の弟子僧肇の書いた翻經記に見えて居る。此の如く佛法が漸く東方へ傳はり、東方に於て榮えて行くであらうといふことは印度の人々も夙くから想像して居た所である。其の想像が事實となつて獨り吾が日本國に大乘の流布して居るのは不思議な次第ではないか。

尤も日本國に於ても大乘の教が如何なるものであるかを辨へて之を信奉して居る人は、それ程多くはないやうである。各自に其の祖先の墓を寺に托してあつて、それに依つて『自分の家は何々宗である』と稱して居るけれども、其の宗の教義を明に知つて居る人はあまり多くない。實は外國の人に對して『日本は佛敎國である』など、いふのは恥かしいやうな次第でもある。併し兎にも角にも大乘の經典の大部分が此國に存し、大乘各宗の儀式制度が混びずして存し、又たとへ少数と雖も大乘の教を委しく究め、深く信ずる人が此國にのみ存するのであるから、頼もしい事といはなければなるまい。それに近來世間が非常に暮し悪くなつて、種々の不祥なる出來事が頻發すると共に正しい信仰を求むる人も段々と出て來るやうに見える。今日の様な世の中になると誰も生温い態度で世の中に立つことは出來ぬ。例へば化粧品を賣るのも『良い品だから試して下さい』など、云つて居ては買ふ人がない。之を使はないと流行に後

れるぞ』といつて威かすと、流行に後れては大變だと思つて買ふ人が多い。斯ういふ時代であるから、我儘勝手な事をする人は最も露骨にその我儘を押し通すので、何となしに世の中が物騒である。併し此處までになると『何とかして新しい活路を見出して、吾も人も共に生きがひのある生き方をしたいものだ』と考へる人も出て來る。孟子が水の益々深さが如く、火の益々熱さが如くならば亦運らんのみ。

といつた通り愈々行き詰りとなつて、此の行き詰りの中を打開しなければならぬといふ要求が盛になれば、『眞實の生活をしなければならぬ』と思ふ人も段々に出て來なければならぬ筈である。恐らく是れが日本國に大乘佛敎の弘まる機運を作るものであらう。

勿論斯ういふ頼もしい考への人が最初から多く出やうとは思はれぬ。併し假令少數なりとも、斯ういふ考への人は最も力強い人である。斯ういふ考へで正しい信仰を求むる人は、眞に世の中の立て直しをする力をもつ人である。其の信仰は唯だ習慣的に幼い時から習ひ覺えたものでもなく、又一身一家の安全を祈らんが爲のものでもなく、自ら眞實の生活に入り、又眞實の生活をする者を一人でも世間に多く出したいといふ眞摯なる要望によつて生じたものであるから、容易には崩れぬのである。斯る頼もしい人が二人より三人三人より五人と多くなるに隨

ひ、次第に世間を動すべき大なる力が蓄へらるゝやうになるであらう。『中庸』に
 今夫れ天は斯の昭々の多きなり。其の窮り無きに及びては日月星辰繫り萬物覆はる。今夫れ
 地は一撮土の多きなり。其の廣厚なるに及びては華嶽を載せて重しとせず、河海を振めて洩
 さず、萬物載せらる。今夫れ山は一卷石の多きなり。其の廣大なるに及びては草木之に生じ
 禽獸之に居り、寶藏興る。今夫れ水は一勺の多きなり。其の測られざるに及びては蚊龍魚鼈
 生じ貨財殖す。詩に曰く維れ天の命、於穆として已まずと。蓋し天の天たる所以をいふな
 り。

とある。小を積んで已まざれば必ず大を成す。動いて已まず、勤めて已まざれば必ず大なる功
 徳を積み得らるべきである。今日に於て大乘を學ぶものは各一卷石に過ぎず、一勺の水に過ぎ
 ぬが、勤めて已まなければ草木生じ禽獸居り、蚊龍魚鼈生するの盛觀も望まれぬことではある
 まい。唯だ勤むべく勵むべきのみである。

七、三寶の恩

佛は種々無量の方便を以て吾等衆生を教へ導き、終に眞實の教を信奉し得るやうにと心を碎

かれたのである。其の方便は種々無量である。されば大莊嚴菩薩は之を讚歎して

清淨無邊にして思議難し。(無量義經)

といつた。佛が斯く無量の方便を説きたまふことは、即ち佛が諸法の實相を究め盡したまへる
 ことを證するものである。如意寶珠は一の珠であつて其の中より無量の寶を出すといふが、佛
 の無量の方便は其の一心より出たるものである。實相を究め盡したるよりも大なる力はない。
 されば又大莊嚴菩薩は佛が勤苦して大覺を成じたまへることを稱へて
 是故に今自在の力を得て、法に於て自在にして法王と爲りたまへり。
 といつた。

其の實力が無くて充分の働きの出来るものではない。徳川家康は唯だ智略を以て天下を取つ
 た者の如くに一般に考へられて居るけれども、其の壯年時代には兵を用ゆるの巧なるを以て諸
 侯の間に顯はれ、『海道一の弓取』とさへ呼ばれたものである。天正十年に武田氏が亡びて後、
 家康は織田信長を安土の城に訪ひ、其の勝利を祝したのであるが、時に信長が『貴殿には若年
 より弓矢取つての名人にて、度々の勝利申し盡し難し。それに付き御無心ながら、斯く入魂の
 間なれば申すなり。軍法の物語承りたし』と望んだ。家康は之に對して『存ぜずと申さば心に

隔てある様にて如何に候。又申さんとすれば元より存ぜざることなれば御返事に迷惑せり。我等心中何の稽古もなく候へども存じたる所をば申すべし』とて、其の青年時代の経験を語つた。其の談話に、

我十九の時大高の城を義元より預けらるゝに、折節信長公義元を討たせらるゝにつき、沓掛鳴海の城々、義元より預け置かれし侍ども、皆々明け退く。我等方へも明け退き候へど、水野下野守より使者來り候へども、堪へて一兩日城を保ち、今川勢残らず引退きし後に皆の者に申聞け候様は、今此儘に落行きなば村々所々より落武者を討取らんと思ふべし。然れば一先づ城に敵を引受け、切て出んと思ふなりとて、必死の籠城に申し成し、總人數に力を付け、心を強く持たせ置きて、其次の夜に打て出しに、案の如く村々所々より落勢を討取らんと大勢寄せ來たれども、前方より申聞かせ、心強き故一人も手ざす者なく、又味方にも振の悪き者もなく、岡崎の城まで難なく退き申し候。今軍法とて北條家武田の者に、兵部平八などが聞きたるを又聞きて、今存じ合すれば何も異なることなし。只負を勝、勝を負と思ふ心是れ一つ。

とある。此の談話にはまことに大なる教訓が含まれて居る。

織田の軍勢に敵し得ぬ故に大高の城を引揚げるのであるから、意氣銷沈の體であるべきを、家康が士卒を勵まして勇氣を附けたので、村々から集り來つた者共にも惱まされずして、無事に、岡崎へ引揚げたのである。是れは家康其人が逆境に在りながら少しも勇氣を失はなかつた賜である。即ち『負を勝』と思ふ心によつて能く危急を脱したのである。負を勝と思ふことの出来る人は必ず『勝を負』と思ふことも出来る人である。即ち勝ちたるが爲に心驕らず、愈々用心を固くすることを心得たる人である。是れは確かに軍法の秘訣であらうが、此の心を以て世に立てば必ず安全に世を渡ることが出来る。負を勝と思ひ、勝を負と思ふ人は境遇の爲に制せられざる人である。境遇の爲に制せられざる人は能く新なる境遇を開拓して行き得る人である。

徳川氏が天下を一統したのは時勢の然らしめたものであるが、家康其人に是れ丈の覺悟がなかつたら、たとへ幸運が環つて來ても、其の幸運を捉へることは出来なかつたであらう。世に家康の遺訓として傳へらるゝ短き一篇があるが、其の結尾には『及ばざるは過ぎたるにまされり』とある。是れは少しも珍しい語ではなく昔から斯ういふ訓戒を與へた賢人はいくらもある。併し家康が天下を手握つて得意を極めて居た際に、此の言を出したのは確かに彼の非凡

な人物であることを證するものである。

吾等の眼には瞳孔がある。此の瞳孔は眼に當る光線の強弱によつて或は開き或は縮むものである。庭に立つて強い日の光りを浴びて居た人が突然室の中へ入ると、室の中は昏くて何も見えぬ。併し暫く休んで居るうちに室の中の物が皆見えて来る。室の中の明るさは以前と同じことであるが、日向に居た時に小くなつた瞳孔が大きく開いて来たので、以前に見えなかつた物が能く見えるやうになつたのである。又久しく日の射さぬ室に居た人の瞳孔は開いて居るから、突然日向へ出ると、眼に當る光線が強過ぎて暈眩に近い感じがする。凡夫の心の境遇によつて變るのは

瞳孔の大きさが光線の強弱によつて變化するやうなものである。

楞迦經に『心は境界に隨ひて流る』とあるのは即ち此の事である。されば得意の境遇に在る人は自ら覺えざる間に其の心が驕つて來て居る。此の人が突然失意の境遇に落ちると、日向から日陰の室へ入つた時に何も見えぬと同じやうに、一切の思慮分別を失つて全く動けなくなる。又失意の境遇に在る人は自ら覺えざる間に其の心が怯懦になつて居る。此の人が突然幸運に見舞はれると、狂喜して全く有頂天の状態となる。それは室の中から日向へ出た人が眩暈を感じ

るのと同様である。自分は去年歐洲旅行の歸りに印度に立寄つたが、その時カルカッタ邊の或る小料理店のクツクが富籤に當つて數十萬圓を得た爲に喜びの餘りに心が顛倒し、心臟麻痺を起して急死したといふ話を聞いた。吾等の一行三四人の者は此の話を聞いて皆聲を合せて笑つた。併し自分は『其のクツクの立場に自分が居たとして、自分は果して平然として居られたらうか』と反省して見て、急に心が昏くなつた。それで自分は一行の人達に向ひ『吾々でも急に數十萬圓の金が入つたら、たとへ死なぬまでも何處か身體の調子が狂ふであらう。人の事を笑つては濟まぬではないか』といつた。他の人達も急に眞面目になつた。

吾等凡夫が常に境遇の變化の爲に制せられて、右往左往に馳せまはる有様を、高い所から見下したら如何に淺ましいことであらう。『莊子』の中には斯る凡夫の生活が宛ら其儘に描かれて居る。

其の寐るや魂交り、其の覺るや形開く。與に接して構を爲し、日に心を以て闘ふ。

とある。實に吾等は多くの人と相接して種々の面倒なる關係を作り、争鬭と紛擾に日を暮して居るのである。また

小恐は惴々たり、大恐は縷々たり。……其の之に溺れて之を爲す所、之を復さしむ可から

ず。……死に近づくの心、陽に復らしむること莫し。

とある。境遇に左右せらるゝものは其の心に平和といふものはなく、其の胸の中はいつも大恐小恐に充されて居るのである。斯くして種々の迷ひが又新なる迷ひを生み、その迷ひの中に溺れて次第に深所へ入つて行くと、後へ戻ることは出来なくなる。斯くして心を勞し身を勞して自ら之を知らぬは、まことに『死に近づく心』である。莊子が之を歎じて

喜怒哀樂慮歎變熱……日夜前に相代る、而も其の萌す所を知ること莫し。己ぬるかな、己ぬるかな。

といひ、又

物と相双ひ相靡ふ。その行盡く馳するが如くにして而も之を能く止むること莫し。亦悲しからずや。終身役々として而も其の成功を見ず。蕭然として疲役して其の歸る所を知らず。哀まざる可けんや。人之を死せずといふも奚益を益あらん。

といったのは誠に道理である。此の如くにして形のみは生きて居ても、實は死せるものと擇む所はないのである。さりながら莊子も

其れ眞君有りて存す。其の情を得ると得ざるを求むるが如きは、其の眞に損益無し。

といったやうに、斯る凡夫の心の中にも全く貴い本性が亡び盡したのではない。佛教でいふ所の佛性が即ち莊子の所謂眞君である。此の眞君の存することを自覺した者は『死に近づく心』より次第に遠ざかることが出来るわけである。

此處に氣づかずして何時までも意義のない紛争を續けて居るのは、畢竟其の見るところが眼前の利害得失のみに限られて、深きもの、遠きものに眼を注ぐことが出来ぬからである。莊子は又之に就て興味ある譬を語つた。猿叟が其の畜つて居る猿に芋を與へるのに、朝は三にして暮には四を與へやうといったところが猿は大に怒つた。然らば之を改めて朝は四を與へ暮には三を與へやうといったところが今度は猿が非常に悦んだと。莊子はなほ之を評して、

名實未だ缺けずして而して喜怒用を爲すは、亦是とすに因るなり。

といった。『是とする』とは眼前に見る所を自ら是なりとして、深く内に省ることを知らぬといふのである。斯く眼前の利害によつて是非の別を立つるに於ては、

是非の彰はるゝや道の缺る所以なり。道の缺る所以は愛の成る所以なり。

と莊子がいつた通り、互ひに愛着によつて相争ひ相闘ふに至るのも據ないことである。

今までも幾度か引用した聖徳太子の憲法第一條に『人皆黨有り亦達者少し』とあるのは實

に能く斯る世俗の狀態を悉されたる語と申すべきである。達者とは達觀したる人のことである。達觀するとは眼前の小事に囚はれずして能く深く察し遠く觀ることである。唐の王之渙の詩に

白日山に依りて盡き、黃河海に入りて流る。千里の目を窮めんと欲して更に一層樓に上る。とあるが、千里の遠さを眺むるためには高樓の上へ登らなければならぬ。眼前の小事に囚はるゝ卑しい心を去らうとするには高き教の力に頼つて、修養を積むより外に途はないのである。彼の徳川家康が勝を負け、負を勝と思ふといふのも亦一種の達觀である。彼は少年の時から多くの苦を嘗め多くの經驗を積んで自ら覺る所があつたのであらう。併し戰場の驅引に於て斯くまで達觀し得た家康も、凡ての點に於て達觀し得たのではないと見えて、其の言行には煩惱に囚はれたと思はるゝものが多く交つて居るのを免れぬやうである。

唯だ佛のみ諸法の實相を究め盡したまへる者であるから、佛の教へたまへる所に隨つて、勤めて倦まず、之を實行するならば、眞の達者となれるのであらう。但し之を實行しやうといふ決心が無ければ、徒に多く讀み多く聞ても、益する所は殆んど無い。

たゞ耳より入りて口に出ることをのみ貴びて都て心を治めず、自らはとし人を凌ぎて、見を

増し邪を長ずるは、刃を把りて自ら傷る者なり。解の惡道を牽くことは、其の觀を習はざるに由る。

と天台大師の戒められた所は尤も吾等に適切である。惡道を引くといふは地獄餓鬼畜生といふが如き惡道に落つべき因を作ることである。自ら知り得たる所に誇り、自らはとして他の人と相争ふことをのみ主にするものが世間の所謂學者の中に多くある。之が爲に瞋恚の念は愈々募り、言を飾つて己が智の足らざる所を補はうと企つる所から、益々諂曲の罪を増し、無智無識の者よりも却て世を害することが多い。是れは徒に智解を求めて、自ら反省することの足らぬ爲で、天台は之を評して『觀を習はざるに由る』といつた。

觀とは觀察のことである。觀察とは深く内に吾が心を觀じて、如何にして種々なる煩惱の生じ來れるかを知り、又如何にして此の心を眞理と一致せしむべきかを辨ふることである。頼むべきは吾が心である。頼むべからざるも亦吾が心である。吾を佛の境界に近づかしむるものは唯だ此の心の作用である。故に頼むべきは此の心といはなければならぬ。併し吾を地獄餓鬼等の惡道に導き入るゝものも亦唯だ此の心の作用である。されば頼むべからざるものも此の心と思はなければならぬ。常に深く自ら觀することを怠らぬものは、此の心の中から其の頼むべか

らざるものを驅逐し、其の頼むに足るものを益々長養生育せしむる道を會得するであらう。天台大師が

無明轉ずれば即ち變じて明となる。氷を融せば水と爲るが如し。更に遠き物にあらず。餘處より來るにあらず。但だ一念の心に普く皆具足す。

といったのは即ち此の事である。又天台は

人若し能く止觀を用ゐて心を觀ずれば則ち内慧明了にして……微塵を破して大千の經卷を出すが如く、恒沙の佛法を一心の中に曉らむ。

といった。此の一心の中に佛法が盡く具はつて居るのである。内に深く觀ずる者は能く之を知るのであらう。

此處に『止觀を用ゐて』とあるが、止と觀とは天台の最も重んじた所である。止とは煩惱を止むるに就て工夫を凝すことである。觀とは眞理を明にせんが爲に力を盡すことである。止觀兼ね修すれば即ち佛法に通達し得べきである。起信論には

止とは一切境界の相を止むるを謂ふ。觀とは因縁生滅の相を分別するを謂ふ。とある。又羅什は

心を一處に係するを名けて止と爲す。靜極まれば則ち明なり。明にして即ち慧なるを觀と爲す。

といった。天台大師はなほ之を説明して

止觀は總持なり、徧く諸法を收む。何となれば止は能く諸法を寂す、病に灸するに穴を得れば衆患皆除るが如し。觀は能く理を照す、珠王を得れば衆寶皆獲らるゝが如し。一切の佛法を具足す。

といった。『諸法を寂す』とは一切の事物に就て吾等の心で恣に立てた差別が盡く除去去られたことである。珠王とは如意寶珠のことである。如意寶珠より多くの寶を出す如く、絶對の理を明にし得た者は如何なる事物に關しても知り得ざる所なきをいふのである。

情に動かされ欲に制せられて、無意義なる生涯を送るのは、いふ迄もなく愚なことであるが、斯の如き生活の無意義なることを知り得たのみでは、未だ充分とはいはれぬ。止あつて觀なきは正しい佛法の學び方ではない。されば天台大師は

若し念々住せずして汗馬の奔逸するが如くならば、即ち當に止を以て馳蕩を對治すべし。若し靜默無記にして睡と相應せば、即ち當に觀を修して諸の昏塞を破すべし。

といった。馳蕩とは心が常に外物に惹かれて動き、迷ひから迷ひを生んで際限なきことである。之を制するのが即ち『止』である。併しながら唯だ心の外物に惹かるゝことのみを恐れ、世間の交りを絶ち、獨り己を潔くすることのみを以て足れりとするならば、夜も晝も睡つて過すのと同様であつて、生を人間に享けたかひは全く無い。斯くして一切活動の力を失ひ、枯木の如く死灰の如くにして日を送るのを昏塞といふのである。此の昏塞を打破するには即ち『觀』に依るべきである。吾等の心には知るべき力も行はずべき力も具はつて居るが、始めは其の力が至て微である。併し之を養つて怠らなければ明に知ることも出来、正しく行ずることも出来、周圍の多くの人に感化を興へることも出来る。此に到達するには主として觀に依るの外はないのである。

但し誰も最初から聖者ではなく、共に皆凡夫であるから、動もすれば努力に緩みが生じて来る。それ故に志を同する者が相勵まし相戒めて、共に正しい道を進むやうに努むべきである。天台大師は此の事に就て、

更に相策發して眠せず散せず、日々に其れ新なるあり。切磋琢磨し、心を同らし志を齊うして一の船に乗るが如く、互に相敬重して、世尊を視るが如くする、是を同行と名く。

といった。策とは即ち策勵である。互に勵ましあつて智を磨くのが即ち策發である。眠せずとは怠らぬことである。散せずとは心を外に散さずして其の業に専なることである。斯くして日々に新ならば、日々に凡夫の境界を遠ざかつて、佛菩薩の境界に近づくことが出来るであらう。相重んじ相敬ふは共に佛の大乗の教を學ぶ者なるが故である。法華經に記さるゝ所に依れば昔不輕菩薩は行逢ふ人毎に盡く之を禮拜した。其の中には愚者もあり賤者もあつたであらうが、皆之を禮拜した。それは何人も皆佛性を具へて居るからである。唯だ佛性を具へたといふだけでさへ、斯くまで敬はるべきものである。況して其の具へたる佛性を開發せんが爲に努力する者を敬ひ且重んずるは至當の事ではないか。

此の如き交りこそ眞に淨く貴い交りといふべきである。然るに佛法が世に弘まること久しきに及んでは種々の弊害が生じて來た。中にも互ひに宗を立て派を分つて其の勢力を争ふことが最も大なる弊である。其の宗派の分れたのには皆相當な理由があるが（此の事は別に後に至つて説くつもりである）後に至つては其の初めの精神が全く忘られてしまつた。何れの宗、何れの派でも之を開いた人は決して一宗一派の祖として尊敬されやうなどいふ名譽心があつたのではない。唯だ佛の正法を世に弘めんことを志として奮起したのである。然るに其の人の徳を

慕つて其の門に集る者が次第に多くなり、其處に自ら或る宗が立ち或る派が形を成すやうになると、それが一の大なる勢力をもつ。斯うなると其の大なる勢力の中に身を投ぜんとして集り来る者も亦少からぬやうになる。其より相當の歲月が経つて、其の宗其の派を開いた人も没し其の後を承けた人々が他の宗派と對立して勢を競ふやうな氣分に傾いて來ると、其處に種々な弊が生ずるのである。蘇東坡の苟卿論に

其の父人を殺して仇を報ずれば、其の子必ず劫を行はんとす。

とあるが、よく人情を穿つたる説である。父は仇を報ぜんが爲に人を殺したのであるが、其の子は父の志の存する所をよく知らず、たゞ其の形のみを眞似て暴力を振ふことに專となり、終には人を脅して物を奪ふやうなことにまで立到るのである。

何れの宗何れの派に於ても、其の宗其の派の勢力を張つて他の宗派と對立しやうとか、他の宗派を壓倒しやうとかいふ考への人が出て來ると、佛の正法を弘めて世を救ふといふことは殆んど全く忘られて、勢力の擴張といふことが主になつてしまふ。まことに本末顛倒の甚しきものである。世間には本末顛倒の例が極めて多い。書物の損ぜぬ爲に表紙を附けるのであるが、内容の甚だ貧弱な書物に表紙ばかり立派なのが附けられたのも屢々ある。頭を保護する爲

に帽子を被るのであるが、急な雨に逢つた時に帽子を濡すまいと小脇に擁へ、頭は雨に曝して駈けて行く人がある。宗教界にも之に似たことが度々見られる。宗を立て派を分つて互に勢力を争ふやうになると、更に其の勢力に伴ふ所の名譽、其の勢力に伴ふ所の利益を主として争ふ者が多くなる。傳教大師は深く此の弊を憂へ、

身の爲に財を求め、名の爲に交を求む。如來の遺教茲に因を沈隱し、正法の神力亦復た顯れ難し、若し其の風を改めずんば正道將に絶えなんとす。若し清淨を求めずんば災を排ふに由無からん。

と戒めた。清淨なる交りとは即ち前に引いた天台の語の如く、相策勵し相敬重して、共に道を求め共に行を磨く者の交りである。斯る交りを奨勵することに依つてのみ、宗教界の刷新が行はれ得べきのである。

天台大師の所謂同行が力を協せて佛法を究め、又佛法を弘むることが佛法興隆の元となるのであるが、此の同行中には出家の人も在家の人も共に含まるべきである。傳教大師が朝廷に上つた『山家學生式』の末文に、大乘の教を弘むる理由を説いて

國寶國利菩薩にあらずして誰そや。

とある。眞に國を利し國を益し、國の寶として仰がるべき人は正しき信仰をもつた人でなければならぬ。正しき信仰は大乗を學ぶことによつてのみ得らるべきである。大乘を學ぶ者即ち菩薩である。菩薩には出家と在家とあるが、共に貴むべきである。されば傳敎はまた。

佛道には菩薩と稱し俗道には君子と號す。其の戒廣大にして眞俗一貫す。……法華經の中に具さに二種の人を陳ねて以て一類の衆とす。

といつた。二種の人とは在家の菩薩と出家の菩薩である。一類の衆とは共に佛の化導を賛くべき貴い人だといふことである。

君子と君子とは道を以て相交るものである。孔子は「君子は周して比せず」といはれたが周とは公の道に従ふこと、比とは私心によつて黨を作ることである、曾子は君子は文を以て友を會し、友を以て仁を輔く。

といつた。文を以て友を會するといふは學を講ずるが爲に友を會することである。友を以て仁を輔くるといふは互に相砥礪して其の徳の日に進まんとを期するのである。天台大師の所謂同行は即ち友を以て仁を輔く者に外ならぬのである。人生に苦みも樂みも種々あるが、心と心と相許すほど楽しいことは無い。共に學を修め共に道を學び、相敬愛して永く渝らぬなら

ば、眞に人生の至樂といふべきであらう。蕪東坡は梅聖俞に寄せた書の中に、周公が成王を輔けて國政を執り苦心に苦心を重ねながら、一人の知己と稱すべき者もなかつたことを擧げて其の不幸を哀み、又孔子が窮厄の中に在りながら多くの頼もしい弟子をもつて居たことを述べて、

夫れ天下能く容れずと雖も、而も其の徒自ら以て相樂むに足ること此の如し。乃ち今周公の富貴は夫子の貧賤に如かざる有ることを知る。夫れ召公の賢を以てし、管蔡の親を以てしても其の心を知らざれば、則ち周公誰と與にか其の富貴を樂まん。而して夫子の與に貧賤を共にする所の者は皆天下の賢才なれば、則ち亦與に此に樂むに足れり。

といつたが眞に至論である。此の樂みを樂むことを知らず、名を求め利を求めんが爲に相集つて黨を作り派を立つるは愚の甚しきものといはなければならぬ。

但し共に居り共に學ぶ者が、必ずしも皆心に相許すまでに至るものではない。人の性情はそれ／＼に異なるものであるから互に其の才と識とに感服しあつて居ても、何となく親しくなれぬ者が少くない。されば友の得難きを歎ずる人は世間に夥しくある。此の憾を補ふためには古人を友とすべきである。たとへ時を同らせずとも古人の書を讀み古人の行を觀て、吾が範と

すべきものに遭ひ、吾と志を同する者に遇へば、心に之を師とし之を友として宜い。斯くして吾等は寂しい心をもたずに毎日を送ることが出来る。

一郷の善士は斯に一郷の善士を友とす。一國の善士は斯に一國の善士を友とす。天下の善士は斯に天下の善士を友とす。天下の善士を友とするを以て未だ足らずと爲し、又古の人を尙論す。其の詩を頌し其の書を讀み、其の人を知らずして可ならんや。是を以て其の世を論ずるなり。是れ尙友するなり。

とは孟子の言であるが、尙とは之を貴び之を重んずることである。古の賢人を貴んで吾が師友とするは學問に力を注ぐ者に取つて何にも換へられぬ樂みである。宋の司馬光の獨樂園記の中にも、

迂叟始めて洛に家してより五年、園を爲り、其の中に堂を爲り、書五千卷を聚め、之に命じて讀書堂といふ。迂叟平日多く堂中に處りて書を讀む。上は聖人を師とし、下は群賢を友とし、仁義の原を窺ひ禮樂の緒を探る。未だ始めより形有らざるの前より、四達窮まり無きの外に及び、事物の理擧げて目前に集る。可なる者は之を學び、未だ夫の可なるに至らず。何ぞ人に求め何ぞ外に待たんや。

とある。功名富貴を人に求めず世に待たず、聖賢を友として日を過すほど樂しいことは無い明治天皇の御製に

いにしへの書見るたびに思ふかなおのが治むる國はいかにと

とあるは、吾等の共に拜誦する毎に感激の切なるを覺ゆる次第であるが、古の名君賢王の事蹟を讀ませられた際には良い友を得たといふ御感じがあらせられたであらうと拜察する。

殊に又吾等の如き佛法の片端をも學んで居る者に取つて貴く感ぜらるゝのは、此の貴い佛法を弘むるために力を盡したる古今の碩學高德の事蹟である。其等の事蹟を明にすると、彼の范文正が古の仁人志士を稱へて、「物を以て喜ばず、己を以て悲まらず」といひ、

噫斯人微かりせば吾誰と與にか歸せん。

といつたやうな感がいつも起るのである。經典を一度や二度讀んでも、其の深遠なる意義が充分に分るものではないが、此の經典の中の教を世に弘むる爲に生命にかけて奮闘したる人々の事蹟を明にすると、「それ程までに貴い教であるか」といふ驚異の念が起つて、更に三度も四度も心を潜めて讀んで見やうといふ氣になるものである。自分の淺はかなる經驗を有の儘に記して見ると、自分は諸經の中に於て法華經が最も勝れて居るといふことを聞いて、法華經一部を

通讀したなら佛教の大意が明確に分るであらうと考へ、非常なる期待をもつて法華經を讀んだのであるが、初めて讀んだ時には少からず失望した。併し一度ぐらゐ讀んだのでは、經典の中に含まれたる深い意義の分らう筈はないと思ひ返して、再度讀み直して見たが、所々に吾等の教訓となるべき語句の散在することには氣附いたが、全體として非常に尊むべき經典であると感ぜられなかつた。是れは自分のみのことで無く

誰でも充分の用意なくして經典を讀む人は、自分のやうな失望をすることであらうと思ふ。

自分は重ねて法華經を讀み返す勇氣が無くなつたのであるが、其の後此の法華經を世に弘めるために努力した人々の事蹟を知るに及んで、大なる感激を覺えた。

先づ自分は法華經の譯者なる鳩摩羅什の信心の堅固なのに驚かされた。羅什が其の師に大乘經典を東方へ傳へよと命ぜられたことは前章に記したが、彼は自分の國へ歸て後、師命を果すには如何にすべきかを一心に考へた。彼の國は龜茲といつて印度の東方に在る小國であつたが彼は自分の國よりも更に東方に支那といふ大國のあることを知つて居た。又其の支那へ夙くから佛教が傳はつて居るといふことも聞いて居た。支那へは後漢の明帝の時に初めて佛教が傳は

つたのであるが、それは羅什の時よりは三百四十年ばかり以前である。此の支那といふ大國に大乘を弘むることに力を盡したなら師命を果されるであらうと、羅什は頻りに考へて居たが宛も支那の一強國たる秦(その頃は所謂五胡十六國の更なる更なる勢を得た時代である。)が呂光といふ將を遣つて龜茲を討たせた。羅什は此の機を逸したなら再び宿望を遂ぐる時はあるまいと思ひ定め、自ら呂光の陣に投じ、呂光に伴はれて支那へ入つた。幸に秦主苻堅は深く佛教に歸依して居たので、其の部下の將たる呂光も法師を尊敬することを知つて居た爲に、羅什は手厚き禮遇を受けたのであるが、

身を敵陣に投ずるといふは、生命を惜まぬ覺悟をもつた者でなければ出來ることではない名ばかりは前から聞いて居ても、支那は全く見ず知らずの國である。殊に其の國の中は群雄互ひに勢を争ふといふ状態で、何時形勢が變らうか分らぬのである。其の中に飛び込んで行くには固より死を覺悟しなければならぬ。果して呂光が支那へ歸り着いた時には秦主苻堅は已に死し、其の國は滅亡してしまつたので、羅什は身を安んずべき所もなく全く當惑してしまつた。併し幾くもなく後秦が興り、禮を厚うして羅什を長安の都へ迎へたので、此より後は其の國主姚興の保護を受け、大乘經典の翻譯と其の宣傳とに力を專にすることが出來た。彼は師

命を全うすることを得たのを深く感謝した。

經典を漢譯したといつても、彼が自ら筆を執つたのではなく、彼は梵文の經典の意味を説明して、多くの人に之を筆受せしめ、斯くして出來た數種の譯文を比べて研究を積み推敲を重ねて後漢譯本を作り上げたのである。彼は梵文經典の意味を充分に玩味して、充分に咀嚼し消化し、之を最も精密的確に口述したのである。彼は支那に在ること九年にして長安に没したのであるが、其の間に三百八十餘卷の經論を譯述した。而して法華經は其の最も力を注いだものとして知られて居る。唐の道宣が之を評して

悟達を以て先と爲し佛遺寄の意を得たり。

といつたは羅什に取つて知己の言といふべきであらう。羅什は支那に在る間僧院の生活を止め婦女に侍かれて暮したのであるが、其の經論の譯出には最も熱心にして、心身の力を之に傾け、頗る自信ある譯文を成した。彼は其の門人等に語つて『吾が身は不淨であるが、佛の敎を説いた吾が舌は不淨でない。若し吾が譯述に誤りが無いならば、吾が死後に遺骸を茶毘に附しても舌のみは焼けずに残るであらう』といつた。經論を翻譯し若くは解釋した人の數は夥しいものであるが、

吾が舌は焼けまいと公言し得るだけの自信をもつた者が幾人あらう。

法華經の尊いことは改めていふまでも無いが、斯る自信の下に成つた羅什の譯文は更に其の光彩を添へたものといつて宜からう。

自分は又初めて法華經を中心として佛敎全體を組織的に説明したる、天台大師の信心の堅固なのに驚かされた。其の青年時代に兵亂の中を冒して大蘇山へ赴き、慧思禪師の敎へを受けたといふ一事に於て、既に道の爲には生命を惜まぬといふ覺悟が現はれて居る。大師は相州で出家したのであるが、大師ほどの人を指導し得る力のある人は相州邊に一人もなかつたので大師は久しく『江東に師なし』と嘆じて、幽鬱なる毎日を送つて居た。されば大師は『此儘に此處で歲月を送るならば、たとへ身は安樂であつても心に何の満足もない。危険を冒して大蘇山へ行かうとして途中で生命を失つても、道を求むる爲に死ぬのであるから此處で安閑として居るよりも遙かに勝つて居る。若し幸にして無事に大蘇山へ着き、良き師に就て敎へを受くることが出来たら之に勝る悦びはない。何れにしても大決心をすべき時である』と考へ、修行の旅に上つたのである。

設ひ大火の三千大千世界に充滿すること有りと、要らず當に此を過ぎて此の經法を聞き、

歡喜信樂し受持讀誦して、如説に修行すべし。

とは無量壽經に説かるゝ所であるが大師の如きは能く之を實行したるもので、眞に道を求むる者の範とすべきである。

大蘇山に於ける慧思と天台大師（その時の名は智顛）とが師弟共に相得て大なる満足を感じたことは、前にも一度その概略を述べたが、今此處にも此の事に説き及ぶ必要がある。復を厭はずしてまた一言することにした。慧思も流石に非凡な人であるから、此の青年僧が後に必ず法華經の弘通に大なる貢獻を爲すべきことを見抜いて、「汝と吾とは前生に於て釋尊の靈鷲山に於ける説法の座に連り、共に法華經を聽いた者であらう。其の宿縁によつて今此處に師弟として相見ることは何よりの悦びである」といつた。智顛も亦良き師を得たることを心から感謝して、研鑽に深き力を致した。此の如くに師弟の相得たる例は極めて稀である。孔子と顔淵とは師弟共に深く満足して居たのであるが、顔淵は若くして師に先つて死に、孔子は之を悲しんで慟哭した。ソクラテスとプラトンの師弟も共に満足して居たが、ソクラテスが死刑に處せられたので、プラトンは深き悲みを胸に懷いて他國へ流浪することになつた。天台大師は慧思に就て學び、學成るに及んで師に代つて國都金陵に入り、大に正法の弘通に盡した。

此の如くにめでたき師弟の關係は、千載の後に生れた吾等をして欽羨に堪へざらしむるものである。

大師が大蘇山へ來てからあまり久しからぬ時のことであるが、法華經の藥王品を讀んで自ら深く悟る所があつたので、之を師に質したところが慧思は大に感歎して、

爾にあらざれば感ぜず、我にあらざれば識らず。

といつた。天台大師が非常に勝れたる天分をもつて居たことは疑ふべきではないが、その師をして斯くまで感歎せしめたのは、一には其の生命に懸けて修行を積んだ結果であると思ふべきである。

大師は金陵に留ること凡て九年であつたが、其の學徳共に高きに心服して、その教へを請ふために來り集る者は少しの絶え間もなかつた。然るに大師は三十八歳の時に金陵を去つて天台山に入つた。是れは大師の如き人でなければとても出來ぬことである。若し大師が金陵に留つて其の一生を終つたなら、常に多くの人の尊敬を受けて、その一生は至て安樂なものであつたであらう。而も大師は之を屑しとせずして、天台山に去つたのである。大師は法華經が最勝の經なることを知り之を中心として釋尊御一代の説法を達觀し之を組織的に解釋しやうといふ

志を立てたが、それには更に深き研究をしなければならぬ。それは金陵の都に居て多くの人の應接に日を暮して居たのでは到底いつ迄も出来ることでない。如何に多くの人に歸依せられて得意を極めても、それは一時のことである。法華經を中心として佛教全體を組織的に解釋することが出来れば、それは永遠の生命を有する所の事業である。

一時の榮華の爲に永遠の事業を疎にしてはならぬ。

大師は斯く思ひ定めて天台山に入つたのであるが、偶々凶年であつたので衣食の資にも事を缺くやうになり、弟子の慧緯と共に橡の實を拾つて纔に飢を凌ぐことさへあつた。

大師の學説は天台山に於て大成し、其の學説は『摩訶止觀』『法華玄義』及び『法華文句』の三部に遺漏なく記されて、以て今日に傳はつて居る。此の三部の書が法華法の弘通に大なる力となつたことは言ふ迄もない。是れ一に大師が金陵に於ける得意の生活を捨て、飢餓を忍んで山住居をした賜といふべきである。苦を避けて樂に就き、辛勞を厭うて安逸を求むるのは人情の常である。自ら進んで安樂なる境遇を捨て勞苦の生活に入り、天下後世に惠を垂るゝが爲に努力するのには非常なる勇氣を要する。戰場に於て彈丸雨飛の中へ突入し、或は白刃を踏んで恐れざるが如きは勇者でなければ出来ぬことであるが、久しい勞苦と艱難との中を泰然とし

て通つて行くのには、戰場に於ける勇士より以上の勇を要するのである。斯る勇氣は唯だ篤く道を信ずる者のみの有する所である。孔子が『勇者は懼れず』といはれたのを繆協は解釋して『義を見て爲し強禦を畏れざるなり』といつたが、朱子の解釋に氣以て道義に配するに足る故に懼れず。

といつたのは最も的確である。天台の勇の如きも全く此の類である。

吾等は又傳教大師が法華經を吾が日本國に弘むるに當つて極めて堅固なる信心をもつて居たのに驚嘆せざるを得ぬ。大師は佛法に就て徹底的の研究を遂げ、釋尊の御本意の在る所を明に知らうといふ抱負を以て、叡山に入つたのは十九歳の時であるが、其の時に五ヶ條の誓願を立て、其の末文に

願はくは解脱の味獨り飲まず、安樂の果獨り證せず、法界の衆生と同じく妙覺に登り、法界の衆生と同じく妙味を服せん。……佛國土を淨めて衆生を成就し、未來際を盡すまで恒に佛事を作さん。

とある。即ち完全に菩薩道を行ぜんとすの誓である。是れが十九歳の少年の言であるとは眞に驚異の至ではないか。斯くて研鑽に四ヶ年を費し、二十二歳の時に自ら法華經弘通に生涯を捧ぐ

ることに決心し、叡山の奥から木を斫り出して法華の道場を建てたのであるが、その時に詠んだ歌に

阿耨多羅三藐三菩提の佛たち吾が立つ袖に冥加あらせたまへ

とある。諸佛の力が必ず自分に加はつて、法華經は此の叡山を中心として普く日本國中に弘まらるであらうといふ確信が此の一首によく現はれて居る。

大師の學徳共に秀でたことは忽ちにして天下に知れ渡り、大師三十一歳の時に桓武天皇の特別の勅諭によつて内供奉に列せしめられ、又近江國の正税を以て叡山の維持費に宛てらるゝ事となつた。然るに叡山が斯く隆々たる勢力を得て來たことは南都諸寺の僧の甚だ憚ばざる所であつた。南都は久しい間の帝都であつて、此處に榮えて居た諸寺は何れも皇室の御保護を受くることを自分達の特權であるかのやうに考へて居たのである。桓武天皇は非常に英邁なる君であらせられ、國運發展の基礎を立つるために都を平安に移されたのであるが、南都の人達は一般に之に對して大なる不平を感じて居た。然るに今や青年の最澄（傳教大師の名）が天子の御信用を得て、叡山に一大勢力を作らうとするのであるから、其の不平は何層倍かに昂まらざるを得なかつた。之に依つて叡山に對して種々の惡聲を放ち、傳教大師を中傷せんとするものは

夥しい數に上つた。此の有様に憤慨したのが和氣弘世、眞綱の兄弟であつた。此の二人は和氣清麻呂の子であるが、

道鏡の野心を挫いて國家を救つた清麻呂の剛直なる性質は其の二子にも傳はつて居た。

和氣氏兄弟は夙に傳教大師に歸依して居たのであるが、南都の僧等の見苦しい態度を見て、「此上は彼の諸宗の僧等と吾等の師との對論を請うて彼等をして法華經が最勝の經たることを承認せしむるより外はない」と思ひ定め、之を大師に請うて承認を得、更にまた桓武天皇の勅許を得て、延暦二十一年の正月、高雄寺に於て南都六宗の碩學十餘人と傳教大師とを一堂に會せしめ、互ひに其の宗の教義を語り、互ひに批判を加へ合はせることになつた。

此の時に傳教大師の説かれたことは實に正々堂々たるものであつて、南都諸宗の僧等も法華經の最勝の經たることを認めなければならぬことになつた。それで南都六宗の人々から桓武天皇へ上つた謝表の中に、傳教大師の説いた天台宗の教義を稱揚して、

釋迦一代の教を總括して悉く其の趣を顯はし、所として通ぜざる無し、獨り諸宗に逾え殊に一道を示す。其の中に説く所甚深微妙にして、七箇の大寺、六宗の學生、昔より未だ聞かざる所曾て見ざる所なり。……一妙の義理始めて乃ち興顯し、六宗の學衆初めて至妙を悟りぬ。

といつて居る。此より後は傳敎大師の一身に就て彼此いふものは無くなつた。是れは立派なる成功であるが、此の成功の裏面に非常なる苦心の潜めることを察して見なければならぬ。南都六宗の代表者は何れも久しく碩學として世間に聞えて居た人々で、年も皆相應に長じて居た。然るに最澄は三十六歳の壯齡で、而も一人にして十餘人の論敵とならなければならぬのである。此處を無事に通つて、彼の十餘人の碩學等に謝表を書かせたのは、大師の一方ならぬ苦心努力に依るものである。

此の高雄寺の對論を終つて後の傳敎大師は正しく得意の絶頂に居るの觀があつた。天子の御信用は厚く、一般國民からは非常に尊敬せられ、その上南都六宗の代表的の學者を皆屈服せしめたのである。普通の人ならば此處で安心してしまふであらうが、傳敎大師は此の得意の場合に於て決して其の心を緩めなかつた。大師は

自分の地位が安全になると共に、其の責任も一層重くなつたことを感じたのである。

大師は斯う考へた。『今まで自分の説いたことは最澄といふ一青年のいふ事として聽かれた。されば自分の説く所に多少の誤りがあつても、自分一身の責任であるのみであつた。然るに今日では朝廷からは手厚き保護を加へられ、

千歳の外まで瞻仰絶ゆること無からん。

といふが如き懇懃なる語を以て南都六宗の人々からも推讃せられた。又一般國民からも仰ぎ尊ばるゝやうになつた。今は一青年最澄のむかしとは異つて、日本國に於て天台宗を代表すべき地位に立つ身となつたのである。斯うなつてから自分の説く所に少しなりとも過があるならば、天台大師をも辱め、佛祖をも辱むることになり、其の影響する所は極めて大きい。自分は日本國へ渡つたほどの經論は既に究め盡したつもりであるが、漢土にはまだ日本へ傳はらぬ説があつて、それが佛法を正しく知るために甚だ有力なものであるかも知れぬ。其等に就て究むること無くして自ら足れりとするのは、自分の責を完全に果たしたものとはいはれぬ』と。大師は斯様に考へて、支那へ留學することに決心したのである。

支那へ留學した人は随分多いが、大師の如き地位勢望を得てから留學した例は殆んどな

此の一事を以ても大師が其の身に負へる責任を如何に重んじたかを推すべきである。法師たる者は『如來の所遣として如來の事を行ずる者』であると法華經の法師品に説かれてある。又『如來の供養を以て之に供養すべし』ともある。此の如くに尊敬せらるべき法師が、其の責を

充分に果さずして、多くの人に誤りを傳ふるならば其の罪はまことに重且大といはなければならぬ。大師の如き人こそは眞に法師の名を辱めぬ者といふべきである。

大師は勅許を得て翌延暦二十二年三月遣唐使の船に便乗して支那へ向はんとしたが、此の船は難波を發して間も無く暴風雨にあひ、渡海は中止となつたので、更に翌二十三年の遣唐使の船で支那へ向つた。此の時もまた暴風雨にあひ多くの辛酸を嘗めたが、やうやく明州に着き、大師は遣唐使の一行に別れて天台山に登つて天台宗の教理を問ひ、また越州の龍興寺に至つて眞言宗の教理を究め、翌二十四年、三十九歳にして歸朝した。南都の護命其他の人々は大師を非難して

最澄未だ唐都をも見ず、只邊州に在つて便ち歸り來れり。

等といつたけれども、大師に對する崇敬の念は上下共に愈々厚きを加へた。其の遺誠として傳はつて居る語には、大師の志の存する所が最もよく現はれて居る。その中に

我が爲に佛を作ること勿れ、我が爲に經を寫すこと勿れ。我が志を述べよ。

とある。亡き人の追善の爲に佛像を造立し若くは經卷を書寫することは其頃一般の習はしであつたが、大師は自分の死後に於て一切其等の事をするには及ばぬ、たゞ吾が志を繼いで法華

經を弘むるために努力せよと、其の弟子達に遺言したのである。實に貴ぶべき心である。又前に引いた『道心の中に衣食あり、衣食の中に道心無し』といふも同じく遺誠中の一語である。更にまた

毎日諸大乘經を長講し、慇懃に精進して法を久住せしめん。國家を利益せんが爲、群生を度せんが爲なり。努力せよ、努力せよ。

ともいつてある、此の大切な事を忘れて、唯だ其の一宗の繁昌を期せんが爲に權門の意を迎ふることに努めたのが王朝時代に於ける佛教の墮落の因であつたのである。又

我が同法等四種三昧を懈怠すること勿れ。兼て年月に灌頂し、時節に護摩し、佛法を紹隆して以て國恩に報ずべし。

ともある。三昧とは心を靜めて佛の正法を念ふことであるが、それに常坐と常行と、半行半坐と非行非坐との四種がある。靜かに坐して三昧を行ずるのは常坐三昧である。歩行しつゝ三昧を行ずるのは常行三昧である。兩者を兼ね行ずるのは半行半坐の三昧である。第四に非行非坐三昧といふは又隨自意三昧ともいふので、一切の時、一切の事を處する際に於て心の散亂を止むるに努むることである。灌頂とは修行を積んで、人に法を説くべき力を具ふるやうにな

つた者の爲に、之を證する所の式をいふのである。護摩とは元來『燒く』といふ意で、元は印度の婆羅門が火を燒いて天を祭つたのが始めであるが、佛教に於ても智慧の火を以て一切の煩惱を燒き盡し、一切の魔障を除く意味を表して、爐中で木を燒く式が出来たのである。以上種々の修行、種々の儀式は皆是れ佛法を盛にして國恩に報ぜんが爲である。

又特に大師の精神をよく現はしたものは次の遺誡である。大師は非常なる愛國者であつて、叡山に於ては法華經と仁王經と金光明經とを鎮護國家の三部經と名けて常に讀誦し、常に國家の隆昌を祈つた。仁王經及び金光明經は何れも佛の正法を基礎として國の政が行はるゝ時には、其の國が永く榮えて行くといふことを精しく説かれた經である。

因に一言するが、唐にも吾が國にも仁王會といふものがあつた。それは仁王經の中に『國に災難のある。時には、此經を講じて其の災難を攘ふがよい』といふことがあるのに基いて、國に災難の無いやうにと祈るために仁王經を讀誦し講説する儀式が行はれたのである。吾が國では齊明天皇の御代に初めて行はれ、その後も度々行はれた。併し仁王經の趣意は『正法の行はるゝ國には災難が無い』といふことなのであるから、此經を讀んだ人が各自に佛の正法を信じ、且之を實行する決心をしなければならぬ、唯だ口先ばかりで讀んでも何の役に

も立たぬのである。吾が國に佛法の行はるゝこと久しきに及んでは、漸く其の精神を忘れて其の形式のみを重んずる傾向になつた。今日でも其の餘弊を除き得ぬのは哀むべきの至である。

傳教大師は此の法華經が先づ日本國に弘まり、然る後に世界に弘まるべきことを信じて居た。但し法華經には『此經が普く世に流布するのは末法の世、即ち佛滅より二千年を経て後のことであらう』といつてある。大師の時は末法の世に間の無い時であつたので、大師は『正像稍過ぎ已つて末法太だ近きにあり』といひ、此經の普く世に流布すべき基礎を作ること自分の天職と考へたのである。それで其の遺誡の一項に、

我鄭重に此間に託生して、三學を習學し一乘を弘通せん。若し心を同する者は道を守り道を修し、相思ひ相待て。

とある。鄭重には『幾度も』といふ意、此間とは『此日本國の中に』といふ意である。自分は何度も此の日本國へ生れて來て、此處で法華經弘通の重任に當りたいといふのである。法を重んじ國を愛することの切なる、此の如き人は世に例稀なるものではないか。

傳教大師が没してから四百三十一年の後、日蓮上人が法華經を弘むるために起つた。即ち建

長五年のことである。法華經の勸持品には、
我身命を愛せず、但だ無上道を惜む。

とあり、又

我は是れ世尊の使なり、衆に處するに畏るゝ所無し。

とある。上人が此の如き抱負を以て世に立ち、多くの困苦を經、多くの艱難を冒して少しも屈しなかつたことは、上人の教を信する者も信ぜざる者も共に認むる所である。併し上人を以て單なる勇者と爲すのは甚だ當らぬことである。上人は自ら

惡王の正法を破るに邪法の僧等が方人をなして智者を失はん時は、師子王の如くなる心をもてる者必ず佛になるべし。例せば日蓮が如し。是れ傲れるにはあらず、正法を惜む心の強盛なるべし。

といつたが、其の所謂正法の何者なるかを知るために上人は二十年を研究に費したのである。上人の勇猛精進は此の二十年の研究を基礎とするものであることを知らなければならぬ。上人は自ら誓ひを立て

種々の大難出來すとも、智者に我が義破られずは用ゐじとなり。

といつた。若し智者が現はれて『法華經を弘むることは釋尊の御本意に背いて居る』といふ理由を明にするならば自分は何時でも法華經を捨てやう。刀杖を加へらるゝとか、所を追はるゝとかいふ世間的の迫害が如何に重つても、之が爲に心を動かすことは決して無いといふのである。此の覺悟は種々の難を經るに隨つて愈々堅固になつた。

抑も最初に研究を思ひ立つた時から上人の態度は極めて眞摯なるものであつた。上人は安房の清澄山で出家したのであるが、其處は天台宗であつた。併し上人は天台宗の僧として其儘一生を終る氣にはなれなかつた。上人の頃までに日本國に弘まつて居た佛教の中には凡て十宗が分立して居た。奈良朝の末までに支那から傳はつたものが六宗で、それは俱舍宗、成實宗、律宗(以上は小乘)、三論宗、法相宗、華嚴宗(以上は大乗)であつた。尤も此の中で俱舍、成實の二宗は獨立した一宗として世に弘まつたのではなく、他の宗の人が其の教義を兼學したのみであつた。次に平安朝になつては前にいつた通り傳教大師が天台宗を弘め、又弘法大師が眞言宗を弘めた。其の後平家の全盛の頃に法然上人が念佛を唱へ、鎌倉時代に入つてから榮西禪師が支那へ行つて臨濟の禪を傳へ、道元禪師が同じく支那へ行つて曹洞の禪を傳へた。斯く多くの宗派の分立して居ることが日蓮上人には不思議に思はれた。佛教は釋尊の御説きになつた

ことを元として立つて居るものである。それが十宗にも分れて居るのは決して釋尊の御本意ではあるまい。十宗はそれ／＼に尊い經論に依つて立つ所の宗ではあらうが、釋尊の御本意に叶へるものは何れか一つでなければならぬ。

釋尊の御本意に叶つた佛教が何であるかを知りたい。

而して其の教を世に弘むる爲に力を盡したいと上人は考へたのである。それが出来なければ出家したかひが無いといふものである。

又佛の正法が弘まつて居る國は正しき國でなければならず、此の正しき國はいつも榮えて、此の國の民は常に幸福でなければならぬ。これは多くの經論の中に明言せられてあることで、彼の聖徳太子が佛法の興隆に力を盡させられてより後、歷代の皇室に於かせられても皆佛法の保護に力を用ゐられたが、それは皆國のため民のためと思召されたのである。然るに日蓮上人の當時に於て佛法は日本全國に普く弘まり、寺も塔も軒を並べ臺を連ぬるといふ有様であつたにも拘はらず、此の國は正しき國でなくなり、國民は少しも幸福でなかつた。是れが又上人には頗る不思議なことに思はれた。上人は貞應元年の誕生であるが其の前年即ち承久三年には北條義時が三上皇を離れ島へ御遷し申すといふ大事變があつた。義時の無道はいふまでもな

いが、斯る事を眼の前に見て居て、平然として少しも怪まなかつた日本國民全體が正しい分別を失つて居たのである。法華經に『惡鬼其身に入る』といふは實に此事である。日蓮上人は後年身延に入つてからの消息の中に、

日本國に代始まりてより已に謀叛の者二十六人、第一は大山の王子、第二は大石の山丸。乃至第二十五人は賴朝、第二十六人は義時也。二十四人は朝に責められ奉り、獄門に首を懸けられ山野に骸を曝す。二人は王位を傾け奉り、國中を手に擧る。王法既に盡きぬ。

と痛歎して居るが、是れは上人が年少の頃から懷いて居た感じに違ひない。

序に一言して置きたいのは、上人が賴朝を謀叛人に數へたことである。久しく戰亂の爲に悩まされて居た日本國が賴朝の力によつて統一せられ、國中の者が皆塗炭の苦を救はれたことは、『神皇正統記』などにも賴朝の大なる功績として稱讃してあるが、恐らく誰にも異議のない事であらう。日蓮上人の遺文の中にも賴朝の功を稱揚した語は屢々見えて居る。併し賴朝が鎌倉に幕府を開き、國家の政令が二途に出るの端を啓いたことは、日本の國體上から見ても都合千萬な次第である。爾來明治維新の際に至るまで、殆んど七百年の間政權が武門に移つて居たのは國史上の大汚辱とも申すべきである。賴朝の功は功として認めなければならぬ

が、罪は罪として責めなければならぬので、上人は斯る批判を下したのである。
 日本國は此の如く魂を失つた國になつてしまつたのみならず、連年打續く天災地變の爲に百姓の難澁は一通りでなかつた。上人は此等の事實を見て『これが佛の正法の行はれて居る國の相とは思はれぬ』と考へ、『此の國を救はんが爲には如何なる教の力に依るべきであるか』を知りたいといふ望みが非常なる勢を以て其の胸中に湧き起つた。茲に於て上人は凡ての經論を讀破し、又十宗の教義を究め盡して、釋尊の御本意に叶へる佛敎を知り、又日本國を救ふべき力のある教を知らうと決心した。但し是れは非常なる難事である、尋常一様の努力で出来ることではない。清澄の山には虚空藏菩薩の廟があつたが、此の菩薩に祈れば智慧を授けらるゝと言ひ傳へられて居た。上人は仍て此の廟へ日參して『日本第一の智者となさしめ給へ』と祈請した。

日本國の一切の人を救はんが爲には日本第一の智者とならなければならぬ。

上人の志の存する所は此の一事によつても知るべきである。其の満願の日に廟の前に倒れて夥しく血を咯いたといふ傳説があるが、此程の熱心があつたればこそ、後に至つて最も堅固なる信念が得られたのであらう。研究に費されたる二十年は單に長い歲月であつたといふばかりで

無く、實に最も緊張したる心をもつて過されたる二十年である。

其の研究に入るに當つて、上人は一切の行懸りをすてた。最初は天台宗の寺で出家したのであるが、其の頃一般の習はしとして念佛をも唱へたのであつた。併し研究の途に入るに就ては、全く白紙の状態でなければならぬ。それ故に上人は法華經の爲とも思はず、念佛の爲とも思はず、唯だ眞實なる道を求めんが爲にと志して其の研究を續けたのである。研究は固より一方に偏してはならぬ。されば上人は鎌倉へ行き、京へ行き、叡山に登り、三井寺を訪ひ、或は高野山へ登り、或は浪華の四天王寺の經藏に入る等、有らゆる方法を盡し、有らゆる識者の説を叩き、生命を懸けて學び且究めた。此の研究の結果として上人は

釋尊の御本意を打明けて説かれたものが法華經であることを知ると共に、此の法華經の流布するに依つて日本國が必ず救はるべきことの確信を得た。

其の久しい間の苦心は、斯くして酬ゐられたのである。

但し如何に貴い敎でも、之を弘むる人がなければ世に弘まらぬ。世に弘まつて多くの人を救ふことが出来なければ、少しも貴いとはいはれぬ。日蓮上人は法華經が最勝の經であることを知つたが、當世に此經を弘めんが爲に力を盡す人の絶えて無いのを見て失望を禁じ得なかつ

た。殊に此經が末法の世に入つて普く世に弘まるべきことは佛の豫め告げ給へる所で、即ち藥王品に

後の五百歳の中に廣宣流布して閻浮提に於て斷絶せしむること無かれ。

とある。後の五百歳とは佛滅より二千年を経て後の五百歳のこと、閻浮提とは世界のことである。此の時が即ち末法の世であるが、末法の世は『鬘論堅固の世』であると佛が仰せられた。鬘論堅固の世とは人々互ひに我を張つて相争ひ、紛亂の絶え間のない時代のことである。日蓮上人の時は正しく此の時に當つたのであるから、是非とも法華經を弘むる者が出なければならぬのであるが、其の人の影も見えぬ。勿論法華經が尊い經であることは凡ての人の認むる所で、又此經は處々の寺で讀誦せられて居た。併しそのみでは法華經が弘まつて居るとはいはれぬ。心に深く此經を信じ、此經の中に教へられてあることを實行すべく勵む人が多くならなければ法華經が弘まつたとはいはれぬ。叡山は傳敎大師の開いた山であるが、其の叡山にも眞に法華經を信ずる者は跡を絶つた。佛の豫め告げたまへる所は實現されぬのである。

佛は妄語の人であるか。若し妄語の人ならば其の説く所は一も遵奉すべき値がなくなるではないか。

上人は斯く思ひ到つて、今まで研究に力を盡したことが一切空に歸したやうに感じ、殆んど茫然自失せんとした。

併し上人は更に深く思案して、自分の考へが根柢から誤つて居たことに心附いた。『何事でも最初から大きなものにはなれぬ。涓滴が集つて大海となり、塵土が集つて泰山となるのである。たとへ自分一人でも此經を深く信ずるものが出たのは、即ち此經の廣宣流布すべき端緒が開けたのではないか。今より自分が努力して此經を弘め、二人より三人、百人より千人と此經を信ずる者が多くなれば、佛の告げたまへる所はやがて實現せらるゝであらう。自分が此經の尊いことを知りながら之を弘むることに力を盡さなければ此經は何時までも弘まらぬ。弘まらなければ佛の仰せられたことが妄語になつてしまふ。佛が妄語の人であるかないかと疑つて居るのは愚である。

佛を妄語の人にするもせぬも、自分の決心一つに依るのである。

世に此經を弘むべき人の出現するのを待つには及ばぬ。自ら進んで其の重任に當ればよいのである。自分に果して斯る大任を果し得べき力があるかないか。之を何時まで思案して居ても分ることではない。生命の限り努力して見て、その上でなければ自分にそれ丈の力があるか無い

かを知ることが出来ぬ。所謂不惜身命の覺悟を以て之を試みやう」と上人は決心したのである。

尤も末法の世に出て此經を弘むる人の一身に種々の迫害の集り來るべきことは、佛の豫言せられた所である。併し其等の迫害に屈せずして之を弘むるならば、其の努力は決して空に歸すること無く、之によつて廣宣流布の機運が作らるゝであらうとて、

此經は持ち難し、若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す。諸佛も亦然なり。

と仰せられた。日蓮上人は自分が此經を弘むるために起つならば、必ず種々の迫害に値ふであらうと知つた。其の迫害は自分の一身のみに止まらず、父母兄弟師匠にまで及ぶかも知れぬ。それは如何にも忍び難いことであるから、決心も少し鈍りかけたのであつた。上人自ら

王難等出來の時退轉すべくば一度に思ひ止むべしと且くやすらひし程に……今度強盛の菩提心を起して退轉せじと願しぬ。

といつて居る。迫害にあつて、之に堪へられずして止めるくらゐならば最初から止める方が宜いと思つて暫く躊躇したが、結局『自分のみならず父母兄弟と雖も、佛の正法を世に弘むるために難にあふのは大なる功德を積む所以である』と思ひ定めて、最後の決心をしたのである。

此より後の上人の生涯は迫害のみを以て充されて居る。

併し迫害を覺悟して此經を弘めたのであるから、如何なる事に出遭つても驚かう筈はない。

上人は佐渡へ流された途中に於て

本より存知の上なれば始めて歎く可きにあらず。

と其の弟子に書き送つたが、是れが終始一貫したる態度であつたのである。此經を弘めて迫害にあふことは即ち佛の豫言が適中したのであるから、其の苦みの中に無限の歡びがあるわけである。されば

是程の卑賤無智無戒の者の二千餘年以前に説かれて候法華經の文にのせられて、留難に値ふべしと佛記し置かれ參らせ候事、うれしさ申し盡し難く候。

といふが如き言ともなつたのである。既に此の豫言が適中した以上は『その苦心は決して空に歸せず、廣宣流布の機運がこゝに開けやう』といふ豫言も必ず適中するに違ひない。日蓮上人は斯く考へて、其の迫害の重疊する中を何時も歡喜の念を以て通つて行つたのである。

以上は法華經が世に弘まるに就て、如何に多くの人が如何に健氣なる働きをしたかを明にするために、二三の例を述べたのである。獨り法華經のみならず、其他の經、其他の教義の世に

弘まるに就ても、皆それ／＼に吾等の感激すべき多くの美談が之に伴つて居るのである。其等を一々擧ぐることは到底出来ぬけれども、例へば涅槃經の譯者たる曇無讖の事蹟の如きも實に感歎すべきものである。涅槃經には數種の漢譯があるけれども、其の最も完全なるものは曇無讖の譯出したる大般涅槃經四十卷である。彼は元來中印度の人で支那に來り、北涼の王沮渠蒙遜の保護の下に義熙十年（日本は允恭天皇の御宇、西洋は耶蘇紀元四百十四年）から七年を費して其の漢譯を終つたのである。彼は最初小乘の敎を學んだが後に大乘を信じ、之を世に弘めんとして種々の迫害にあひ、雪山を越え又崑崙を越えて龜茲に至り（前にいつた羅什の國である）更に進んで北涼に至つたのである。其間大涅槃經だけは片時も身を離さず、生命に換へて之を保護して居た。

眞に法の爲に生命を惜まぬ者といふべきである。

涼に落着いてからは國王の保護を受けて涅槃經の漢譯に従事したのであるが、此の大切な經典に誤譯があつてはならぬと考へ、三ヶ年の間改めて漢語を學び、然る後に其の譯述を始めた。

時に惠嵩とか道朗とかいふやうな學者も彼の徳を慕うて、其の翻譯に力を協せたので、譯文

は立派に出來たが、惜いことには彼の携へ來つた涅槃經の原本に品數の足らぬ所があつた。それで曇無讖は其の足らぬ分を探すために又印度へ歸つたが、偶々母が病んで没したので其の喪に籠るために暫く故郷に留つたが、其後苦心して其の不足の部分を探し出し、又支那へ戻つて之を譯した。併し其の譯出の間に猶ほ足らぬ所のあることを發見し、更に使を遣はして之を求め、苦心に苦心を重ねた末に四十卷の漢譯本を完成した。時に北魏の大武帝が（當時の支那は前にもいつた通り數國が對立して迭に勢を争つて居た時代である。）曇無讖の名を聞いて渴仰の念を起し、使を北涼に遣はして『朕講道を思欲し馳驛して之を致さんことを望む』云々と云ひ送つたが、北涼の方では之に應じなかつた。幾くもなく印度から來た僧の曇無發といふ者が四十卷の涅槃經を見て、『是れでは未だ完本ではない』と語つたので、曇無讖は是非とも完全なる涅槃經を支那に弘めたいと切望するの餘、北涼王に請うて今一度印度へ赴くことに決定した。北涼王は快く彼の旅立を許したが、北魏の王が彼を途中で抑留しはせぬかといふ疑惑を起した。時に北魏と北涼とは互ひに勢力を争つて居た際なので、若し此の高僧を北魏に奪はれてしまふならば、非常なる屈辱となるわけであつた。北涼王は終に心を決して刺客を遣はし、曇無讖を途中で刺し殺させた。

彼は終に涅槃經に殉したのである。其後に至つて此經を弘めんが爲に力を盡した人も少くなかつたが、何れも直接間接に曇無讖の感化を受けたものと見らるべきである。

又有名なる慧可の事蹟の如きも、道を求むるが爲には身命を惜まぬといふことの活きたる教訓といふべきである。梁の武帝の時に達磨が印度から支那へ来て禪の弘まる機運を開いたのは能く世に知られたことであるが、慧可は達磨が嵩山の少林寺に居た時に其の門に投じたのである。慧可は初め其の名を神光といひ、極めて博學多識の人であつたが常に『我が學べる所は未だ妙理を盡さず』と歎じ、良き師に逢ひたいと念じて居た。偶々達磨が少林寺に居ると聞いて『其の人こそは吾が師である』と思ひ、幾度も行つて教へを乞うたが、達磨は默然として壁に向つて坐したまふ振向いて見やうともしなかつた。神光は少しも失望せず、

昔人道を求むるには骨を敲いて髓を取り、血を刺して餓を濟ひ、髪を布いて泥を掩ひ、崖より投じて虎に飼へり。古尚ほ此の若し、我又何人ぞや。

といひ、自分は古の人に及ばぬ者であるから古の人よりも更に多く身を苦めなければ道を得ることは出来ぬと決心し、幾日も續いて少林寺を訪うて達磨の背後に立つて居た。十二月九日の夜は非常なる大雪であつたが神光は庭上に立つたまふ少しも動かさず、曉に至つて雪は其の膝を

没する迄になつた。達磨は之を憐んで『汝久しく雪中に立つ、何事を求めんとするか』と問うた。神光は之に力を得て『惟だ願はくば和尚慈悲をもて甘露の門を開き、廣く群品を度したまへ』と涙を流して懇願した。(群品とは多くの人のことである。神光は達磨に教へを受け、之を世に弘めて普く衆人を濟はうといふ志であつた。斯くてこそ眞に大乘を學ぶ者として耻しからぬ人といふべきである。) 併しながら達磨は容易く彼に許さず、

諸佛無上の妙道は曠劫に精勤し、行じ難きを能く行じ、忍ぶべからざるを而も忍びて得たり小徳小智輕心慢心を以て眞乘を冀ふとも、徒に艱苦するのみならん。

といつた。神光は之を聞いて大決心を爲し、刀を執つて自ら其の左の臂を斷ち、之を師の前に置いた。達磨は彼が法器なることを知り、

諸佛最初に道を求むるには、法の爲に形を忘れたり。汝今臂を吾が前に斷てり。とて、彼に其の弟子となることを許し、改めて慧可といふ名を與へた。

達磨は此より九年の間支那に止まり、其の教へを受くる者も多くなつたが、一人として慧可に及ぶものはなかつた。さて九年過ぎて印度へ歸るに際して、『時將に至らんとす。汝等各其の得たる所を言へ』と命じたので、道育とか道副とかいふ人々は各その覺り得たる所を述べた

が達磨は此等の人々に對して『汝は吾が皮を得たるのみ』とか『汝は吾が肉を得たるのみ』とかいつて、容易く許さなかつた。最後に慧可が恭しく師を拜したまふ、默然として立つたのを見て、達磨は『汝吾が髓を得たり』といひ、釋尊より傳へ來れる法を付屬するものは慧可の外にないといふ意を表すために、之に袈裟を與へた。達磨は更に世が末になると共に、眞に力を修行のために用ゐる者が乏しくなることを説いて、

道を明にする者は多く、道を行ずる者は少し。理を説く者は多く、理に通ずる者は少し。といひ、慧可が努力して法を護るべきことを懇に命じて別を告げた。

此の如くに勤苦して道を求めた例、道を弘めた例はなほ多くあるが、先づ此邊に止めて置かう。凡て此等の事蹟は吾等の如き臆病未練な者をも奮ひ起たしむる力をもつて居るやうである。此の如くに多くの艱苦を冒して少しも屈しなかつた人々は、何れも『我身命を愛せず、但だ無上道を惜む』と(法華經勸持品)諸菩薩が佛前に於て誓言したのと同じ心をもつて世に立つたものと思はれる。人として身命を愛せぬものは無い。而も身命を愛せずして種々なる艱苦を冒すのは、身命よりも更に貴ぶべきものが有ることを知るからである。香川景樹は鳥取の人であつたが京へ上つて和漢の學を修め、終に歌人として一世に知られた。其の修學時代には非常

に困窮したものであつたが、その頃故郷の人が彼を訪れた時に彼は一首の歌を詠じて其の志を示した、それは

いたづらに年をふる家の繩すだれ朽ちはつるまでかゝるべしやは

といふのであつた。果して彼は後年に至つて歌人として世に知らるゝ人となつた。或人が歌道に達するには如何にして可なるべきかと問うた時に景樹は之に答へて、

日夜心を斯道に致し、我が生命に換へて之を求むべきのみである。學ばずして知ることは出

來ぬ。學ぶには生命を惜まぬといふ覺悟がなければならぬ。

と答へた。歌を詠むといふことは暇のある人の慰み半分の仕事のやうに思はれて居るが、其の精妙に到るには身命を惜まぬといふ覺悟を要するのである。

況して佛法を學んで己を救ひ又他の人を救はんと欲するものは、必死の覺悟をもたなければならぬ筈である、法然上人の選擇集には觀無量壽經に三心具足の必要を説かれたる文を載せ(三心とは一に至誠心、二に深心、三に廻向發願心である。)次に唐の善導の著にかゝる同經の疏を引いてあるが、其の中に『今更に行者の爲に一の譬喩を説きて信心を守護し、以て外邪異見の難を防がん』とて次の譬喩が説いてある。

譬へば人有りて西に向ひて百千の里を行かんと欲するに、忽然として中路に二河あるを見る。一は是れ火の河にして南に在り。一は是れ水の河にして北に在り。二河各濶さ百歩、各深くして底無く南北に邊無し。正しく水火の中間に一の白道あり。濶さ四五寸許なるべし。此の道東岸より西岸に至り、亦長さ百歩なり。其の水の波浪交々過ぎて道を濕し、其の火焰また來りて道を燒く。水火相交りて常に休息すること無し。此の人既に空曠の迥なる處に至るに更に人物無し、多く群賊惡獸有り、此の人の單獨なるを見て競ひ來りて此の人を殺さんと欲す。此の人死を怖れ直ちに走りて西に向ふに忽然として此の大河を見る。即ち自ら念言すらく、此の河南北邊畔を見ず、中間に一の白道を見るに極めて是れ狭小なり。二の岸相去ること近しと雖も何に由りてか行く可き。今日定めて死せんことを疑はず。正しく到り廻らんと欲すれば、群賊惡獸漸々に來り逼る。正しく南北に避け走らんと欲すれば、惡獸毒蟲競ひ來りて我に向ふ。正しく西に向ひて道を尋ねて去らんと欲すれば、復た恐らくは此の水火の二河に墮ちん。時に當りて惶怖して復た言ふべからず。即ち自ら思念すらく、我今廻るも亦死なん、住まるも亦死なん、去るも亦死なん。一種として死を免れずば、我寧ろ此の道を尋ねて前に向ひて去らん。既に此の道有り、必ず度るべしと。此の念を作す時、東岸に忽ち

人の勸むる聲を聞く、仁者但だ決定して此の道を尋ねて行け、必ず死の難無からん。若し住まらば即ち死せん。と。(仁者とは君といふと同じ意) 又西岸の上に人有りて喚びて言く、汝一心正念にして直に來れ、我能く汝を護らん。衆て水火の難に墮せんことを畏れざれと。此の人既に此に遣り彼に喚ぶを聞きて、即ち自ら身心を正當にして、決定して道を尋ねて直に進み、疑怯退の心を生ぜず。或は行くこと一分二分するに、東岸の群賊等喚びて言く、仁者廻り來れ、此の道險惡にして過ぐることを得ず、必ず死せんこと疑はず。我等衆て惡心をもて相向ふこと無しと。此の人喚ぶ聲を聞くと雖も亦廻り顧みず、一心に直に進みて道を念ひて行く。須臾にして即ち西岸に到り、永く諸難を離る。善友相見て慶樂已むこと無し。

とある。更に此の譬喩の意味を丁寧に説明していふに、東岸といふは即ち此の娑婆世界の火宅に喩ふるなり。西岸といふは即ち極樂寶國に喩ふるなり。群賊惡獸の詐り親むといふは、即ち衆生の六根六識六塵五陰四大に喩ふるなり。(此の世に生存するために起る所の諸種の欲望をいふのである) 無人の空迥の澤といふは即ち常に惡友に隨ひて眞の善知識に値はざるに喩ふるなり。水火の二河といふは即ち衆生の貪愛は水の如く嗔憎は火の如くなるに喩ふるなり。中間の白道四五寸といふは、即ち衆生貪嗔の煩惱の

中に能く清淨の願往生の心を生ずるに喩ふるなり。乃ち貪瞋強きに由るが故に即ち水火の如しと喩へ、善心微なるが故に白道の如しと喩ふ。又水波常に道を濕すとは即ち愛心常に起りて能く善心を染汚するに喩ふるなり、又火焰常に道を焼くとは即ち瞋嫌の心能く功德の法財を焼くに喩ふるなり。人道の上を行きて直に西に向ふといふは、即ち諸の行業を廻して直に西方に向ふに喩ふるなり。東岸に人の聲ありて勸め遣るを聞き、道を尋ねて直に西に進むといふは、即ち釋迦既に滅して後の人見ざれども、教法有るに由りて尋ね可きに喩ふるなり。即ち之を聲の如しと喩ふるなり。或は行くこと一分二分するに群賊等喚び廻すといふは、即ち別解別行惡見の人等の妄りに見解を説きて迭に相惑亂し、及び自ら罪を造りて退失するに喩ふるなり。西岸の上に人有つて喚ぶといふは、即ち彌陀の願意に喩ふるなり。須臾にして西岸に到りて善友相見て喜ぶといふは、即ち衆生久しく生死に沈みて曠劫に輪廻し、迷倒自纏して解脱するに由無きも、仰ぎて釋迦の發遣して西方に指し向はしむることを蒙り、又彌陀の悲心をもて招喚するに籍りて、今二尊の意に信順して水火の二河を顧みず、念々に遣ること無く、彼の願力の道に乗じて身を捨て已りて後彼の國に生ずることを得、佛と相見て慶喜すること何ぞ極まらんといふに喩ふるなり。

是れは前にいふ三心の中に於て、特に深心といふことの説明である。是れ程に深く佛を信じ、有らゆる誘惑に打克ち、有らゆる艱苦に堪へ得る人にして、初めて能く自ら救ひ又他の人を救ふことも出来るのである。なほ之に續いて

又一切の行者、行住坐臥に三業を修する所(三業とは身に行ふ所と口に言ふ所と、意に思ふ所とをいふのである。)晝夜時節を問ふこと無く常に此の解を作し、此の想を作すが故に廻向發願心と名くるなり。又廻向といふは、彼の國に生じ已りて還りて大悲を起して、生死に廻入し、衆生を教化するを亦廻向と名くるなり。

といつてある。生死に廻入するといふは世間の生活に身を投じ、世間の人と共に住んで、之を指導することである。自分が悟つたからと云つて、世間の人を眼下に見下し、『彼等は俗人である』など、批評して居るのは間違つたことである。佛の大慈悲によつて救はれた自分の幸福に就て感謝する念があるならば、此の幸福を他の人にも願ちたいといふ心にならぬ筈はない。法華經の信解品を讀むと、迦葉等は誠心を以て釋尊に感謝して、我等今日未曾有なることを得たり。先の所望に非るを而も今自ら得たり。

といひ、又

我等長夜に佛の淨戒を持ちて、始めて今日に於て其の果報を得、法王の法の中に久しく梵行を修して、今無漏無上の大果を得。

といひ、更にまた

世尊は大恩まします。希有の事を以て憐愍教化して我等を利益したまふ。無量億劫にも誰か能く報ずる者あらん。

とまでいつた。此の如き感激の心をもつた者ならば、此の大恩に報ずるためには如何なる艱苦をも冒すことの出来る筈である。

されば釋尊は寶塔品に於て所謂六難九易を説かれ、須彌山を提げて此の世界の外に擲げ出すとか、足の指を以て大千世界を動すとかいふ類の難事を九ヶ條擧げて、此等の事も末法の世に此の法華經を弘むるに就ての努力に比ぶれば猶ほ易きことであるといひ此經を弘むるに就ての困難を六項に分けて述べられた。斯く困難であるが故に、此の困難を忍んで此經を弘むる功德は莫大である。因て

我佛道を爲て無量の土に於て、始より今に至るまで廣く諸經を説く。而もその中に於て此經第一なり。若し能く持つこと有れば則ち佛身を持つなり。

と説かれ、更に

諸の善男子、我が滅後に於て誰か能く此經を受持し讀誦せん。今佛前に於て自ら誓言を説

け。

と奨められ。而して後に重ねて

此經は持つこと難し。若し暫くも持つ者は我即ち歡喜す、諸佛も亦然なり。……佛滅度の後に能くその義を解せんは、是れ諸の天人世間の眼なり。恐畏の世に於て能く須臾も説かんは一切の天人皆應に供養すべし。

とある。迦葉の如くに佛恩に感ずること深きものは如何なる艱苦をも冒して、斯る大功徳を積むことが出来るか見極められたるが故に、佛は此の如く之を奨め勵まされたのである。

但し如何に佛の説法が貴いものであつても、之を聽聞したる凡ての人が皆斯くまでに感激するものではない。同じ法華經の方便品を讀むと、舍利弗等が三たびも懇ろに請うた爲に、愈々釋尊が深妙なる理を説き出されんとした時に、五千人の者は之を聽聞することを欲せずして座より起つて退いたとある。而して釋尊は之を制止せられず、舍利弗に向つて舍利弗、是の如き増上慢の人は退くも亦佳し。汝今善く聽け、當に汝が爲に説くべし。

とて、此より言を改めて佛の此世に出現せられたる所以を説かれた。増上慢とは『未だ得ざるを得たりと謂ひ、未だ證せざるを證せりと謂ふ者』のことである。即ち彼等は自ら以て足れりとして、其より以上に深い事を學ばうとは望まぬのである。斯様に心の曲つたものは、假令佛の貴い敎へを聴いても其の貴さが充分に分らう筈はない。之に反して壽量品に衆生既に信伏し質直にして意柔軟に、一心に佛を見たてまつらんと欲して自ら身命を惜ま

ず。
とあるやうな心を持つて居る者は、能く佛の説法を聴いて其の深き意義を解し、限りなき感謝の念を生ずるものである。

特に壽量品の語に『意柔軟に』とあるに深く注意しなければならぬ。柔軟といふは其の心に少しも私なく、たゞ道を求むるにのみ専なことである。是れは至て難事である。例へば孔子の弟子達の中で、子貢の如きは傑出したる者の一人であつたと見えるが、孔子が子賤を評して『君子なるかな此の若き人』といはれたのを聞いて『賜や如何』と問ひ、孔子が『汝は器なり』といはれたのに對して再び『何の器ぞや』と問ひ返したのを見ると、己の才能に就て恃む所ある人の如くである。全く挾む所なくして専ら道を求むる人とはいひ難い。又子路の如きも確

かに孔門に於て異彩のある人の一人であつたが、孔子が顔淵を稱めて『之を用ゆれば則ち行ひ、之を捨つれば則ち藏る。唯我と爾と是あるかな』といはれた時に『子三軍を行らば則ち誰と與にせん』と問うたのを見ると、自己の勇氣を恃むさまが明かに現はれて居る。然るに顔淵に就て孔子の評せられた所を見ると、或は

回や我を助くる者にあらず、吾が言に於て説ばざる所なし。
とあり、或は又

吾回と言ふに、終日違はずして愚なるが如し。退いて其の私を省れば亦以て發するに足れり。回や愚ならず。

ともある。之に依つて察するに顔淵は少しも其の心に挾む所なく、唯だ道を求むるの念のみが盛であつた爲に、常に孔子の言を謹聽して、之が實行に力を用ゐて居たものと思はれる。朱子が之を説明して

其の夫子の言を聞くや默識心融し、觸處洞然として自ら條理有り。故に終日言へども但だ其の違はずして愚人の如きを見るのみ。退いて其の私を省るに及びては、其の日用の動靜語黙の間皆以て夫子の道を發明するに足り、坦然として之に由りて疑ふこと無きを見る。

といつたのは能く其の意を悉して居るやうである。是程に私心の無い人であるから、顔淵は喟然として歎じて『之を仰げば彌々高く之を鑽れば彌々堅し』といひ、

立つ所有りて卓爾たるが如く。之に従はんと欲すと雖も由るなきのみ。

といひ『到底自分共の及ぶべき所でない』といふ意を表はした。此の如き柔軟の心を以て、絶えず學に勤むるならば其の進路は誠に測る可からざるものがあるであらう。されば孔子は子貢に向つて『汝と回と孰れか愈れる』と問はれ、子貢が『賜や何を敢て回を望まん。回や一を聞て十を知り、賜や一を聞て二を知る』と答へた時に、

如かざるなり。吾と汝と與に如かざるなり。

といはれた。孔子が『自分も及ばぬ』とまで稱められたのは、顔子の將來に囑望することの如何に深かつたかを證するものである。

孔子が『後生畏る可し、焉んぞ來者の今に如かざるを知らんや』といはれたのは世に能く知られた言である。孔子は自身のことを『述べて作らず信じて古を好む』とか、『古を好みて敏く之を求むる者なり』とかいつて居られるけれども、決して唯だ黄金時代を過去にのみ求めたのではなく、努めて已まなければ後世の人と雖も古の聖人と同様の境界に到達すべきことを信じ

て居られたのである。それは顔淵の仁を問へるに答へて

一日克己復禮すれば天下仁に歸す。仁を爲すこと己に由る、人に由らんや。

といはれたのに依つても明かである。されば顔淵の如きも努めて已まなければ、必ず孔子自身と同等になるのは勿論のこと、古の文武周公と同じき徳を具ふるやうにならうと思つて居られたに違ひない。(此の點は釋尊が其の弟子に授記して、後に必ず佛と成るべきことを認められたのと其の意を一にするものである。)斯くまで望を屬した顔淵が己に先つて死んだのであるから、『噫天子を喪せり、天子を喪せり』と痛歎し、又覺えず慟哭したのを從者に『子慟せり』といはれて『夫の人の爲に慟するにあらずして誰が爲にせん』ともいつたのである。後に至つて魯の哀公が『弟子孰か學を好むと爲す』と問うた時に、孔子は之に答へて

顔回なる者有り學を好み、怒を遷さず、過を貳せず。今や則ち亡し。未だ學を好む者を聞かざるなり。

といはれた。眞に顔子の如くにして初めて學を好む者と稱せらるべきである。

彼の迦葉等の如きも法華經の序品の劈頭に『諸漏已に盡きて復た煩惱無く、己利を逮得し、諸の有結を盡して心自在を得たり』とあるを以て見れば、非常なる高德の人々であつたと思は

れるが、決してそれだけで満足せず、熱心に請ひ求めて佛の教へを聞き、聞き終つて、前にいふ通り感謝して已まなかつたのは、眞に『學を好む者』の範と稱すべきである。是れが眞に柔軟なる意をもてる者である。柔軟なる意をもてる者が即ち道を求むるが爲に生命を惜まぬ者なのである。春になると木の芽が出るが、この芽は皆至て柔軟である。柔軟であるが故にスクスクと伸びて行くのである。その大空に向つて伸びて行く勢は實に凄まじいものである。若しあの芽が堅かつたなら決して伸びぬであらう。

限りなく伸びて行く力は、常に柔軟なるものにのみ具はつて居るのである。

自ら恃むもの、自ら足れりとするもの、自ら限るものは、何れも柔軟ならぬ者である。世間の有様を見るに、地位の高い者は其の高位を恃みとして人に傲り、地位の卑い者は其の卑い者を多く結合して高い者に當らうとする。富める者は其の富を恃んで私を遂げんとし、貧しい者は多くの貧しい者を糾合して富める者に反抗せんとして居る。博學多識の人は其の博學多識を恃んで他の者を冷眼視し、淺學無識の者は多數の同類を狩り集めて之に對抗せんとして居る。何れも其の意の柔軟ならぬ者である。此の如き私心を去らなければ道に入ることとは出来ぬ。たとへ佛法を學んで聊か解する所あり、又佛法の弘通に力を用ゐて聊かの功績の稱すべき

ものありとも、自ら之を恃むの念が生ずるならば、其の向上の道は其處で鎖されてしまふのである。明代の高僧藕益といふ人が

一翳眼に在れば空華亂墜す。

といったが實に面白い語である。眼の瞼の中に僅か二分か三分の塵が入つて居ると、眼がクラクラとして宛も空中に數限りなき花片が亂れ飛んで居るやうに思はれるのである。一たび私心が萌せば思慮分別が皆亂れてしまひ、皆狂つて行くものである。佛法を學ぶものは特に心を此處に致さなければならぬ筈であるが、却て此の過を犯す者の多いのは數すべきの至である。

世間の藝術を専門とする人々を見ると、其の人々の中には斯る用意のある人が少からぬやうである。唐の韓退之が『師説』の中に、

巫醫樂師百工の人は相師とすることを耻ぢず。士大夫の族にして師といひ弟子といふ者は則ち群り聚りて之を笑ふ。……巫醫樂師百工の人は君子之を鄙む。今其の智乃ち反て及ぶこと能はず、怪むべきかな。

といったのは如何にも適切である。蟬丸といふ者は敦實親王の宮に仕へた雑色であつたが、仕を辭して近江の逢坂に至て侘しい板屋を作つて住み、毎日琵琶を弾じて居た。其の頃三位源博

雅といふ人があつて頗る琵琶に熱心であつたが、蟬丸の名手なることを聞いて、三年の間續けて其の庵の側へ行つては彼が秘曲を彈ずるを立聽きし、終に自分の名を打明けて其の傳授を受けたといふことが傳へられて居る。(蟬丸が皇子であるとか、盲目になつたとかいふ説は信じ難い)。博雅が其の地位身分の高いことを忘れて、卑賤なる蟬丸の教へを受くる爲に斯くまで心を碎いたといふは所謂柔軟の意をもてる者といふべきではないか。

又渡邊華山が畫道の研究の爲に谷文晁の門人となつた時の話なども實に感服すべきものである。華山は已に白芝山とか金子金陵とかいふ人々に學んで相當の上手になつて居たのであるが、天下第一の畫人とならうといふ理想を以て、更に文晁に就て教へを請うたのである。それ故に文晁も其の技倆に感服して、自ら敢て其の師とはならなかつたのである。併し華山は飽くまでも弟子の禮を執り、文晁を『先生』と稱して其の教へを受けた。文晁もまた華山へ送る書簡などには『華山先生』と書いて居た。今日華山の畫を文晁と比べて見ると、其の筆力の縦横なるところは或は文晁に及ばぬであらうが、氣韻の點に於ては遠く文晁の上に在るやうである。是程の人で自ら足れりとせず、文晁に師事したといふは感ずべきである。其の門人椿山に與へた書簡の中に、貧窮の中に安んずる心を述べて

慈親を奉養致し、妻子も故無く、又尊兄の如き同好の益友、其樂亦言ふべからず、此樂これあり、貧と申すにも足らず候。

といひ、又

利に走るものは虚稱して名を賣り利を取る、是尤も懼る可きの甚し。名なければ利なく、名あれば懼あり。

といつて居るが、これは眞に世間を達觀したる人の言である。又

歴代名畫の人となりを吟味致し候に、雄名なる人々一人として凡庸はこれなし。……德藝一致ならざれば藝も必ず達せず候。僕はかゝる身、猶更憤發致さず候ては男子たる申譯なし。ともある。『かゝる身』とは當時幕府の嫌忌に觸れて田原へ幽閉せられて居たことをいふのである。最早罪人となつて、當世に自分の志を行ふことは出来ぬから、せめて畫道に全力を注がうとの意である。

斯く一技一藝と雖も其の精妙の域に達するのには所謂『質直にして意柔軟』といひ『自ら身命を惜まず』といふやうな精神でなければならぬのである。況して人生の眞の意義を辨へ、自己を救ふと共に普く世間の人も救はうといふ、最も大切な働きをする人が一點たりとも私心

を挾んで居て、その志を達し得られやう筈はない。是非とも柔軟なる意をもち、身命を惜まぬ覺悟をもたなければならぬことである。是れは至難の事であるが、至難の事であるが故に其の功德も莫大なのである。彼の傳教大師が

淺きは易く深きは難しとは釋迦の所判なり。淺きを去りて深きに就くは丈夫の心なり。

といつて奮起したやうな心をもてば、吾等と雖も此の至難の事に當り得らるべきは疑ひを容れぬ所である。若し此の至難の事に當らうといふ志をもつた者が互ひに相扶け相勵まして其の努力を續くるならば、最初はそれ程に大きな力でなくても、やがて世を動すべき勢力ともなるのであらう。釋尊が入滅に際して、御弟子達の悲歎に沈んで居るのを慰め且勵まされて、

汝等比丘憂惱を懷くこと勿れ。若し我世に住すること一劫なりとも、會ふものは亦當に滅すべし。會ひて離れざることは終に得べからず。自ら利し人を利するの法は皆具足しぬ。若し

我久しく住するとも更に益する所無し。應に度すべき者は。若し天上人間皆悉く已に度し、其の未だ度せざる者にも皆亦已に得度の因縁を作せり。今より已後我が諸の弟子展轉して之を行ずれば、則ち是れ如來の法身常在りて滅せざるなり。(佛遺教經)

と仰せられた所が、其の御弟子達によつて能く守られ、其の人々が又同様の遺命を爲し、その

遺命が又その後の人々によつて能く守られたるが故に、佛法は今日まで亡びずして存して居るのである。吾等は之に對して深く感謝すると共に、又吾等自身の心を勵まして其志を嗣ぐために努力しなければならぬのである。

此處に『自ら利し人を利するの法が盡く具足して居る』とあるのは即ち大乘佛教のことである。之を學んで怠らぬものは皆自ら利し又他の人を利する所の力を具へ得るに至るべきである。又『若し今よりなほ久しく此世に住まつて居ても此より以上に説くことは無い』と仰せられたのであるから、釋尊の悟りたまへる所の事は悉く其の説法の中に包容せられてあると考へて宜いわけである。此の事は法華經の方便品の中に、

自ら無上道、大乘平等の法を證して、若し小乗を以て化すること乃至一人に於てもせば、我則ち慳貪に墮せん。此の事爲めて不可なり。

とあるに依つても知るべきである。證するとは證悟の意である。佛が自分は最も深い悟りを得て居ながら之を心に秘めて人に説かず、卑い小乗の教へを説くのみであつたなら、大慈悲とはいはれぬ。それは貴い寶を人に頒つことを惜むもので、大なる罪であるから、佛は決して左様いふことをせぬと明言せられたのである。但し佛の智慧を佛ならぬ者が測ることは出來ぬか

ら、『まだ吾等に漏されぬことが多くあるのではないか』といふ疑ひも起つたであらうが、佛の説きたまへる所を充分に味へば、その中に佛の悟り給へる所が漏れ無く説き示されてあることを知り得べき筈である。

孔子の門人等の中にも、孔子が自分達に示されぬことを多く其の胸中に藏して居られはせぬかと疑つた者があつたと見えて、孔子は彼等に向つて、

二三子我を以て隠すと爲すか。吾爾に隠すこと無し。吾行ふとして二三子と與にせざるもの無し。

といはれたことがある。包咸が之を説明して『聖人は知廣く道深し、弟子之を學ぶも及ぶこと能はず、以て隱匿する所有りと爲す。故に之を解くなり』といつたのは普通の解釋であるが、徂徠が之を解して

蓋し二三子の黙して之を識らんことを欲するなり。先王之教は言はずして行と事とを擧げて之を示す。天何をかいふや、四時行はれ百物生ず。皆黙して之を識るに在り。

といひ、又安井息軒が之を解して

古人の教は行を先にして言を次にす。故に孔子の門人に於ける必ず憤悱するを待て而る後に

之を啓發す。故に又曰く、予言ふこと無からんと欲すと。其の思ひて之を得んことを欲するなり。然れども人の知を喜びて行を略するは古も猶ほ今の如し。孔門の諸子と雖も或は此を免れず、孔子を以て隠すと爲す者あるに至る。故に孔子之に諭して曰く、我の爲す所必ず二三子と之を共にし、未だ嘗て獨り冥々の中に行はざるは二三子常に之を見たり。而るに我を以て隠すと爲すは、特に心を用ゐて之を熟察せざるのみと。其の之を誘ふこと深切著明と謂ふべし。

といつたのは、何れも有益なる語である。孔子は必ず自ら實行した所を説いたのであるから、其の短い語にも深い意義が含まれて居る。弟子達の中には其の語の多くないのを物足らず思つて、『隠して居る』など、誤解したものもあるが、其の僅かな語でも之を孔子の行と併せ考へて見ると、實に深いものゝ有ることに氣附くべきである。

此の二大儒が孔子に就て説いた所は、釋尊に就ての説明として之を活用することが出来る。釋尊の仰せられた所として多くの經の中に録せられてあるものは、孔子の語として傳はつて居るものよりは遙かに多い。併しそれでも吾等にはなほ物足らず感ぜられ、『まだ此外にモット深いものがあるのでは無いか』と疑はれるのである。併しこれは

説いて盡さざるの罪ではなくて、吾等が其の説かれた所を深く味ふことの足らぬ罪である。

但し如何に無礙の辯といへども、限り有る語を以て限り無く深い思想を現はすことは出来ぬものであるから、善く聴くものは其の語の底にある深い意義を、即ち言外の深意を察する者でなければならぬ。芭蕉は俳聖とまで稱せられた人であるが、その葬儀の時に直愚上人が説いた偈の結尾には

五十一年。一字不説。

とあつた。芭蕉の靈は之を知己の言として悦んだことであらう。如何に芭蕉が名句を吐いても、其の句を以て其の心の中に思ふことを言ひ盡すことは出来なかつたに違ひない。要するに『一字不説』である。能く芭蕉の句を解するものは、其の十七字に言ひ盡せぬ所を察して之を心に解するのである。佛の説法を解する者も亦此の如くでなければならぬ。

又吾等は直接に佛の説法を聴聞することが出来ず、經文によつて間接に之を學ぶを得るのみである。若し佛の説法が經文によつて今に傳へられなかつたなら、吾等は永久に救はれずして終つたであらう。左傳に、

仲尼曰く、志にこれ有り、言以て志を足し、文以て言を足すと。言はずんば誰か其の志を知らん。之を言ふも文無ければ、之を行ふこと遠からず。

とあるが實に其の通りである。併し經文なるものは佛が自ら書かれたものでもなく、又佛の説法を聴聞した人々が直ちに之を筆録したもので無い。佛の説法の語り傳へられた所のものが資料となつて、遙かに後代になつて出来上つたものである。(此事に就ては前にも一度述べたが)それ故に如何に其の經文が完備したものであつても、之を直接に佛の説法を聴聞するに比すれば頗る不満足な所のあるを免れぬ筈である。されば經文を通して佛の御心の在る所を知らうとするには、非常なる努力を要すべきこと勿論である。『十讀は一寫に如かず』といふ古語がある。寫すには一字一字に寫さなければならぬから、一卷を寫し終るまでには、之を十度繰返して讀むよりも多くの努力を要するものである。要するに深く意を用ゐて讀まなければならぬことをいつたのである。又蘇東坡のいつた事に、

書を學ぶは急流に浜るが如し。氣力を用ゐ盡すも舊處を離れず。

といふのがある。急流を泳いで上るのには非常なる努力を要する。弱い者は氣力を用ゐ盡しても元の處を離るゝことの出来ぬほどのものである。吾等が經典を讀む場合にも急流に浜るくら

の決心をもたなければならぬ。

禪宗の方では『不立文字』といふことをいふが、全く文字が不用だといふのではない。言語文字に依つて學んで、結局言語文字を離れ、言語文字に盡されぬものを捉へよといふのである。最初から經典も無く、道を説き教を傳ふる人も無かつたら、學ぶことも悟ることも出来るものではない。祖庭事苑（宋の陸庵の著である。）に

傳法の諸祖初めは三藏の教乘を以て（經律論のことである。）兼ね行ふ。後に達磨祖師心印を單傳し、執を破し宗を顯す。所謂教外別傳不立文字、直指人心見性成佛なり。然れども不立文字は意を失ふ者多し。往々に謂へらく、文字を屏去し默坐を以て禪と爲すなりと。斯れ實に吾が門の啞羊のみ。且萬法紛然たり、何ぞ止だ文字のみ不立なる者ならんや。殊に知らずや、道とは猶ほ通ずといふが如し。豈に一隅に拘執せん。故に文字に即すれば文字すら不可得なり。文字既に爾り、餘の法も亦然り。

といつてあるのは眞に其の當を得たる説である。文字に拘はつて居ては文字の眞の用が出来ぬ。凡てが其の通りである。『不立』といふは全く不用といふのでなく、拘はらず囚はれぬをいふのである。馬術の名人を形容して『鞍上に人なく鞍下に馬なし』といふが、全く馬も無く人

も無いのではない。馬と人とが一致して動くので、『人が馬に乗る』といふやうな區別を離れ盡した有様をいふのである。今不立文字といふも斯る意に解すべきであらう。昔の高僧が佛を罵つたとか。佛像を焚いて暖を取つたとかいふ話が傳はつて居るけれども、それを文字通りに解釋すべきものではない。佛の慈悲に感激せぬ高僧などの有らう筈はない。尤も中峰錄に

禪何物ぞ。乃ち吾が心の名なり。心何物ぞ。即ち我が禪の體なり。……惟だ禪と心とは異名にして同體なり。

とある如く、吾等の心の本體を明かに知ることが出来れば、それが悟つたといふことで、見性成佛とは即ち此の義である。斯うなれば吾より外に佛を認むる必要はないであらうが、最初から斯ういふ悟りが得らるべきものではない。最初は言語や文字を通して、佛の吾等に遺されたる教を學ばなければならぬ。されば『吾より外に佛は入らぬ』といふ人でも、佛の恩を忘れてしまはう筈が無いのである。

兎もあれ吾等は言語文字を通して佛教を學ぶことに力を用ひなければならぬ。佛は後世に至つて言語や文字に囚はれて、其の言語文字の奥に秘められたる深き意義を捉へずして終る者の多からんことを憂へて幾度となく之を戒められた。その事は多くの經典の中に見えて居る。併

しながら後世の者が皆言語文字に囚はれて佛の御本意を辨へぬやうになるとは決して思はれなかつた。其の中に心の柔軟にして、身命を惜まざる覺悟のあるものも必ず有らうと信じられたればこそ、『諸の弟子展轉して之を行ずれば則ち是れ如來の法身常在りて滅せざるなり』といふやうに仰せられたのであらう。吾等が經典を讀誦しても、元來凡夫の身であるから、容易に其の甚深の意を身に體することは出來ぬけれども、其の甚深の意を身に體して、衆生の化導に力を盡した人の昔から少からずあるのを見ては、何よりも心強く感ずるのである。前にも度々引いた通り、佛は、

一切衆生悉く佛性有り。(涅槃經)

一切衆生の心性は本淨し。(大集經)

衆生元より佛性あり、他より得べきにあらず。(首楞嚴經)

心則ち濁亂を離るれば、我心を説きて佛と爲す。(入楞伽經)

といふやうに仰せられたが、其の一切衆生とか衆生とかいふ中には、賢人も愚人も善人も惡人も悉く皆包容せらるゝのである。又心といふは即ち一切衆生の心のことである。されば吾等の如き凡夫でも其の中に含まるべきこと勿論である。然らば吾等と彼の深く佛法を究め、又之を

世に弘むることに力を盡して大なる功德を種えたる人々とは根本的に等差があるのでなく、唯だ努むると努めざるとの差によつて、彼の人々は菩薩の道を行じて佛の教化を賛げ、吾等は唯だ凡夫の境界に沈淪して居るといふ大なる隔りを生じたのである。曹交が孟子に向つて『人皆以て堯舜たる可しと。これ有りや』と問うた時に孟子は『然り』と答へた。更に曹交が『如何にして可ならん』と問ふに及んで、孟子は

夫れ人豈に勝へざるを以て患と爲さんや、爲さざるのみ。

といひ、更に之を説明して、

徐行して長者に倣るゝ之を弟と謂ひ、疾行して長者に先つ之を不弟と謂ふ。夫れ徐行は豈に人の能はざる所ならんや、爲さざる所なり。堯舜の道は孝弟のみ、子堯の服を服し、堯の言を誦し、堯の行を行へば是れ堯のみ。子桀の服を更し、桀の言を誦し、桀の行を行へば是れ桀のみ。

といひ、曹交が之に感じて、更に緩々と孟子の教へを受けたいと願ふを聞いて、夫れ道は大路の若く然り。豈に知り難からんや。人求めざるを病ふるのみ。子歸りて之を求めば餘師有らん。

といつた。又孟子の言に

雞鳴きて起き孜孜として善を爲す者は舜の徒なり。雞鳴きて起き孜孜として利を爲す者は跖の徒なり。舜と跖との分を知らんと欲せば他なし、利と善との間なり。

ともある。實に此の通りである。吾等も佛に『佛性有り』と認められ『心を説きて佛と爲す』とまで稱められた身でありながら、力を用ゐることの足らぬために、彼の多くの賢聖の人々と相距ること甚だ遠き有様であるのは、まことに慚すべきの至である。

併し彼の人々の貴い事蹟が傳はらなかつたなら、吾等は自ら慚づることもし得なかつたであらう。深く慚づる時は大に奮ふ心が生ずるものである。大に奮ふ時には吾等と雖も永く凡夫の儘では居らぬであらう。吾等が自ら奮つて菩薩道を勵むならば、又他の人に相當な感化を與ふることも出来るであらう。さすれば佛が『諸の弟子展轉して之を行すれば……』と仰せられた中の一分に加はることも出来るに違ひない。返す返す貴いものは吾等に先つて大乘の教を學び之を身に行ひ又之を世に弘めた人々の事蹟である。昔陶淵明が彭澤の令を辭して故郷に歸り、自ら五柳先生と號して、清貧の間に道を樂んで一生を終つたのは後世の人の崇敬して措かぬ所で、殊に蘇東坡は屢々言を極めて之を稱讚し、又屢々淵明の作に和したる詩を作つた。然るに

東坡の後輩であつた黄山谷は此の事を稱めて

彭澤は千歳の人、東坡は百世の師、出處同じからずと雖も氣味は乃ち相似たり。

といつたが、又自分も東坡と性行の相似たる所のあることを自ら悦びとし、東坡を松の木に比して

青松澗壑より出で、十里風聲を聞く。

といひ、自分を其の松に絡まつて居る葛に比し

小草も遠志有り、相依ること平生に在り。

といひ、之を結ぶに

小大材は則ち殊なれども、氣味は固に相似たり。

といふを以てした。彼の先賢の人々は互ひに其の前代の賢聖を範として行を勵み、互ひに佛法の弘通に大なる貢獻をしたのであるが、吾等も松に絡む葛のやうな心を以て、彼の人々の行に倣ひ、疾く凡夫の境界を離れたいものである。

此の如き人々は所謂三寶の中の僧寶に屬すべき者である。三寶とは佛法僧をいふのであるが、『實性論』の中には『何の義を以ての故に佛と法と衆僧とを説き名けて寶と爲すや』との問

を設け、之に答ふる爲に偈が説かれてある。その偈の文は
眞實は世に希有なり。明淨にして及び勢力有り。能く世間を莊嚴し、最上にして不變等なり。

といふのである。更に此の偈を説明して實といふ義に六種あるといつてある。先づ世に希有なりといふは『善根無き衆生等は百千萬劫にも得ること能はざるが故に』とある。次に明淨といふは『一切有漏の法を離るゝを以ての故に』とある。有漏の法といふは即ち煩惱のことで、一切の煩惱を離れたものを眞の實と稱するとの意である。次に勢力ありといふは『不可思議の威徳自在なるが故に』とある。次に世間を莊嚴するといふは『能く出世間を莊嚴するが故に』とある。是れは特に注意すべきである。出世間といふは世俗の生活より超越したる者のことである。斯る出世間の人々に仰ぎ貴ばるべきほどの佛法であるから、世間の人々を教へ導くべき力をもつて居るのである。世間の人の心に叶ふだけのものに、世間を教へ導くべき力の具はらう筈はない。此處に深く注意しなければならぬ。次に最上といふは『出世間の法なるが故に』とある。此處に出世間といふは『世間と無關係』といふ意味でなく『世間より超越した』といふ意味『世間を導くべきもの』といふ意味である。終りに不變といふは『世間の八法も動すこと能

はざるが故に』とある。此の八法といふのは又八風ともいふので、世間の人の愛する所及び憎む所の八種の境遇である。思益經には

利衰及び毀譽、稱譏と苦樂と、此の如きの八法常に世間に率ふ。

とある。之を名けて八風といふのは此等八種の變化が常に人の心を煽動するが爲で、智度論の中に

衰利毀譽稱譏苦樂の四順四違は能く物情を動す。名けて八風と爲す。

とある。利とは即ち得意の境遇に在ること、衰とは即ち失意の境遇に在ることである。得意なれば喜び失意なれば悲むのが常人の情である。然るに吾等の周圍の事情は常に變るものであるから、之が爲に或は喜び或は悲んで居れば、心に少しも平和は無いのである。毀譽稱譏とは共に他人の批評のことであるが、陰で非難することを毀といひ、陰で稱讚することを譽といひ、面のあたり稱むるのを稱といひ、面のあたり誹るのを譏といつて、區別を立てある。稱譽せらるゝを聞けば心に驕りを生じ、非難せらるゝを聞けば心に恨みを生ずる故に、心はいつも平和で居られぬのである。又苦は心に悩みを興へ、樂は心に悦びを生ずるが、苦樂の變化は絶えず起つて來るものである。此中の利と譽と稱と樂とは吾等の皆悦んで迎ふるものであるから四順

といひ、衰と毀と譏と苦とは吾等の會ふことを厭ふものであるから四違と名くるのである。斯る八風に動されぬ者は人間の寶として重んぜらるべきものである。

以上は實性論の中に説かれた眞寶の説明の概略であるが、此等六種の徳を具へたる寶が世間に存在するに依つて世間は明るくなり、健かになつて行くのである。佛が世の寶として尊ばるべきものなることは言ふに及ばぬ次第であるが、佛の吾等に遺したまへる法の中には佛の御心が悉く宿つて居るのであるから、是れ亦寶として重んぜらるべきである。而して此の法を世に弘むる者は即ち僧である。若し僧の力がなくば、多くの人は佛の在すことも、法のあることも知らずして終るであらう。されば僧も亦佛と法とに配して三寶の一とせらるゝのである。但し心にも信ぜず、身にも行はぬ所を唯だ口にのみ説くならば、其の説く所が如何に巧であつても貴ぶに足らぬことは、今までに屢々いつた通りである。此の如き説法は俳優の舞臺に於ける演技にも劣れるものである。自分などの青年時代に團十郎といひ菊五郎といふ名優があつて、互ひにそれ々の特色を發揮し、自分などは此の二人を殆んど優劣なき者として考へて居た。二人も亦互ひに尊敬しあつて、互ひに『吾は彼に及ばず』といつて居た。或時會我兄弟討入の狂言に團十郎は五郎に扮し菊五郎は十郎に扮した。愈々工藤祐經の狩屋の前まで来て、最後の別

を惜むといふ段となる。敵の中へ斬入るのであるから、固より生命は無きものと覺悟しなければならぬ。されば今が互ひに顔の見納めであるといふので、烏帽子が湛つた雨の雫を酒に擬し、それを酌み交して別を惜むのである。三十餘日の間毎日此の狂言を演じて居るのであるが、二人ともに此の段まで来ると感極まつて、毎日必ず涙を落し、樂屋へ入つてから『今日も泣いてしまつた』と語りあつたさうである。斯くてこそ多くの見物人を感動せしむることも出来るわけである。

自ら僧と稱して經を誦し法を説く者にして、此の二名優に愧づること無きを得るもの、果して幾人か。

眞に僧らしい僧が多く世に出たなら、佛の尊い教が何時までも衰微しては居ないであらう。是れは少しく脱線したやうであるが、感ずるまゝを附け識した。

眞の僧と稱せらるべき人々、例へば前段に列擧したる天台傳教とか、乃至は慧可とかいふ人々は何れも心に深く之を信じ、身に篤く之を行ひ、而して之を人に向つて説いたのであるから、世を動すほどの力のあつたのも不思議ではない。昔彌蘭王が那先比丘に向つて『人未だ涅槃の道を得ずして如何ぞ涅槃の樂たることを知るや』と問うた時に、那先は之に答へて

人生れて未だ曾て手足を截らざるも、能く其の痛みの劇しきを知るは、他の手足を截れる者の呻吟するを見たるによる。前の聖者現に涅槃の道を得て其の樂を語る。此を以ての故に其の樂たるを信するなり。

といつたと傳へられて居るが、まことに尤なる語である。斯く先づ者が其の身を以て後なる者を率ゐ、その率ゐられたる者が又漸く徳を積んで身を以て其の後の者を率ゐ、之によつて佛の遺された教が永く世に傳はるのは貴いことである。自分は十六七歳の時に數人の友達と共に相模河の沿岸、津久井郡の山々を歩きまはつて夜半になつて八王寺まで辛うじてたどり着いたことを覚えて居る。其の頃は昨今のやうに登山といふことの流行せぬ時代であつたので、吾々の用意も至て不完全なものであつたが、それでも老人達の注意によつて各自に蠟燭を二三本づゝ持つて行つた。それが大に役に立つた。其の山の中をさまよつて居る間に夜になつてしまつたが、雨模様空には月もなく星もなく、あたりは眞暗闇で、一行は動もすれば離れ離れになりさうである。そこで銘々蠟燭に火を點けて片手に持ち、最も元氣な一人が其の蠟燭を高く差上げながら先に立つて、二人目の者はそれを目當てに續きながら又同じやうに蠟燭を高く差上げて次の者に相圖をする。其の次の者も之に倣ひ、互ひに勵ましあつて漸く山の中を通り抜け

た。八王子の町へ着いてから、互ひに危い、恐ろしい思ひをしたことを語りあつて相慰めたが、

あの時誰かの蠟燭が一つ消えたら、どんなに心細いことであつたらうが、そんな事もなくてマア宜かつた。

と自分が言ひ出たら、他の者も『實にさうであつた』と口々に言つて居た。自分は今日になつて其の當時のことを思ひ出し、『吾等の先へ立つて行つた人は皆其の蠟燭の火を消さぬやうに用心して、導きつ導かれつして貴い佛法を吾等へまで傳へてくれたのである。吾等も矢張り蠟燭を手にして其の後に續かなければならぬ』と痛切に感ずるのである。

併し佛ならぬ者は誰でも完全なものではなく、其の心には多少の惑が残つて居る。それ故に動ともすると氣が緩みがちになるのである。易の繫辭傳に

危しとする者は其の位に安んずる者なり。亡びんといふ者は其の存を保つ者なり。亂れんといふ者は其の治を有つ者なり。是故に君子は安くして危きことを忘れず、存して亡ぶることを忘れず、治つて亂るゝことを忘れず。是を以て身安くして國家保つ可きなり。

とあるは至言である。一國を保つも一家を保つも、乃至は教の生命を保つも理に於て異なる所は

ない。何れにも皆此の如き用意がなければならぬ筈である。併し千辛萬苦して困難の中を通り抜けた者も、漸く順境に入ると心が緩んで失敗し、切角の苦勞を空にしてしまふ例が世間に少くない。唐の玄宗皇帝は頗る聰明な人で、韋氏の亂を平けて帝位に即いた初めには大に風紀を振刷し、政治に力を用ゐ、名君の聞えがあつたのであるが天下太平なるに及んで漸く心緩んで奢侈に耽り、終に安祿山の反するに及んで天下の大亂となり、久しく國民に塗炭の苦を嘗めさせたことは誰もよく知る所であるが、獨り玄宗のみを尤むることは出来ぬ。此處が人間の弱點である。

多くの宗教の弘まつた歴史を見ても、初め其の宗教が世間の迫害にあひ、容易に弘まりさうにも見えぬ時には信徒の結束も頗る固く、又健氣なる殉教者なども出るのであるが、斯る困厄の中を脱して愈々天下に流布する段になると、結束も亂れ風紀も崩れて、種々の弊害が生み出されるのである。釋尊が阿難に向つて『我が佛法は餘の能く破るべきにあらず。是れ我が法の中の諸の惡比丘、猶ほ毒刺の如くにして、我が三阿僧祇劫積行勤苦して集めたる所の佛法を破らん』と仰せられたのも、此邊を憂慮せられて嚴しい訓戒を與へられたわけであらう。然るに佛が斯くまで嚴しく戒められたにも拘はらず、後世になると種々の弊が生じて、僧らしからぬ

僧も多く出るやうになつたのは是非もない次第である。智度論などには四種の僧が分けて擧げられて居る。それは

- 一に勝義僧。
- 二に世俗僧。
- 三に癡羊僧。
- 四に無慚愧僧。

といふのである。第一の勝義僧のみが眞の僧である。是れは勝義を求めて怠らぬ者である。勝義とは即ち絶對の眞理のことで、勝義を求むるとは佛の境界に達せんことを理想として自ら勵むことである。僧たる者は誰も此の如くでなければならぬ。第二の世俗僧といふのは特に惡を爲し罪を重ねるといふのではないが、世間の人の爲す所に倣つて唯だ毎日を安佚に送ることのみを念とする者である。是れは世間の眼から見れば別に尤むべき者でもないが、僧たる責任を全く果さぬのであるから、正しい意味からいへば大罪人である。

爲すべからざる事を爲すのと、爲すべき事を爲さぬのとは、共に罪である。第三のは何事をも爲さず、又何事をも求めず、至て穩かに黙々として、毎日を送るもので形は僧でありながら癩の羊と異なる所はない。第四に無慚愧僧といふは全く反省の足らぬ者である。反省の足らぬ者は自分の缺點に自分で氣がつかぬ爲に、段々と多く過を重ねて行くやうになるものである。たとへ少しく智識があつて人に推されて居るやうな者でも、慚愧の念が無ければ

少しも嘉すべき所はない。少しの智識などは却て過を文る種となるにすぎぬ。

比丘常に當に慚愧すべし、暫くも替ることを得るなかれ。若し慚愧を離るれば則ち諸の功德を失ふ。(佛遺教經)

と戒められてある通り、無慚愧の罪は尤も恐るべきである。以上四種の僧の中で勝義僧は至て少く、後の三種の僧のみが多いために、佛法の弘通が果敢々々しく行かぬものと思はるゝのである。

但し吾等は決して失望すべきではない。又徒に人の過を數ふるのみを以て終るべきでもない。佛は末世の有様を洞見して之を白法隱没の世と名けられた。黑白を以て邪正の喩とするので、白法とは即ち正法である。末世に至つて人の心が甚しく險惡になれば、正法は世に行はれずして亡び去るであらうと豫言せられたのである。併しながら此の白法隱没の時こそは大白法の世に弘まるべき機運の新しい動き來る時であるとも豫言せられた。吾等は極めて微力な者であるけれども、共に協力一致して怠らず撓まずに、道を求め又道を弘むるために盡すならば、佛の豫言を實にすることも決して出来難い業ではあるまい。寒さを厭ふものは如何にもして火に近づくべきである。暑さを嫌ふものは如何にもして扇を捜し求むべきである。徒に寒さを訴へ

たり、暑さを呪つたりして居ても、何の得る所もない。

道の行はれぬことを悲しく思ふ者は、たとへ吾一人たりとも進んで道を究め、又進んで道を弘めやうと決心すべきである。

一人が何時までも一人で居るものではない。一人は千萬人の始めである。所謂泰山の一塊石、大海の一涓滴である。

自分は學校を卒業して間もなく安房の北條へ遊びに行つたことがあるが、その時北條に病後の保養をして居た或る先輩を尋ねた。其の人は非常に修養の積んだ人で自分は平生から深く推服して居たのであるが、今度自分も學校を卒業して世間に立つに就て、何か心得となるべきことを聞きたいと思つて尋ねて行つたのであつた。幸に其の人は家に居て種々の話をしてくれたが、『近頃運動の爲に毎日自分の食ふだけの米を搗いて居る、見てくれ給へ』といつて、板の間に踏臼の置いてある所へ連れて行つて、『追々搗き方が上手になる』といひながら、其の臼を踏んで見せたりなどした。それから又話を續けて、『此頃米を搗きながら獨りでツクツク考へたのだが、何事をするのでも米を搗くやうな考へでやつて居れば宜いものではあるまいか。

杵はいつでも同じ所ばかりを搗いて居るのだが、それで此の臼の中の米が皆白くなるので

ある。

杵で搗くので臼の中の米が皆ザラ／＼と動いて、順々に杵の當る所へ廻つて来るから、結局杵の當らぬ米は無くて、皆白くなつてしまふのである。吾々の仕事も此の通りで、むやみに間口を擴げる必要はない。一つ事をコツ／＼やつて居れば自然四方に影響を及ぼして長い間には相當な成績が擧がるのである。君なども餘り間口を擴げたららずに、眞面目にやつて行く方が宜からう』といつてくれたが、自分は其の時の訓戒を今でも思ひ出して、實際有難く思ふのである。小さい仕事でも至誠を以て之を續けて居れば、決して小さい仕事ではないのである。

吾等は各自に正しいと信ずる事を『自分一人でも、仕遂げやう』といふ決心を以て續けて行くべきである。若し其の信ずる所が果して正しいものであつたなら『一人でも……』と思ふ甲の人と乙の人が結合して二人となり、又『一人でも……』と思ふ丙の人も之に結合して三人となり、終には世を動すべき力ともなるであらう。それ迄には種々の曲折を経、種々の困難を越えなければなるまいが、それは已むを得ぬことである。如何なる事でも苦を経ずして大成するものではない。西行法師の歌に、

嵐吹く峰の木の間を分け來つる谷の清水に宿る月かけ

といふのがある。峯の木の間の薄暗い所を流れて來ながら嵐に吹かれて浪を立て、やう／＼麓の谷間に落つた水は、明るい月の光を宿しながら初めて靜かに流れるのである。又芭蕉が羽黒山で詠んだ句に

雲の峰いくつ崩れて月の山

といふのがある。澄み渡つたる空に懸つた月の光が靜かに山を照すのは、雲の峰が幾つか崩れての後である。其の多くの障りを越えた後に大なる悦びのあるべきことを確信して、勇ましく困苦に堪へなければならぬ。

前にも幾度かいつた事であるが、貴い佛法の弘通を出家の人達にのみ任せて置かうと思ふのが元來間違つた考へ方である。勿論出家といつても形ばかりの出家でなく、心の出家ならば結構である。維摩經を讀むと、維摩詰は羅睺羅に向つて出家の眞の意義を説いて、

衆の雜惡を離れ、諸の外道を摧き、假名を超越し淤泥を出で、繫著無く我所無く、所受無く擾亂無く、内に喜を懷きて彼の意を護り、禪定に隨ひて衆の過を離る。若し能く是の如くならば是れ眞の出家なり。

といひ、更に多勢の長者の子に向つて

汝等正法の中に於て宜しく共に出家すべし。所以は何ん、佛世には値ひ難ければなり。といつた。之を聞いた長者の子等は、維摩詰が自分達に家族を棄て山に入ることを勧めたのであると思ひ、『父母の許しを得なければ出家することは出来ぬ』と答へた。その時に維摩詰は彼等に誨へて、

汝等便ち阿耨多羅三藐三菩提心を發せば、是れ即ち出家なり。是れ即ち具足なり。

といつた。眞の出家といふは家族を捨て山寺に住むことではない。世間の生活をしながら世間の爲に囚はれず、自ら道を樂んで、世の人を濟ふ爲に力を盡し、淨き心を以て毎を送ることである。結局は阿耨多羅三藐三菩提心、即ち佛智を求むる心を起すのが即ち出家である。此の如きは所謂『心出家』であつて、『身出家』に勝れること遠きものである。

此の如き眞の出家の人の努力によつて佛法は世に弘まるのである。形ばかりの出家の人に任せて置くべきことではない。又僧といふのも其の心の持ち方に依つて名くるもので、其の外貌に就ていふのではない。吾等の如き世俗の生活をして居るものが共に僧たる覺悟を持たなければならぬのである。前にもいつた通り、元來僧といふは梵語の僧伽を略したのであるが、僧伽の義に就て智度論には、

多くの比丘一處にして和合する、是を僧伽と名く。

とあり、行事鈔には

能く聖法を御し前事を辨じ得る、之を名けて僧と爲す。僧は和合を以て義と爲す。

とある。又大乘義章には

衆の行徳乖かざる之を名けて和と爲す。

とある。和といふのは單に争はぬといふやうな事ではない。眞の和合は互ひに私心を捨て、互ひに重んじあひ敬ひあふことに依つて初めて成立つのである。されば又『和敬』ともいふのである。此の和敬のことに就ては、前に戒律に就て説いた時に一通りいつたが、此處に行事鈔の文に據つて、再説することにしやう。

行事鈔の文に據ると、先づ和合を大別して理和と事和と爲し、事和の中に於て六種の別を立つるのである。此の理和と事和を共に遺憾なく具へたものが眞の僧伽である。先づ理和といふ事に就ては、

一に理和とは謂く擇滅を證するが故に。

とある。即ち共に同じ佛法を學んで、共に其の悟り得たる所が一致することである。擇滅とい

ふのは涅槃といふのと同義である。擇とは智慧の力によつて正しき道を選択することである。之によつて凡ての惑を滅するのである。されば俱舍論には擇力によりて得る所の滅を擇滅と名く。

と説明してある。眞理に二通りはないのであるから、誰の悟り得た所も結局は一致すべき筈である。斯う考へて見ると、大乘の敎を學んで怠らぬものは、皆和合一致すべきに定まつて居るわけである。

併し最初から斯ういふ境界に到ることは出来ぬ、それは修行を積んでからのことである。その修行を積む間には事を守つて互ひに相扶け相敬して行かなければならぬ。事とは即ち實行をいふのである。之に就て行事鈔の文には

二には事。此の別に六義あり。一には戒和同修。二には見和同解。三には身 and 同住。四には利 and 同均。五には口 and 無諍。六には意 and 同悅なり。

とある。是れは共に一の僧房に住む人々の間に於て實行せらるべき項目であるから、其儘に今日の吾等の生活に應用の出来ぬこともあるが、其の精神を學ぶことは誰にも出来るのである。今之に略解を加へて見ると、第一に戒和同修といふのは佛の定め置かれたる戒律を共に守つ

て日々の言行に失の無いやうに努むることである。凡夫が佛の境界に近づくためには是非とも戒律を守つて、心に蟠る所の煩惱を除き去ることに努めなければならぬのであるが、他人の失はよく見えても、自分の失の見えぬのが凡夫の常である。それ故に互ひに忠告しあつて、其の失を匡して行くことが極めて必要である。併し自分の過失を指摘された時には、人情としてあまり愉快には感ぜぬものである。又他人の過失を直言することも、餘程の親切心のない限りは出来ぬものである。唯だ共に佛法を學ばうといふ熱心のある者同志であれば、互ひに忠告しあつて互ひに悦びを感じる事が出来る。是れが即ち戒和同修である。

第二に見和同解といふのは道理を見る上に於て互ひの意見の一致を期することである。共に佛の敎へを聽いても、人々の智識の程度に相異があり、又其の性情も幾分か相異つて居るから、各自の解し得たる所に多少の相異のあるのは免れ難きことである。併し絶對の眞理が二通りも三通りもあらう筈はない。各自の解する所が一致せぬのは畢竟何れも完全なる解し方でないからである。それ故に互ひに其の所見を述べて其の失を匡しあひ、互ひに我執を捨て結局其の一致を見得るやうに努力することが肝要である。是れが即ち見和同解である。

第三に身 and 同住といふは日夜互ひに睦みあつて共に住むことである。之が爲には互ひに私心

を去ることに努めなければならぬ。唯だ親しくするばかりでは、久しい間には亂れて来て、互ひに我儘を募らせた末に仲違ひをするやうにもなる。互ひに『末には佛ともなるべき者である』と思つて敬しあふことを忘れず、互ひに他の長所を認めて自己の短所を反省する時には、其の交りの永く續くに随つて益々睦くなつて行くに違ひない。是れが即ち身と同住である。

第四に利和同均といふは衣食等に於て少しも厚薄の差の無いことである。出家の人は自ら耕さず自ら織らず、又自ら商賣もせず、檀越の布施によつて生活をして居るのであるが、その生活が皆平等でなければならぬ。檀越の中には種々の性格の人が居るから、其の中には自分の好む人には多く布施し、あまり好まぬ人には多く布施せぬといふやうな者もあるであらう。随つて同じ僧房に住む人々でも、或人は比較的多く與へられ、或人はあまり多く與へられぬといふやうな等差も自然起り得るのである。併しながら共に佛に事へ共に道を學ぶ者同志であるから、多く得たものが多く使ひ、少しく得た者が不自由をするといふやうなこと無く、衣食住に於て凡て厚薄無くして生活すべきである。是れが即ち利和同均である。

第五に口和不諍といふのは一切の争論を慎むことである。勿論争論といふは他の者を壓伏して自分が勝を得たいといふ私心を以て相争ふことである。佛の御教を解する上に於て、若くは和諍である。

其他の事に關して互ひに意見を闘はせて相砥礪することは、智を磨き覺を成ずるためであるから結構である。又前にいふやうに互ひに忠告しあつて過失を改めて行くことも固より大切である。併し其の討論なり忠告なり、何れも無私の心よりして出たものでなければならぬ。若し少しなりとも他の失を數へて自ら快しとするとか、自己の才學を誇示して他を壓伏しやうとかいふ念が交るならば、佛弟子たる法に背くものである。常に相敬愛する念を以て語るのが即ち口和不諍である。

第六に意和同悦といふは互ひに相許して、共に道を學ぶことに満足を感じつゝ、共に住むことである。凡夫の身と生れながら佛の境界に近づくべき道を示されて、日夜その道を修むることが出来るのは抑も何といふ有難い事であらう。而も自分と志を同する友があつて、互ひに相砥礪し相扶助して行くことが出来るのである。人生に此より大なる悦びはない筈である。凡て世間の名利權勢は之を得るが爲に非常なる苦心努力を要し、之を得た時には又人が之を奪ひ去らんことを恐れて、一層の苦勞が増すのである。たゞ道を學び法を求むるものは、己の得たる所を人に頌つことに又一層の悦びがある。斯る悦びを共にして感謝しあふのが即ち意和同悦である。

但し佛法を學んでも其の心が純一でなく名利の念を満足せしめんが爲に學ぶ者もある。さういふ者には理和も事利も決して得られぬのである。前にいふ柔軟の心をもてる者の間にのみ眞の和合が見らるゝのである。凡て正しい道を行ずるものは「たとへ一人でも必ずやる。周圍が盡く敵になつても此の志は渝へぬ」といふだけの覺悟がなければならぬのは勿論であるが、斯ういふ覺悟をもつた人が志を同うして相結合すれば、それが最も大なる力となる。自分の欲望を満足せしめんが爲に結合したものは、少しも頼みにはならぬ者である。彼の赤穂の義士が四十七人結束して、復讐の本懐を達したのは、四十七人の各自が少しも名利の念をもたなかつた爲と見るべきである。徳川時代には殆んど毎年のやうに復讐があつたが、其の多くは主君の許可を受けて復讐のために旅立ちしたもので、其の本懐を達しさえすれば何れも元の主君の所へ歸參し、以前よりも良い待遇を受くべき見込みのあつた者である。獨り赤穂の義士の場合は全く其の性質がちがふ。若し敵を討ち損ずれば勿論生きては居られぬのであるが、若し本懐を達した時には、浪人が天下の旗本を殺したのであるから死罪に處せられるに極つて居る。何れにしても死は免れぬのである。

誰も生きやうといふ者が無かつたので、其の結束が極めて固かつたのである。

吾等は此の點に於て大に教へらるゝ所があると思ふ。

討入より十日あまり前、即ち十二月二日に彼の人々は深川八幡前の茶店に會合して起請文に名を署して血判をしたのであるが、その起請文には吉田忠左衛門と原惣右衛門とが大石内藏助の旨を受けて起草した所の四箇條の心得書が附いて居る。其の第一條には

冷光院様御尊離吉良上野介殿討取る可き志これ有る侍共申合せ候處、此節に及び大臆病者心を變じ退散仕り候者撰み捨て、唯今申合せ必死相極め候面々は御靈魂御照覽遊ばさる可く候事。

とある。名の爲でも利の爲でもない、唯だ亡君の靈魂の照覽あらんことを期して、此の大事を決行するのである。次に其の第二條には

上野介殿御屋敷へ押込み働きの儀に、功の淺深これある可からず候、上野介殿の印揚げ候者も、警固一通りの者も同然たるべく候。然れば組合ひ働きの役好み申すまじく候。尤も先後の争ひ致す可からず候。一味合體、如何様の働役に相當り候とも難澁申すまじき事。

とある。此の如き精神によつて初めて眞の一致協力が出来るのである。次に其の第三條には一味の各存寄申出られ候とも、自己の意趣を含み、申妨げ候儀これあるまじく候。誰にても

理の當然に申合ふ可く候。兼て不快の底意これあり候とも、働きの節互に助けあひ、急を見
繼ぎ、勝利の全き所を専に相働可き事。

とある。此の公明正大なる心を以て相扶け相救ふならば、大事は必ず成就すべきである。さて
最後の一條には

上野介殿十分に討取り候とも、銘々一命を遁る可き覺悟これ無き上は、一同に申合ひ、散々に
罷成り申すまじく候。手負の者これあるに於ては、互に引懸け助合ひ、其場へ集り申す可
き事。

とあり、なほ重ねて

右四箇條相背き候はゞ此一大事成就仕るべからず候。然らば此度退散の大臆病者と同然たる
べき事。

とある。此の結末の一語は特に人々の凜乎たる決心がよく現はれて居る。今日から推察して見
ると、首領たる大石内藏助はまことに立派な人物であつたに違ひないが、その統率の下に集つ
た四十六人が盡く大石のやうな人物であつたのでは無い。然るに其の結末は極めて固く、立派
に復讐の本懐を達したのみならず、翌年二月に至つて切腹をして果てた迄の間に一人として卑

怯未練の舉止をするものは無く永く、武士の模範として仰がれたのは、畢竟

彼等の中の一人でも生に對する執着をもたなかつた爲

と思はれる。

生に對する執着のない者は、何の恐るゝ所もなく又何の求むる所もないから、悠々として世
に處することが出来るのである。近松門左衛門の作には心中物が多いが、其の心中する男は皆
思慮分別の缺けた馬鹿者である。紙屋治兵衛の如きも妻子のある身でありながら小春といふ遊
女に馴染み、而も其の小春が治兵衛の妻の懇請に動されて、實は死を決して表面だけ治兵衛と
の縁を斷たうとするのを、其の苦心を察することも出来ず、一途に薄情者と思つて腹を立つほ
どの大馬鹿者である。然るに一切の事情が分つて小春に對する怨みも解け、網島の大長寺の前
で情死するといふ段になると、全く人間が變つたやうに落ちてしまつて、先づ小春を刺殺し
て其の屍骸を見苦しからぬやうに片附け、その後自分は悪びれもせず死に着いた。最初から是
れ程其の心に落着きがあつたら、情死するやうなハマに陥らずに濟んだであらうと思はれる。
是れは不思議なことやうであるが、少しも不思議ではない。彼は死を決したるが故に、斯く
落着きが出来たのである。一切の煩悶は死を決することに依つて掃ひ去られたのである。彼の

死は少しも稱むべきものではないが、それでも死を決したことに依つて、以前の治兵衛よりも幾分か男らしい男になることが出来たのである。

浅はかなる愛に殉ずる者でさへ此の如くである。況して大義に殉ずる決心をした者が、武士の二本として仰がるべき態度を執り得たことは少しも不思議でない。

前にもいつた通り、生命が要らぬといふ覺悟であれば、地位も身分も財産も一切要らぬのであるから、何の恐るゝ所もなく、又何の囚はるゝ所もなく、清く朗らかな心持になれるのである。此の如き心をもつた者の團結こそは、眞に鞏固なる團結である。

一般の武士の氣風からいへば、刑罰に處せらるゝといふのは耻かしいことである。それよりも自殺して果つる方が遙かに望ましいことなのである。然るに赤穂の義士等は復讐の志を達した後自殺するだけの暇は充分あつたにも拘はらず、自ら名乗つて出て公儀の處分に任せられた。それは『既に志を達した以上は何も求むる所はない、名譽も何も一切入らぬ。如何様にも處分せらるゝ儘に任せて置けば宜い』といふ、全く執着のない心持になつて居た爲と思はれる。此處に非常なる貴さが感ぜられる。其の最期の有様を見ると、何れも餘裕綽々たるものであつた。大石内藏助は『何か書置きでもあるならば遠慮なく認めらるゝが宜い。後で宛名の

人へは確かに届けやう』といはれた時に、内藏助は之に答へて

御懇命忝くは存じますが、此期に及んで何も申残すことは御座りませぬ。

といつた。又堀部彌兵衛は

自分は性來下戸であるから、縁者の堀部甚之允と申すものに餘り飲まぬやうに、平生意見をして居りましたが、此頃考へて見ると少しは飲むのも宜いやうに思はれます。何卒甚之允に、彌兵衛が飲めと申したと御傳へ下さい。

といつた。如何にも洒々落落たる此の老人の面目が躍如として居る。

義士等は細川其他の四家へ預けられた。其の中にも、細川家では首領の大石その他都合十七人を預つたのであるが、その待遇は最も懇切であつた。毎日の食事も二汁五菜といふ極めて鄭重なもので、いかに辭退しても肯入れられなかつた。然るに細川家へ御預けになつた四日目に『今日は主人が少々存寄りがあつて精進をしますので、御一同にも精進料理を差上げます』といふことであつた。それは細川越中守が義士の助命になるやうに神佛に祈願するために精進齋したのであるといふことが分つて、十七人の人々は深く感激した。又細川家の臣下等も主君と同じ心で、愛宕神社に參拜して義士等の助命になるやうに祈願を籠むる者も少からずあつ

た。斯くまで義士に同情をもつて居た細川家の人々は、愈々義士の切腹といふことが確定したと聞いて非常に落膽した。それで切腹の當日も愈々最後といふので懇なる響應をしたが、誰も皆失望の餘りにボンヤリして居て、茶を出すことを忘れた。十七人の中には壯年血氣の者も居たが、其等の人々は無遠慮に、

今日は別して御丁寧な御馳走を頂きましたが、何時もの通りの御茶が出ませぬかな。

といつたので、接待の人達は大に慌て、小坊主に命じて茶を運ばせた。細川家の人々の純情も誠に感ずべきものであるが、義士等が愈々切腹といふ時に迫つて、斯ういふ笑談をいふ程の餘裕をもつて居たのは真に稱歎すべきことである。

此の如く四十七士は何れも所謂『死を視ること歸るが如き』人々であつたので、其の辭世の歌や句にも其の心持がよく現はれて居る。間喜兵衛の辭世は

草枕むすぶ假寢の夢さめて常世に歸る春のあけぼの

とあるが、如何にも悠々たる其の氣分が窺はれて貴い。又大高源吾は子葉と號して俳諧を善くした人であるが、其の辭世の句は

梅で飲む茶屋もあるべし死出の旅

といふのであつた。此の一句には人生に對する一切の執着を去つた人の面目がよく現はれて居る。又武林唯七は

三十年來一夢の中。生を捨て義を取る幾人か同じき。家郷病に臥して雙親在り。膝下に歡を奉ずること恨むらくは終らざるを。

といふ一絶を書いて、自分は志を果して死ぬのであるから少しも思ひ残す所はないが、兩親に對する孝養を終ることの出来ぬのが残念であるといふのである。『忠臣は孝子の門より出づ』といふ古語もあるが、忠孝共に人の至情より發するものであるから、親に事へて孝なる者は必ずや君に事へて忠なる者である筈である。此の一絶に唯七其人の貴い性格がよく現はれて居るやうに感ぜられる。

以上赤穂義士に就ての話説があまり長きに過ぎたやうであるが、『生に執着せぬ者の力』が如何に偉大であるかを證するに足るであらうと思ふ。併し凡ての人が赤穂義士のやうな境遇に置かるゝことは無いのであるから、いつも決死の覺悟をもつて居るには及ばぬのである。唯た最も大切なのは

自分の生命よりも重んずべきものがあるといふことを常に忘れぬ事

である。此の大切な事を忘れなければ、名利の念に誤らるゝといふやうな恐れは決して無い。此の如き人のみが世を導き人を教ゆべき力をもつて居るのである。彼の赤穂の義士は復讐の大事を果すに當つて、身命を惜まぬ覺悟を固めて、武士の根本と仰がるゝほどの立派な態度を執ることが出来たのであるが、實は何人も平生に於て此の覺悟をもつて居なければならぬのである。大乘の教を學んで怠らぬものは皆此の覺悟をもつことが出来る。此の覺悟をもつ者は互いに私心を捨て和合一致することが出来るのである。それが眞の意味に於ける僧といふものである。

維摩詰のことは前にもいつたが、彼が病に臥して居ることを聞いて、文殊師利等は釋尊の命を受けて其の病室を見舞ひ、「佛は慇懃に問を致したまへり、居士の病は何によつて來れるか」と問へるに對して、維摩詰は

一切衆生病めるを以て是故に我病む。若し一切衆生病まざることを得れば則ち我が病滅せん所以何んとなれば、菩薩は衆生の爲の故に生死に入る。生死有れば病有り。若し衆生病を離るゝことを得れば則ち菩薩また病無けん。譬へば長者唯一子有りて、其の子病を得れば父母亦病み、子の病愈れば父母も亦愈るが如し。菩薩も是の如し。諸の衆生に於て之を愛する

こと子の若し。衆生病むときは菩薩も病み、衆生の病愈れば菩薩も亦愈ゆ。

といつた。而して一切衆生の病とは身の病にあらずして心の病なることを語り、我既に調伏す、亦當に一切衆生を調伏すべし。

といつた。調とは即ち調和の義、伏とは即ち制伏の義である。華嚴探玄記に『身々意を調和控御して諸の悪行を制伏除滅するなり』といふのは簡明なる説明である。自己の心を調伏して煩惱を絶てるが故に、他人を調伏して其の煩惱を除かしむべき力が具はつて居るのである。維摩詰はなほ之に續けて、

病の本を斷ぜんとすれば而も之を教導す。何をか病の本といふ。謂く攀緣あり。攀緣あるに從ふを則ち病の本と爲す。何を攀緣せらるゝ。謂くこれ三界なり。云何か攀緣を斷ずる。無所得を以てす。若し無所得なれば則ち攀緣なし。何をか無所得といふ。謂く二見を離るゝなり。何をか二見を離るゝといふ。謂く内見外見是れ無所得なり。

といつた。此の短い語の中に維摩詰の本領がまことに能く現はれて居るやうである。病の本とは即ち煩惱である。其の煩惱を除くのは如何にして出来るかといへば、彼を教へて正しい道に導き入れるより外はない。煩惱が如何にして起るかといへばそれは攀緣の作用であ

る。縁とは吾等の周囲の境遇事情のことである。吾等の心は常に周囲の境遇事情によつて動くことを免れぬ。その有様は宛も猿が樹の枝を攀ぢて絶えず、動きまはつて居ると少しも異なる所はない。之を名けて攀縁といふのである。然るに此の境遇事情はいつも變化するものであるから、吾等の心に片時たりとも平和が得られぬのである。三界とは欲界、色界、無色界をいふ即ち吾等の生を受くべき一切の世界である。吾等は幾度生をかへても此の三界の外に出ることには出来ぬ。併し如何なる境界に在つても、其の境界の爲に制せられなければ、心は常に平和である。それには佛の正法に歸依して修養を積むことが肝要である。斯く修養を積んだ結果として無所得が得らるゝのである。無所得とは心中に全く執著の無くなつたことで、慧遠は之を説明して、

眞を觀じて情を捨つるを無所得と名くるなり。

といつた。涅槃經には

無所得とは則ち名けて慧と爲す。有所得とは則ち名けて無明と爲す。

とある。無明とは惑のことである。また同じ經の中に、

一切の凡夫は生死に輪廻す、故に所見有り。菩薩は永く一切の生死を斷ず。是故に菩薩を無

所得と名く。

ともいつてある。生死とは前にもいつた通り、人生に於ける凡ての變化のことである。此の一切の變化によつて影響を受くる所がなければ、何處にも安樂の天地がある。然らば如何にして無所得になれるかといへば、二見を離るゝに依るといつてある。二見とは内見外見である。内とは吾等の心の中のこと、外とは吾等の周囲のことである。内見を離るゝといふのは吾等の心の中に起つて來る種々の欲望を制することである。外見を離るゝといふのは吾等の周囲の一切の事物に煩はされぬことである。若し佛の心を以て吾が心とすることが出来れば、必ず内見と外見とを離るゝことが出来る。佛は一切衆生を救はんが爲に此世に出現せられ、

唯我一人のみ能く救護を爲す。(法華經譬喻品)

と仰せられた。吾等は佛と比べて見れば天地ほどの懸隔のある者であるけれども、慧遠がいつたやうに『眞を觀じて情を捨つる』ことに努むるならば、佛の心を以て吾が心とすることが出来るであらう。眞とは眞理である、情とは私情である。私情からいへば、他人に迷惑をかけても自分一人の欲望を充す方が宜いのであるが、それは相扶け相保つて、共に生存して行くべき人間の本性に背くことであるから、斷じて之を捨てなければならぬのである。佛は『唯我一人